

(卷十四) 矢矧鷲坂手起河原鬪事

義貞ハ兼テヨリ馬廻リ勝レタル兵ヲ七千余騎、栗生篠塚名張八郎トテ、天下ニ名ヲ得タル太力ヲ眞先ニ進セ、  
(卷十四) 箱根竹下合戰事

義貞ノ兵ノ中ニ、杉原下總守、高田薩摩守義遠、葦堀七郎、藤田六郎左衛門、川波新左衛門、藤田三郎左衛門、同四郎左衛門、栗生左衛門、篠塚伊賀守、難波備前守、河越參河守、長濱六郎左衛門、高山遠江守、園田四郎左衛門、青木五郎左衛門、同七郎左衛門、山上六郎左衛門トテ黨ヲ結ビタル精兵ノ射手十六人アリ、一樣ニ笠符ヲ付テ、進ニモ同シク進ミ、又引時モ共ニ引ケル間、世ノ人はヲ十六騎ガ黨トソ申ケル、

(卷十六) 新田殿湊河合戰之事

義貞ノ被レ乗タリケル馬ニ、矢七筋マテ立ケル間、小膝ヲ折テ倒レケリ、小山田太郎高家、己レカ馬ヲ義貞ニ乘奉テ、  
我身ハ徒立ト成テ追懸ル敵ヲ防ケル、

韜畧全書

我朝洪武二年、遣使趙秩往諭、因命僧九人隨秩、稱臣入貢、是年五月、海沙餘寇犯我永嘉、始於閩海設備倭官、終洪武之世、閩廣登萊俱遭寇掠、永樂二年來貢、并擒獻犯邊賊、因給與勛合百道、定為三十年一貢、正統中、倭奴入鄞、大肆焚劫、宣治間、寇貢相繼、正德六年、鄞民宋素卿叛附夷人、交通番貨、閩浙之民爭趨之、

嘉靖元年三月、使僧宗設、使人謙道等、稱貢至鄞、及驗辨勛合、謙道等遂于城中、掛甲攻瑞幸得奔活、上令造船賜放還國、自後未聞大為寇掠、其後通番之人日盛、閩賊陳思盼據橫港、徽賊許二據雙嶼、虎視海上、許為中丞朱統敗之、乃懼匿去、不知所終、其募下司鄉僧王直号五峯、多機畧、人推服之、移駐洵港、以毛海峯為子、分領黨衆、壬子夏、五峰與毛海峰、徐碧溪、徐元亮等寇黃岩、掠金帛器物數十萬餘、獨不犯通番之家、浙巡柱史懼、復奏設巡視中丞王忬焉、癸丑甲寅十余年間、連犯閩浙、殆無虛日、百姓流離、四方騷動、巡撫胡宗憲以計誘誅之、始稍休息、

(嶺田楓江詩)

巨礮震天堅城摧、夷船進港漢軍走、風鶴心寒况船礮、咽喉之地棄不守、誰招寇者林尙書、海疆新令電激如、寬猛二字失舉措、每事都出憤懣餘、鴉片煙消起土匪、終見長鯨掉其尾、陣雲慘澹日無光、家々乱入黑白鬼、十四松櫟風凄々、死骸橫路怪鳴啼、邊將空起望洋嘆、封閩建議今噬臍、宸廷泣降和戎詔、北爺南戚無人肖、哀哉百万講和金、往賈夷酋一朝唉、嗟我神州屹海東、四海清涵蒼波中、天賜前鑑非無意、婆心記事亦微衷、嗚呼海國要務在知彼、預備嚴整時有待、雖無神風覆万寇、復遣生還三人耳、

嘉永己酉春三月、題於澤上寓居、時絲管沸樓、遊塵漲空、生遇太平、定可樂也、 楓江釣人(嶺田鶴)





(海外新話)

例言

一、此編ノ記事、之ヲ夷匪犯疆録ニ原ツク、然レモ、犯疆録ノ一書、南北諸省ノ將士奏議策論及ヒ戰鬪間目撃ノ記、得ルニ從ヒ雜集ノ編ヲ為スモノナリ、依テ年月時日ノ次序ニ至テハ、侵犯事略ニ拠リ、猶又謬誤アル者ハ、他書ニ就テ改正ス、陳化成ノ陣亡五月九日、誤テ同月十二日ノ條ニ記スルカ如キ是ナリ、

一、犯疆録ノ紀載、道光二十年皇國天保十一年七月二日英夷定海縣ヲ攻陷スルノ事ニ始ル、依テ鴉片煙流毒、及ヒ林則徐廣東ニ於テ嚴酷ノ禁令ヲ設ケ、終ニ夷人ノ侵犯ヲ招ク、其濫觴ヲ知ルコトナシ、今且ク經世文編・隱憂錄・乍浦集詠・清武記等ノ諸書ニ拠テ、變乱ノ緣由數件ヲ前ニ増載ス、脫誤或少ナカラス、識者ノ訂正ヲ俟、

一、行文ノ体裁ハ盛衰記・太平記、總テ皇國古來軍籍中ノ套語ヲ用ユ、童蒙ノ士トイヘモ、一讀ノ記誦シ易カラシメシカ為ナリ、

一、英人ノ官爵姓名、共ニ漢譯ノ字面ヲ用ユ、スコートヘイナクト官ヲ水師提督、「ホテンチャ」人ヲ僕鼎查ト記スカ如シ、

一、礮臺ヲ臺場、火槍ヲ劍付鐵砲ナト譯シ、天砲ノ如キハ直ニ漢譯ノ字面ヲ用ヒ、猶又蠻語ヲ以テ「ボンメン」ト傍訓ス、彼是譯例ノ一定セサル者ハ、只ニ時人称謂ノ便ニ從フノミ、

一、英人ノ戎裝、及ヒ軍艦ノ圖ヲ掲ルモノハ、彼國万里外ニ在テ、我ト重洋ヲ隔絶ス、故ニ其人物ノ形狀、器械ノ製造ヲ知ル者少ナシ、依テ和蘭船載ノ圖ヲ摸写ノ、以テ本篇ヲ讀ノ一證ニ備フト云フ、

萬識(續田篤)

總目

卷之一

- 英吉利記畧 坤輿畧圖 清國沿海畧圖 英國將長戎裝圖 同步卒戎裝圖 同軍艦圖 同蒸氣船圖
- 烏片煙流毒付黃爵茲上書事

卷之二

- 林則徐奉命掌廣東政務事 於虎門燒燬鴉片圖
- 暎國使節到廣東府事 楊靖江於穿山洋襲夷船事
- 英吉利王命義律發船軍事 ダイムス 參機河發船圖
- 英夷陷定海縣城事并圖 袁兆魁探定海夷情事 出青田縣怪獸事并圖

卷之三

- 英將義律到天津江事 琦善於廣東私議和事 於蓮花港供應夷人圖
- 官軍到着廣東付燒討夷船事 粵秀山觀音靈驗事
- 道光帝逆鱗付琦善行罪科事 英兵攻廣東付參贊楊芳議和事



段永福發大砲擊碎夷船圖

英夷并湖南官兵乱妨事

鄉勇與英夷戰鬪事并圖

卷之四

賈人張鴻製虎尾陣事并圖

曠鼎查嗎利遜再攻定海事 王錫朋血戰圖

掘出諸葛孔明所建碑石事

林朝聘諭大義退夷船事

鎮海生員王師真燒討夷船事并圖

官軍退治定海夷人事

乍浦落城付夷人乱妨事并圖

烈女劉氏事

卷之五

陳化成軍配付記死事并圖

鎮江府落城事 都統海齡妻投身火中事

欽差諸大臣奏和議事

兩軍和睦事付和約條目 同圖

目次終

英吉利國紀畧

イギリスハ、歐邏巴洲西方ノ海中ニ在ル一大島國ナリ、漢人譯シテ英機黎、啖咭利、諸厄利亞、漢厄利亞、此島北方ノ地ヲ思可齊亞ト云フ、古昔ヨリ獨立ノ主アリテ、此ヲ領セリ、然ルニ曆數一千七百零七年、英國ノ女王蓋那ノ世ニ當テ、

其地ヲ併有シ、且又西方ニ在ル意而蘭土ノ一島ヲ得、之ヲ總稱ノ大蒲利丹厄亞ト云フ、即チ地ヲ分ツテ五十二州トナシ、是ニ六十二ノ諸侯ヲ封ス、其南方ハ「カライス」ト云ヘル海峡ヲ隔テ、和蘭佛狼西ノ兩國ト對ス、中間相距ルノ僅ニ二十三里、便風ニ帆ヲ開ク時ハ一日ニノ往還スヘシ、斯テ四沿ノ海岸、崑石聳立、暗礁海ニ迸リ、風潮ノ險惡、實ニ恐ルベキノ地ナリ、依テ近鄰ノ敵國トイヘテ、窺視ノ念ヲ茲ニ絶ス、既ニ那波列翁勃奈跋兒的佛狼西國ノ僞帝ノ如キ、天下ヲ席卷スルノ英傑トイヘテ、亦此ノ海險ヲ恐レ、敢テ兵船ヲ侵入スルコトナシ、古來其國王或ハ男、或ハ女、一定セズ、當今ハ即チ女王ニシテ、名ヲ城喇ト稱ス、即位ノ後二年、屬國ノ二王子ヲ請テ、之ヲ夫婿トス、女王朝ニ臨ンテ政ヲ聽時ハ、二王子モ亦其左右ニ侍坐セリ、諸侯朝勤スル時ハ、女王ノ前ニ接近シ、跪テ掌ヲ王ノ膝下出ス、時ニ王手指ヲ以テ親ク掌心ニ点ス、諸侯其手指ヲ嗅テ、而ル後ニ退ク、是英國ノ重禮ナリ、都府ヲ囑頓ト云フ、爹模河ノ上ニアリ、家屋櫛比、人民滔湊ス、此河ニ跨テ大橋アリ、長サ百八十丈、幅四丈、三処ニ燈臺ヲ設ケ、夜間コレニ火ヲ点メ、以テ行人ニ便ス、又岸上ニ砲臺ヲ築キ、外寇ニ備ヘ、數処ニ互市場ヲ置キ、土産ノ毛絨、穀物、錫、鉄、其他、苧、麻、大麻等ノ品ヲ以テ、万国ノ商人ト貿易ス、其商船河口、(以下圖)

武器考證二十

江陽屋形年譜一名江陽源家軍鑑近江國佐々木家記也

鐵炮 卷三天文二年 四月廿日、長子口ト云人、南蛮ヨリ琉球ニ渡海シテ、鉄炮ト云術ヲ彼國ノ者ニ傳ヘ、其ヨリ多禰島



ニ渡リ、日本人ニ銃炮ノ術ヲ傳ヘテ、去月洛中ニ入ル、彼長子口、將軍家ニ見ヘ彼術ヲ傳ヘ、將軍家ヨリ彼長子口ヲ當國ノ屋形ニ預ラル、今日江州ニ來テ屋形ニ見ユル、○廿八日、屋形、長子口ヲ江北國友村ニテカル、知行百貫ノ地玉ハル、○六月十日、唐人長子口、銃炮ノ術ヲ、今日次第ヲ記シ屋形ニ獻ス、甚秘シ玉フ、○廿日、屋形ノ彼長子口ガ傳ヘシ法、不レ殘今日旗頭中ヘ傳フ、馬淵カ家ノ日記ニ、屋形義秀ヨリ御傳ノ法ヲ記ス、○貞丈按、南浦文集ニ記セルハ、薩州種ガ嶋ヘ南蛮人ノ來リシハ、天文十二年也、其時銃炮ヲ彼島ニ傳ヘシト云、其南蛮人二人也、一人ハ「ムラシユクシヤ」ト云、一人ハ「キリシタマウタ」ト云フト見エタリ、右ノ年譜ニハ、天文廿二年洛中ニ入トアリ、然レハ種ガ嶋ニ在テ、十年ヲ経テ後ニ京ニ入シ也、カノ長子口ト云シハ、ムラシユクシヤガ事カ、キクシタマウタガ事歟、名ヲ改タル歟、別号歟詳ナラズ、

倭國軍記寶徳二年ト部兼俱作進子義政將軍、

〔金鼓〕金鼓止天、鐘於津幾、太鼓於打、並仁軍神勸請乃聲仁至迄、吉凶乃覺悟有利、金止鼓止和、合戰乃最中、軍士進止於教知之女牟爲也、是其日乃大將軍乃態也、

江陽屋形

〔腰驗〕卷五永祿三年五月 織田家、今十九日卯刻、清洲ノ城打立、中織田家利ヲ失フニ依テ、諸將ニ向テ曰、今夜今川家陣取タル山ノ後ニ廻リ、夜討ニスヘキ由ヲ云、何モ此義ニ同ズ、味方ニ備ニ成テ、旗腰驗等ヲステ、馬ノクツワニ紙ヲ卷キ、味方軍卒甲ヲサシヲキ、行クト云ヘハ進ト云合詞ヲ定メ、桶ハザマノ山ノ後ニ登リ、十九日ノ子ノ刻ニ、義元ヲ本陣

ニ切掛リ、味方大利アリ、

隨ニ將之下知ニ用捨之事 眞野家甲冑故実傳 四

右ニ云如クニテ、我好テ用ル物ニ非ス、大將ノ下知ナレバ、如何様ノ物モ用ヒテハナラス、昔トテ、此指物差タムヘ、後レヲ取タルヲアリ、武道戰書ト云物ニ、天正十二壬午ノ歲二月廿八日、武田勝頼ノ御舍弟仁科五郎信盛、籠ラレル高遠ノ城ヲ、城ノ助信忠公、旗本ニテ一時攻ニ攻トリ玉フ、戸田半左衛門重政、一番ニカケ合セ、戸張久シクス、戸横木アリ、戸田赤母衣金ノ銀ノ、竹ノ横木ニ當テ通ルヲ不レ叶、尻居ニドツト倒ル、其隙ニ二番ニ続ク信忠公ノ御小性山口小弁・佐々清藏、乗越テ一番乗ノ後ニ、戸田語テ曰、何程ニテモ、我武刃ノ分ニテハ、母衣差物ノ門木戸ニカマヘツカヘベキ杯ト心付ヲニテナシ、敵ヲ見掛ル時ハ、万事ヲ忘却シ、一念ニ氣ヲ掛テ、勝負ヲ決セント思フ故ニ、大勇大膽ナル人ハ各別也ト別ル、此半左衛門後ニ戸田武藏守ト云、関ヶ原合戰ニ打死セラレシ、首ハ織田河内守長高取タルトナリ、有樂ノ嫡子ニテ、出雲守ノ兄ニトアリ、古ヘ武勇勝レタル人サヘ、門ヲ通ルトテ、差物ニツカヘテ、アフノケニ倒ルトアラバ、未タ戰場ヲモ不レ踏者ナレハ、行サマニモ倒ヘシ、然ハ大將ノ下知ヲマツヲナルベシ、試可レ用ニ、

差物

差物ハ日夏繁高武林原始ニ、人皇百一代後小松院ノ御宇、應久中ノ比ヨリ始ト云フ記タリ、九當年迄三百六十年余ニ當レリ、依テ其始久シ、其製モ種々舉難レ筭、故ニ爰ニ畧ス、サテ日夏繁高、右ノ通り始リテ定タレト、イカナル證



ニテ書タルカ、覺東ナシ、先差物ト云物起リタルハ、戰士ノ備坐備ト云テ、馬ヨリ下立、備へ付、鎗ヲ以テ争フ様ニ成テ、出來タルトミユ、又差物ヲサス<sub>レ</sub>モ、今諸流ニテ、陣屋ヨリ差テ出ル物ト心得、教ル流義アリ、押行道有<sub>レ</sub>之陣固屋ヨリ差テ出ルト云<sub>レ</sub>不可有、胄サヘ矢玉劇シクナリテ被ル、差物ハ軍始テ、其功ヲ其手ノ大將ヘ誰ト言<sub>レ</sub>ヲ顯シ見スル為ノ印ナレバ、遙以前ヨリ是ヲ差ト云<sub>レ</sub>不可有、今モ古キ胄ノ家々ニ残レルヲ見ルニ、差物モ胄ニ不<sub>レ</sub>差様ニ制タルアリ、然レハ胄モ差物モ、從者ニ持スル<sub>レ</sub>、馬上際ニ連テ軍場ヘ至リ、下リ立テ差物ヲサス<sub>レ</sub>トミヘタリ、諸流差様此末ニ記ス、差物ト云物何ヲ差テモ指物<sub>ニ</sub>、依テ事ノ定タルニ非ス、我好テサ、ル、物ニ非ズ、是ヲ指テハ、馬上杯ニハ殘<sub>殊カ</sub>ノ外不自由<sub>ニ</sub>、又太刀打組打等ハ害ニナル<sub>ニ</sub>、難<sub>レ</sub>働、尤差印古クアル<sub>レ</sub>ハ見ヘタレ<sub>レ</sub>、古代ノ武藏坊辨慶カ七ツ道具トテ、今ニ子供迄カ知リテ居ル所ノ差印<sub>ニ</sub>、其外古キ武者繪ニモ、短キ差印ヲサシタル古画アル者<sub>ニ</sub>、其短物シナヘル物ハ、サシテモ妨ナシ、今モ世ニ殘テアル法、半切製シナイ杯ト云七八尺ノ棹ニ是ヲ付テハ、脊ニ負テハ、不丈夫ナル者ハ、暴風ナトノ時ハ倒ルヘシ、今幼稚ナル者、病身ナル者杯難<sub>レ</sub>差、是ハ大將ヨリ何ノ手、何々差物、孰<sub>レ</sub>ノ手ハ何、ト号令ヲ受テ可<sub>レ</sub>差義<sub>ニ</sub>、左ナクテハ、差物ニ非ス、古ヘ功ヲ戰士<sub>ニ</sub>カ争ヒタルカラ、此差物ハ出來タル由、此外ニ印ハ笠印、袖印、母衣、腰印、其外様々有物ナレハ、差物ニ限ルニアラズ、然レハヨク試テ可<sub>レ</sub>置<sub>レ</sub>、四半横手ヲサス、今物杯ヲ令<sub>今カ</sub>諸兵家ニテ甚秘トスル<sub>レ</sub>有テ、十流ヨスレハ十色<sub>ニ</sub>定リタル<sub>レ</sub>ナキ故<sub>ニ</sub>、何共ニ工夫宜クスヘシ、畢竟、横手カ風ニ隨ヒテクル<sub>レ</sub>廻リサヘスレハ、用トスヘシ、別ニ子細ナク、棹モ様々習有<sub>レ</sub>ナレ<sub>レ</sub>、其時ニ臨テ、青竹ヲ切テ差ス程ノ<sub>レ</sub>工夫スヘシ、譬ハ、兼々叮嚀ニ製置テモ、後ニ折レナ

トシテハ、元ノ棹ノ如キ物ニハ出來難シ、是非<sub>レ</sub>青竹ヲ切テ用ヒス<sub>レ</sub>ハ不可有、依テ元ヨリ太細ニ不<sub>レ</sub>構可<sub>レ</sub>差<sub>レ</sub>、

馬手差刀

馬手差ト云<sub>レ</sub>古書ニナシ、諸流ニテ、鎧通シ<sub>レ</sub>、半刺<sub>レ</sub>、刺刀<sub>レ</sub>、妻手差<sub>レ</sub>云フテ、長九寸五分ヲ以テ長キ限トシ、以下四寸五分迄ヲ用ユ、今諸兵家ノ馬手差刀ト云物ハ、太刀・腰刀・馬手差刀、三刀ヲ差ス<sub>レ</sub>了簡<sub>ニ</sub>、

一、腰小旗ノ事、平治物語<sub>待賢門</sub>云、平家ハ赤ハタ、赤シルシ、日ニエイシテカ、ヤキケリ、源氏ハ大ハタ、コシコバタ、皆オシナヘテ白カリケリ、

一、笠あるしと云ハ、元來胄<sub>ヲ</sub>付る驗ある故、笠あるしといひ<sub>レ</sub>る<sub>ニ</sub>、後ニハ笠驗と云ハ、をへテ物のあるしの事<sub>ニ</sub>いひ習ハシ<sub>レ</sub>テ、袖ニ付る驗をも、笠驗と云ひ<sub>レ</sub>、太平記卷ノ八、笠印ナクテハ同士討モ有<sub>レ</sub>ヘシトテ、白絹ヲ一尺ツ、切テ、風ト云文字ヲ書テ、鎧ノ袖ニゾ付サセラレケルトアリ、太平記卷五、盛衰記卷卅四

一、腰差ノ<sub>レ</sub>、出陣聞書<sub>應永</sub>中書<sub>年</sub> 旗サオ或ハ腰サシナドオル、<sub>レ</sub>有、<sub>々</sub> 腰差トハ腰小旗ノ事<sub>ニ</sub>、腰小旗ハ小サキ旗ニテ、上ヘ紐ヲ付テ腰ニ付ル<sub>ニ</sub>、是ハ相印也、背旗ノ事ニアラズ、又腰サシナド折ル、ト云コトアルハ、右ノ小サキ旗ニ紐ヲ付テ、短キ竹ナトニ付テ袖ニサス故、腰サシ共、又ハオル、<sub>レ</sub>モ有トモ云シ<sub>ニ</sub>、

一、勝軍木ハ白膠木<sub>ニ</sub>、勝軍木ト云故、一名カツノ木トモ云、此木ニ五倍子アル故、フシ紫トモ云、○五倍子ハ、オハクロニ交テ、齒ヲ染ルフシノ<sub>レ</sub>、



未忍焚稿  
貞丈雜記武具ノ部十一

三二六

(萩市松陰神社藏 校合濟堂)

未焚稿



### 解題并凡例

一、未焚稿は弘化三年から嘉永四年頃迄の松陰の詩文稿を集めたものである、この頃は、松陰が長藩の兵學師範として盡力した時期で、その文章も家學に關したものが多く、明倫館の公務殊に軍事教練、また九州平戸の旅行など、著しき事蹟は、この書と彼の未忍焚稿と相待つて、明に徴知せられる、尙ほこの書には、松陰詩文稿の外に、他書の抄録も添へてある、

一、萩市松陰神社藏の未焚稿四卷は、大さ半紙二つ折形で、表紙は、習字反故を厚く貼り重ねて、白紙を以て覆ひたるもの、標題は松陰自筆で、卷號は元・亨・利・貞と命じてあり、本文の用紙は無罅で、目次は無い、文字は頭書を他の批評語の外は、悉く松陰の自筆である、本全集編纂にはこれを原本とした、

一、原本は詩文稿も附加の抄録も、順序なく列記してある、中には同一詩文の草稿、淨書が重複してゐる場合もあり、且、草稿には添削の跡があつて、その繁きものは、精細に視ざれば讀下し難いものもある、さりとて、その亂雜を整理して、索搜に便にするは、本書の面目を根本より變革することとなり、別けて、添削の結果に従つて、その文を讀み易き様に寫し取るときは、作者の折角の苦心の跡を没却して、鍊磨考究の經路も知られぬことになる恐がある故、今はその儘に寫して、一字一處も原本に違はぬ様にした、而して、各卷所載の條項を、一目瞭然ならしめる爲に、新に目次を作つて、初卷の始に置いた、



一、本書の調冊の年月は分らぬが、題名未焚稿は、舊時刻苦の跡の存する文稿ゆゑ、焚かぬとの意で附けたものと察せらるゝから、丙辰頃でもあらうか、彼の未忍焚稿も異稱同義と思はれる、

一、本書と未忍焚稿とは、同時代の作が有つて、何故にかく別々に纏めたものか分らぬ程であるから、これを續けば、同時にかれをも披くべきである、

一、本書の刊行としては、是までは無い、但、吉田庫三編「松陰先生遺著」の中に、本書より文稿若干篇を摘出して載せてある、

一、神戸市田村氏藏の「或問目錄軍旅の部」東京市榊取氏藏の「寶螺の考」の二つは、皆紙數少く、別冊とするに足らぬもの故、便宜こゝに附載した、

(委員 安藤紀一)

### 未焚稿目次

(括弧のある標題は編者の適宜に名づけたものである)

#### 元の卷

奉賀今公受幕府鞍轡賜詩序	弘化三年五月	三五
書瓊杵田津話後	嘉永元年	三六
書粵東義勇檄文後	嘉永元年	三六
長篠戰論	嘉永元年	三六
日食論	年月不明	三六
與平田先生書	弘化四年○草稿及成文	三六
寡慾錄	弘化四年	三六
攀賊船說	弘化四年○其一及其二	三六
與甫田先生書	嘉永元年正月十五日	三六
復村田喜左	年月不明	三六
與松村文祥	年月不明	三六
兵學學規	嘉永二年	三五〇

與山鹿萬介先生書	嘉永三年別出	三五三
(與郷人書)	嘉永三年九月廿五日	三五三
論學一則	年月不明	三五四
漫筆一則	嘉永三年九月	三五五
(與鄭幹介)	嘉永三年九月廿一日○別出、但餘白附記この巻尾に出す	三五五
與鐙軒先生	嘉永三年九月廿三日	三五六
隨筆	嘉永三年	三五七
(與人書)	草稿○貞の巻に成文がある	三五八
與清水赤城	二書別出	三五八
與妻木士保	嘉永元年	三五九
護民策一道	嘉永元年五月六日	三五九
課業人物論	北條早雲 年月不明	三五九
(對問 攻守之道)		三五八



漫録 弘化二年……………三六九  
 槍鉞説 弘化四年……………三七〇  
 甲冑論 弘化四年……………三七二  
 長槍論 弘化四年……………三七三  
 平内府論 弘化四年 九月晦日……………三七四  
 南北興亡論 年月不明……………三七七  
 亨の卷  
 (兵學寮掟書條條) 嘉永元年 〇草案……………三六一  
 十二月 〇成文……………三六七  
 御再興方に差出候控 嘉永二年 二月……………三六四  
 (兵學寮日割稽古を銘々稽古場に改められ度願書) 嘉永二年 二月……………三六五  
 兵學寮掟書條條 嘉永二年 〇成文……………三六七  
 等級之次第 嘉永二年 二月……………三九〇  
 與二劍客齋藤新太郎二書 嘉永四年……………三九三  
 復二中村道太一 嘉永四年……………三九四

與二阿兄一 嘉永四年 四月廿一日……………三九五  
 曹參論 嘉永四年……………三九七  
 送二中村士恭歸國序 嘉永四年……………三九九  
 復二某父執二書 嘉永四年……………四〇〇  
 與二小島某二書 嘉永四年……………四〇一  
 楠公墓下作 嘉永四年 三月廿一日(略)……………四〇二  
 先考忌辰詩 嘉永四年(略) 四月三日……………四〇三  
 (山田治心氣齋先生ニ贈ル書) 嘉永四年……………四〇七  
 與二土居幾之助二書 嘉永四年……………四〇九  
 練兵説畧序 嘉永四年……………四〇九  
 (附 抄録)  
 宋の余玠、趙范、趙葵……………四一〇  
 元の史天澤……………四一一  
 明の常遇春、李文忠、沐英、傅友德、王信、王瓊、王守仁……………四一一

山鹿素行傳……………四三二  
 山本勘助晴幸大星目錄……………四三四  
 城築繩張武功祕傳ノ一……………四三八  
 戰國策……………四九一  
 韜畧全書……………四九〇  
 周漢晉六朝諸史雜抄 原書不明……………四九三  
 懲忿録……………四九四  
 利の卷

賜題探下得送三人登三富山二序上謹撰 嘉永四年 六月十一日……………四九〇  
 (武教全書十八箇條例解)……………四九二  
 兵學小識目錄抄出……………四九三  
 (左傳問條二十一則)……………四九四  
 合操……………四九六  
 (武教全書客戰篇注解)……………四九三  
 (語解二則)……………四九四

(問條十則)……………四五四  
 操習筌蹄 嘉永二年……………四五八  
 對策一通 嘉永二年十月……………四六二  
 操練當日之次第 嘉永二年十一月十日 操練の豫定書……………四六四  
 (家兄に與ふる書) 嘉永四年 正月……………四六九  
 貞の卷  
 (采配問答) 年月不明……………四七三  
 中庸講義 嘉永三年 五月……………四七四  
 (銃士の扱方) 年月不明……………四七七  
 (英船繫泊の報告書) 抄出……………四七九  
 腰刀の事……………四八〇  
 (異國船に對する警戒の藩令書) 抄出……………四八一  
 天保十三寅年從三公儀二被三仰出二候寫 抄出……………四八一  
 (文化三年文書の斷片)……………四八三  
 (守永彌右衛門に與ふる書)……………四八三



讀武教全書 其一其二 嘉永二年……………四八五

五層陣論 嘉永二年……………四八七

與葉山鎧軒書 草稿○未忍焚稿  
に成文がある……………四八九

(與人書)……………四九〇

丁未詩稿 弘化四年……………四九四

中庸講義 嘉永三年  
五月十二日……………四九六

與清水赤城書 弘化四年  
二月初日……………四九九

(操習筌蹄總論)……………五〇一

(編者附載)

或問目錄……………五〇四

寶螺ノ考……………五〇七

未焚稿

元

奉賀今公受幕府鞍鐙賜詩序 (弘化三年五月)

今公即位以來、美政歴々矣、若其初政、則臣幼孩不及知之、然亦曾竊聞之父兄、以其所親聞見、所以下揆文教奮武衛者、細大兼舉焉、開經筵以通言路、親責戚以厚骨肉、託狩獵而教旗鼓、散金銀而責武備、孝慈睦姻賞之、放蕩姦慝罰之、服節儉于身、存誠敬于心、興學政、隆武藝、舉賢才、黜不肖、此公之問學德性、蘊蓄于内而發見于政治之表者也、故見公之政、則斯知公之問學德性也、蓋聞公之風者、遠近莫不想其德也、令聞遂達幕府、々々嘉稱之、賜以鞍鐙云、臣聞之曰、幕府之賜、宜有所憲意也、夫鞍鐙武器也、方今太平也、賜武器於太平之世、非寓意而何、古曰、天下雖安、忘戰必危、謂必有外侮也、安則忘戰、自然之勢也、外侮乘之、亦當然之機也、方今太平已久、武備漸弛、而西洋賊日熾月盛、前年畧印度、侵滿清、豈得無覬覦皇國哉、公生是時、獨卓



然師古訓、無淫于觀于逸于遊于田、孜孜授文教、奮武衛、幕府賜以武器、豈非嘉公之雖安不忘戰、且以存勸乎、故臣謂公之受其賜、固不可易其物也、將又有所勉矣、臣不堪忻忭之至、再拜稽首、聊賦短章、奉頌美政之十一于千百云爾、

書瓊杵田津話後

瓊杵田津話者、蘭人記辛丑年間、滿清與英夷戰事、以上我崎陽鎮臺、崎陽譯官之所翻也。

(嘉永元年)

滿清為夷所侵、瓦解土崩、無足論者也、卒之出金請和而後止、然其間不見復有唱義焉者、何其不振之甚也、蓋由綱紀廢弛、而賢才不用、操習不熟、嗚呼前車之覆、後車之戒、雖吾邦亦不可不戒也、然吾邦自有可恃者而存焉、封建之侯伯也、世祿之將士也、是以其所守之土地、則祖宗之土地也、其所養之將士、則祖宗之將士也、其忠義思報黎養之恩、其敢勇願試鍊熟之藝、比之滿清郡縣之吏、調募之卒、強弱之分、霄壤不啻、是所以為可恃也、因其可恃、而朝夕淬厲、無以加焉、若夫安其可恃而自足、與舍其可恃而他求、無一可者、則亦恐蹈覆車之轍焉、夫今之時可為我之警戒者、無近於滿清之事、可度夷之情狀者、無切於鴉片之事、苟觀省此書、則殷鑒固不遠矣、遂書、

書粵東義勇檄文後

(嘉永元年)

外國狀情、不可不審、不審而自足、是不可不知彼也、審之而不、可無酌、酌無其可恃而他求、是不可不知己者也、  
(山田治心氣齋評)

余初誦蘭人記滿清之事、嘆曰、嘆兵之所加、城則必陷焉、船則必碎焉、陣則必潰焉、然而清之將士、徒塞燃眉之責、而無義勇討賊之志、何委靡之甚也、已而得義勇檄文讀之、辭氣慷慨激烈、令人自奮發焉、因又嘆曰、清豈無人哉、若張浚、岳飛、後之稱為忠臣者、其言如斯、其志如斯而已、清之義勇、余雖未詳其為人、固知足與有焉、令道光爺親延此輩、切問其策、沮和戎之議、銳意戰守、則將帥之情可振矣、前日之辱可雪矣、然而出金請和、視然無恥者何哉、奸佞之言誣耳、而義勇之論不聞也、嗚呼以萬乘之尊、自居、曾粵東之黎庶之不如此、不可嘆之甚乎、或曰、義勇之士、其志似忠、而其實類狂矣、何則嘆之盛強、清之柔弱、蓋坤輿無比焉、今反以至弱之民為奮勇、以至強之國為無能、可謂狂矣、余謂不然、是未知西洋之情與鬪戰之理也、夫西洋夷竭智力而汲汲者、利而已矣、唯其利之爭、故無義無勇也、無義無勇、故如柔吐剛、滿清雖柔弱、以其國則廣大、以其人則衆多、果能上下一心、擢拔義勇、除去奸佞、則外夷安敢窺之、余聞之、前年拂夷致書流蚪、書中之語、徃々倨敖、侮其小弱也、而及來我崎陽、見警衛嚴整也、大恐、遂誤聞約三阿蘭號砲、倉卒而去、且西洋夷於亞細亞、豪斯多辣利、亞墨利加諸洲間之地、無不畧取、獨於亞弗利加則不取、蓋畏其土人以盜賊為生、以殺害為事云、其如柔吐剛之實、率可見矣、且夫鬪戰之理、必死則生、幸生則死、吳起止屍之說、尉繚死賊之論、信哉、今夷



之所恃、船堅而砲便已、船與砲器械也、恃器械則幸生也可知、號義勇則必死也可知、以必死敵幸生、無不勝也、何狂之有、余讀檄文、是其言、重其人、又嘆清之不能利用之、遂以書其後云、

愚讀所謂檄文者、而悲其志不遂、令其言出於道光帝、則食其食居其土者、孰不奮發討賊、若不然而、出於一二大臣、尙足興起衆情、所謂張浚岳飛稱為忠臣者、其言如斯、其志如斯已、豈不信心然乎、其言不行、是以世無知其為忠、而矩方遠知之數百里之外而稱之、可謂能知人矣、作檄家豈有意為矩方一取中旗鼓乎、(山田治心氣齋評)

長篠戰論 (嘉永元年)

長筱之役、信長知甲騎之衝突不可當也、營外堀壕(細カ)、深二三尺、濶植柵、凡三層、高萬銃守之、而勝賴不一察之、茫然而臨、遂殲其良焉、余謂凡戰勝者常也、敗者變也、勝者非善、而敗者不善也、孫武曰、攻其無備、鳴悉之矣、夫有所戒、則必有所怠、有所急、則必有所忽、壕柵萬銃、其所戒也、所急也、豈不更有怠與忽哉、使勝賴不輕死而自修、不主正而用奇、則勝矣、唯其輕死、故冒萬銃而擊三軍、主正、故有進死而無退生、能自修、則鷲巢城必陷、能用奇、則壕柵亦不固、夫自修所以不可勝也、用奇所以可勝也、

也、不可勝、在己而存于心焉、可勝、在敵而存于事焉、唯勝賴則不自修、於是不可勝之道闕矣、不用奇、於是可勝之策失矣、夫信長者、能知是而勝之耳、故曰、勝者非善、而敗者不善也、或曰、自修者、整々肅々或可庶幾矣、用奇之說何如、曰、奇兵無若夜襲、夜襲之法、擇心膽強壯技藝鍊熟之士、明其号、簡其令、五人為伍、十人為隊、各隊分職、或刀鋸以擠柵、或柴火以焚營、或逐其厩馬、或掠其輜重、忽西忽東、出神入鬼、百方以擾亂之、是用奇之說也、然信長所以專力於壕柵者、知勝賴之策不出于此也、勝賴有是策、而信長不知、則敗、知而備則勝、勝賴不知其知、則敗、知其知、則勝矣、故戰之道、敗亦可令勝、勝亦可令敗、是以智者常勝、愚者常敗、何者智者之慮周、而愚者之慮疎也、故曰、勝者常也、敗者變也、

擊敵之橫、有緩焉者、有急焉者、得所謂爭地、緩擊之也、如秀吉之於天王山、間道潛進者、急擊之也、如信玄之戰于濱松、緩急唯因地與時收其功耳、信長已有下襲鷲巢之策、而勝賴會無出奇兵之計、勝敗不待戰而後知也、使勝賴守信玄之法、悟中橫擊之理、則勝敗未可知矣、  
(治心氣齋評)



日食論

朱子曰、日月之食、皆有常度矣、然王者修德行政、用賢去奸、能使陽盛足以勝陰、々衰不能侵陽、則日月之行、雖或當食、而月常避日、否則否、雖曰行有常度、而實為非常之變矣、朱子詩傳十月之交篇或非之曰、古之聖人、不通日食之故、見以為變、至宋元、則推步之術極精矣、不復以日食為變、而朱子阿先聖、枉為之說、徒自誣、以誣人耳、余謂不然、朱子之論本有三至理、謂之誣者、特未深思也、夫天人一理、更不分別、天聰明自我民聰明、天明畏自我民明威、天非有心、人實為之、自日月之食、至大風淫雨、旱蝗水溢、地震山崩、無不人自取之者、雖曰人自取之、其降之則在於天、故謂之天、何以知人自取之、曰周於利者、凶年不能殺、今夫大風淫雨、旱蝗水溢、地震山崩、有所以待之者、則民無傷、無傷則謂之非變也亦可、雖二十風五雨、百穀豐熟、上有苛政、則民餓死、餓死則謂之變也亦可、由是知人自取之、唐虞之世、不聞有日食、春秋二百四十二年、日食三十六、唐虞之世、豈無食哉、特雖有猶無耳、唯百姓彰明、黎民變雍、莫一夫不得其所、雖有日食、何足煩其皞々之心乎、是以後世無傳、無傳、則有與無、固無異也、至春秋之時、君不君、臣不臣、民飢不得食、寒不得衣、無以安其心、日食則恟々相告曰、日食矣、將有變、日食矣、將有變、賢者憂、愚者悸、總以下、著以筮、唯生禍亂之懼、不

而有乱臣賊子之變、兵革戰伐之事、則又憧々相報曰、日食矣、果有變、日食矣、果有變、稱諸口、筆諸書、是以歷久而不可滅也、日食之有於春秋、而無於唐虞、豈又有他說哉、或曰、朱子曰、月常避日、又曰、遲速高下、必有參差、玩此言、則當食實不食也、非子所謂雖有猶無之義也、余曰、否、勿以辭害意、君也、父也、夫也、君子也、中国也、陽之類也、臣也、子也、婦也、小人也、夷狄也、陰之類也、陽盛陰衰、則雖有食猶無食也、曰避日、曰有參差者、所以深形容其猶實無食也、不然、曰有道之世、當食而實不食、則何無曰無道之世、不當食而食乎、亦可見其必不然也、

(與平田先生書草稿)

(批評者香川市田)

篇中父兄朋友之字、改作世之學者、

月日某再拜、白、某先生之榻下、大丈夫讀書學道、其立志當磊々落落、樹立流俗表、何為區々碌々而止乎、故其為學、去虛就實、畧冗攬要、夫去虛畧冗則用力也約矣、就實攬要則收功也博矣、用力約而收功博、所以能樹立流俗表也、今之學者、動曰詩曰文、或書或畫、有不若茲者、羣聚而咲之曰、彼俗輩也、何足言哉、就虛攬冗、孰甚焉、是以兀々矻々以至皓首、而所成就、幾哉某材下力劣、慕古之人、而不能企及、然心竊以三前所言者、自任、以三後所言者、自絕、世之學者、父兄朋友非之咲之、自信而不疑焉、自詩文書畫之珍、玩金石竹木羽角之玩、草



(叔父玉木文之進  
兄杉梅太郎)

木之花葉、一無以自寶自樂者、乃曰玩物喪志、又曰素位而行、其意謂吾之所為位者、勉身以仁、鍊志以義、治以為國之干城、亂以為君之爪牙、其是而已矣、位之所在、志之所存、唯其素位而行、不願其外、乃志可不喪也、玉叔杉梅力(世之學者)父兄朋友皆謂、詩可以興、近體之詩、雖不盡然、亦有優游吟詠之餘、懦夫奮、薄夫厚者、声調之妙乃尔、由是觀之、詩不可不學也、某獨曰、歷觀近人之詩、其有益于人者、十不得一二、其餘則不足觀已、文似相如、尙謂之俳、況於是等之詩乎、或有專本義理出入經傳之詩、則曰是儒者詩也、非詩人之詩也、葉冰心曰、文章不足關世教、雖工無益也、且詩之有益者、前人之述備矣、吾輩復何言、世之學者父兄朋友皆謂、詩猶春花、學猶秋實、驚春花而棄秋實者、文勝質、去春花而就秋實者、質勝文、夫質勝文則野矣、某獨曰、若有秋實則何有於春花、苟有稻粱之實、則何有於桃李之花、今之學詩者、無其實而強附之花、以眩俗人之目、我則其求之、已得其實、則無待于花也、世之學者父兄朋友皆謂、古之良將賢士、豪傑俊偉之人、其中綽有餘裕、絕無迫切局促之思、故詩哥吟詠之事、以寄其幽宕傲放、若夫故不學詩、則其人必拘々乎不能舒暢、某獨曰、古之良將賢士、豪傑俊偉之人、其出衆人也遠矣、今之學者、去古之人也亦遠矣、且所貴于古人者、其材其德、其學其識、立言實可法、建事實可賴而已、至詩哥吟詠之事、殊其緒餘耳、非所以慕古人也、今夫以下所貴于古人者、日夜孜孜、尙且不可及焉、豈暇其餘哉、又有

(名臣良將兩存してある)

片紙之書畫、以貼屏、以懸壁、一支之木、一株之草、以畜瓶、以培盆者、父兄朋友皆謂、是寓意于物也、故菊吾愛其隱逸、竹吾愛其勁節、梅曰清、松曰貞、非玩物之類也、某獨曰、是適辭耳、夫士君子之道、特飾經傳炳如、取其義于物、亦已迂矣、已支且某之所見、大概如是、故竊謂、大丈夫固不可不讀書也、不讀書則不通理勢之故、而徒守形器之間、然而讀書則弄空文而棄實用、二者之弊、僅免此、則陷於彼而不自悟、嗚呼、依々流俗、不能自樹立、學者日奔浮薄、淳厚樸茂之風拂地矣、實由玩物之喪志也、其某生末學、不知所向、不知所憑、茫然自失、妄自信其愚、非就其有識之士、而斷決其是非、則誠恐毫釐之以致千里、愈馳愈遠、先生若不遐棄、何幸過焉、某再拜、

伏乞

玉斧

吉田大次郎再拜

(平田浩溪)

(前掲の稿を整理したもの)

與平田先生書 (弘化四年)

月日某再拜、自平田先生之榻下、大丈夫讀書學道、其立志、當磊々落落、樹立流俗表、何為區々碌々而止乎、故其為學、去虛就實、畧凡攬要、夫去虛畧凡、則用力也約矣、就實攬要、則收効也博矣、用力約而收効博、所以能樹立流俗表也、今之學者、動乃曰詩曰文、或書或画、有不若斯



者、群聚而吟之曰、彼俗輩也、何足言哉、就虛攬冗、孰甚焉、是以兀々矻々、以至皓首、而無一  
所成就、某材下力劣、慕古之人、而不能企及、然心窃以前所言者自任、以後所言者自絕、世之學  
者、非之啖之、自信而不疑焉、自詩文書畫之玩、金石竹木羽角之器、草木之花葉、一無以自珍自  
樂者、乃曰、玩物喪志、又曰、素位而行、其意謂吾之所為位者、勉身以仁、鍊志以義、治以為國  
之干城、亂以為君之爪牙、其是而已矣、位之所在、志之所存、唯素位而行、不顧其外、乃志可不喪  
也、世之學者、皆謂詩可以興、近體之詩、雖不尽然、亦有優游吟詠之餘、懦夫奮、薄夫厚者、声調  
之妙乃爾、由是觀之、詩不可不學也、某獨曰、歷觀近人之詩、其有益于學者、十不得一二、其餘  
則不足觀已、文似相如、尙謂之俳、況於是等之詩乎、或有專本義理之詩、則目曰是儒者詩也、非  
詩人之詩也、葉冰心曰、文章不足闢世教、雖工無益也、且詩之有益者、前人之述備矣、吾輩復何  
言、世之學者、皆謂詩猶春花、學猶秋實、鶯春花而棄秋實者、文勝質、去春花而就秋實者、質勝  
文、夫質勝文則野矣、某獨曰、若有秋實、則何有於春花、苟有稻粱<sup>(實)</sup>之美、何患無桃李之花、今之  
學詩者、無其美而強求之花、以眩俗人之目、我則其美之求、已得其美、則無待于花也、世之學  
者、皆謂古之名臣賢士豪傑俊偉之人、其中綽有餘裕、絕無迫切局促之思、故詩哥吟詠之事、以寄  
其幽宕傲放、若夫不學詩、則其人必拘々乎不能舒暢、某獨曰、古之名臣賢士豪傑俊偉之人、其出  
衆人也遠矣、今之學者、去古之人也亦遠矣、且所貴于古人者、其材其德、其學其識、立言則為

經、建事則為法而已、至詩歌吟詠之事、殊其餘事也、今夫以所貴于古人者、日夜矻々、尙且不可  
及焉、豈暇其餘乎、又有片紙之書畫、以貼屏、以懸壁、一枝之本、一株之草、以插瓶、以貯盆者、  
自謂是寓意于物也、故曰、菊吾取其隱逸、竹吾取其勁節、梅曰清、松曰貞、非玩物之類也、某獨  
曰、是特飾辭耳、夫士君子之道、經籍炳如、而取其義于物、已支且迂矣、某之所見、大概如是、  
故窃謂大丈夫固不可不讀書也、不讀書則不通理勢之故、而徒守形器之間、然而讀書、則弄空文而  
棄實用、二者之弊、僅免此、則陷於彼而不自悟、嗚呼依々流俗、不能自樹立、學者日奔浮薄、淳  
厚樸茂之風拂地、矣由玩物之喪志也、某願生末學、不知所向、不知所憑、茫然自失、妄自信其  
愚、非就有識之士而斷決其是非、則誠恐毫釐之以致千里、愈馳愈遠、先生若不退棄、何幸過焉、  
某再拜、

寡欲錄 (弘化四年)

孟子曰、養心莫善於寡欲、周子曰、寡焉以至於無、予謂孟周之言、於學者為尤切  
矣、故余因雜錄物欲之易陷而難悔者、自勉、九欲之易陷難悔者、多在所忽、詩文書  
畫、凡百玩好皆是也、至他物欲、雖甚焉者、難陷而易悔、何則外有所憚、內有所愧  
也、夫所忽者、臨焉不戒、故易陷、居之不疑、故難悔、然隱々害伏乎其間、可不



慎哉、是余之所<sub>レ</sub>以有<sub>二</sub>是錄<sub>一</sub>也、

以<sub>二</sub>書生詩人<sub>一</sub>自名又自處、所<sub>レ</sub>可<sub>二</sub>深戒<sub>一</sub>也、以<sub>レ</sub>此自處自名、必自以為<sub>レ</sub>與<sub>二</sub>俗輩<sub>一</sub>不同、漸養成不遜之心、吾之自處、當<sub>レ</sub>以<sub>二</sub>學者<sub>一</sub>、所謂學者、非<sub>レ</sub>誦書作詩之謂、<sub>レ</sub>盡<sub>二</sub>身之職<sub>一</sub>而供<sub>二</sub>世用<sub>一</sub>耳、又當<sub>レ</sub>以<sub>二</sub>武士<sub>一</sub>、所謂武者、非<sub>レ</sub>鷹暴之謂、事<sub>レ</sub>君而不<sub>レ</sub>懷<sub>レ</sub>生耳、

自以為<sub>レ</sub>與<sub>二</sub>俗輩<sub>一</sub>不同者非矣、為<sub>レ</sub>不當<sub>レ</sub>與<sub>二</sub>俗輩<sub>一</sub>同者是矣、蓋傲慢與<sub>二</sub>奮激<sub>一</sub>之分也、昔董仲舒不<sub>レ</sub>窺<sub>レ</sub>園、孫敬常閉<sub>レ</sub>戶、古之人、其於<sub>レ</sub>學也、勤勉刻苦率如此、猶何暇<sub>二</sub>吟花醉月<sub>一</sub>、而為<sub>二</sub>風人之態<sub>一</sub>哉、

攀賊船說  
敵船乘取之法其一 (弘化四年)

夫攀<sub>二</sub>賊船<sub>一</sub>之勢正與<sub>二</sub>攻城<sub>一</sub>同、何者、賊船<sub>高</sub>大而我船小也、若非<sub>二</sub>我勢力齊一而乘<sub>レ</sub>彼不虞、則不能<sub>レ</sub>制勝矣、故使<sub>レ</sub>在<sub>二</sub>我船<sub>一</sub>者預分<sub>二</sub>職掌<sub>一</sub>、以齊<sub>一</sub>一勢力、乘<sub>レ</sub>暗夜<sub>一</sub>而以攻<sub>レ</sub>不虞焉、分<sub>レ</sub>職之法、戰士職<sub>レ</sub>以<sub>二</sub>長槍短兵<sub>一</sub>而接戰、舸子分為<sub>二</sub>二等<sub>一</sub>、甲者職<sub>レ</sub>架<sub>二</sub>竹梯<sub>一</sub>、乙者職<sub>レ</sub>把<sub>二</sub>松明<sub>一</sub>、兼使<sub>二</sub>鷹箭火棒等<sub>一</sub>、攀<sub>二</sub>賊船<sub>一</sub>之術、先以<sub>二</sub>大船數隻<sub>一</sub>挾<sub>二</sub>賊船<sub>一</sub>之前後、以<sub>二</sub>銃砲<sub>一</sub>照準打放焉、別備<sub>二</sub>軍艦數十隻<sub>一</sub>、相<sub>レ</sub>機着<sub>二</sub>賊船<sub>一</sub>之左右、凡兵五名為<sub>レ</sub>伍、戰士三名、舸子二名、撰<sub>二</sub>驍勇健壯者<sub>一</sub>充<sub>レ</sub>之、將<sub>レ</sub>攀<sub>二</sub>賊船<sub>一</sub>、舸子一名架<sub>二</sub>竹梯<sub>一</sub>、持<sub>二</sub>鷹箭等器<sub>一</sub>直攀<sub>レ</sub>焉、戰士三名、各以<sub>二</sub>長槍短兵<sub>一</sub>之所<sub>レ</sub>巧、繼而進<sub>レ</sub>焉、

暗夜探<sub>二</sub>賊船<sub>一</sub>、大船不<sub>レ</sub>若<sub>二</sub>小舸<sub>一</sub>之便利、  
(治心氣齊評)

愚謂、賊若<sub>レ</sub>虞<sub>レ</sub>夜襲<sub>レ</sub>也、不<sub>レ</sub>去亦為<sub>レ</sub>之備、又豈有<sub>レ</sub>去而不<sub>レ</sub>備之理乎、兵家須<sub>レ</sub>自<sub>レ</sub>得不虞之字、  
代<sub>二</sub>手銃起<sub>レ</sub>火、以<sub>二</sub>倒懸燈油<sub>一</sub>、楫以<sub>レ</sub>止<sub>二</sub>啞啞<sub>一</sub>、  
順風張<sub>レ</sub>帆、  
作<sub>二</sub>出入之令<sub>一</sub>、用捨<sub>レ</sub>之火、如何、  
(治心氣齊評)

一名舸子、於<sub>二</sub>其中間<sub>一</sub>把<sub>二</sub>松明<sub>一</sub>而攀<sub>レ</sub>焉、不<sub>レ</sub>拘<sub>二</sub>兵士幾人<sub>一</sub>、照<sub>二</sub>此格<sub>一</sub>急速<sub>レ</sub>、登<sub>レ</sub>之、前後之船亦分為<sub>二</sub>左右<sub>一</sub>、就<sub>二</sub>賊船<sub>一</sub>之下、照<sub>二</sub>格而攀<sub>レ</sub>焉、是攀<sub>二</sub>賊船<sub>一</sub>之大畧也、然有<sub>二</sub>其格<sub>一</sub>而無<sub>二</sub>其練<sub>一</sub>、則亦徒法耳、練<sub>レ</sub>之何如、曰、於<sub>二</sub>懸崖絕壁臨<sub>二</sub>於海<sub>一</sub>之地、列<sub>二</sub>數隻之船<sub>一</sub>、照<sub>二</sub>此格<sub>一</sub>攀<sub>レ</sub>之、庶<sub>レ</sub>得<sub>二</sub>熟<sub>一</sub>旗鼓之號令職掌之分別<sub>一</sub>歟、

其二

賊虞<sub>二</sub>夜襲<sub>一</sub>也、必去<sub>二</sub>晝之所<sub>一</sub>在、而更泊<sub>二</sub>他處<sub>一</sub>焉、我兵茫乎向<sub>二</sub>晝之所<sub>一</sub>在、賊船若不<sub>レ</sub>在焉則狼狽矣、故夜襲之要、在<sub>レ</sub>知<sub>二</sub>賊船之所<sub>一</sub>在矣、其夜襲之術以<sub>二</sub>大船<sub>一</sub>、數隻於<sub>二</sub>關港<sub>一</sub>、分<sub>二</sub>差漁艇數十隻<sub>一</sub>、索<sub>二</sub>賊船之所<sub>一</sub>在、得則放<sub>二</sub>手銃<sub>一</sub>起<sub>レ</sub>火、以<sub>レ</sub>告<sub>二</sub>大船<sub>一</sub>、大船即疾走如<sub>レ</sub>矢、而就<sub>二</sub>賊船<sub>一</sub>、依<sub>レ</sub>格<sub>一</sub>而件<sub>レ</sub>々施行、唯<sub>レ</sub>不用<sub>二</sub>松明<sub>一</sub>、投<sub>二</sub>放藥松明<sub>一</sub>、於<sub>二</sub>賊船<sub>一</sub>之中、以<sub>二</sub>火藥<sub>一</sub>二囊、投<sub>二</sub>於松明火上<sub>一</sub>、破賊膽取<sub>二</sub>其明<sub>一</sub>、而便<sub>レ</sub>於刺擊<sub>レ</sub>焉、是其大略也、然常用<sub>二</sub>手銃起<sub>レ</sub>火之法、則使<sub>二</sub>敵預知而先備<sub>一</sub>而後與<sub>レ</sub>之戰也、損<sub>二</sub>於我<sub>一</sub>而益<sub>二</sub>於賊<sub>一</sub>耳、所謂出入之武畧不入<sub>レ</sub>火、皆兵家之機變也、  
前說曰、然用<sub>レ</sub>之者、用<sub>二</sub>松明<sub>一</sub>、則有<sub>レ</sub>費<sub>二</sub>人役<sub>一</sub>之憂矣、且舟中有<sub>レ</sub>火、則我船之往來去就、賊必熟視、今代以<sub>二</sub>藥松明<sub>一</sub>、庶<sub>レ</sub>幾不<sub>レ</sub>費<sub>二</sub>人役<sub>一</sub>、且火種亦<sub>レ</sub>纔存<sub>レ</sub>而足矣、

凡軍乘<sub>二</sub>機會<sub>一</sub>為<sub>レ</sub>要、況夜襲之法、不<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>容易語、然不能<sub>レ</sub>閉<sub>レ</sub>口而默<sub>レ</sub>者、所謂先<sub>二</sub>國家之憂<sub>一</sub>



而憂之意乎、且如此論、則亦可謂一法也、

(治心氣論評)

○ (嘉永元年正月)

月日某再拜、新年陽和、士庶鼓腹、當是時、孰念<sup>三</sup> 祖宗沐<sup>レ</sup>雨<sup>レ</sup>梅<sup>レ</sup>風<sup>レ</sup>之<sup>レ</sup>勞、君上宵衣旰食之勤<sup>二</sup>乎、皞々之化、信如此歟、<sup>斯</sup>臘月手答至、悉<sup>三</sup>先生健履之狀、謂前日所呈之書、必得<sup>二</sup>裁答、開<sup>レ</sup>緘則枉辱<sup>レ</sup>褒辭、<sup>實</sup>數語大為<sup>二</sup>失望、不敢當、不敢當、鄙文數篇、別錄以呈、伏乞<sup>三</sup>刪定、<sup>○</sup>某間<sup>三</sup>三篇山田先生所<sup>レ</sup>評也、<sup>才性</sup>疎薄、每<sup>レ</sup>作<sup>二</sup>文章、草稿才具、乃以為成、字句未<sup>レ</sup>安、音調未<sup>レ</sup>協、率措不<sup>二</sup>復省、故其文之卑怯艱澁、先生之所<sup>レ</sup>熟知也、唯先生不<sup>レ</sup>倦之教、<sup>姑</sup>艾<sup>レ</sup>蕪<sup>レ</sup>除<sup>レ</sup>蕪<sup>レ</sup>幸甚、不宣、聞<sup>○</sup>公新遷<sup>レ</sup>官、有<sup>二</sup>斯德<sup>レ</sup>而有<sup>二</sup>斯遷、不<sup>レ</sup>可<sup>レ</sup>不<sup>レ</sup>以雅頌<sup>二</sup>也、<sup>更</sup>屬<sup>レ</sup>之後鴻、時維殘寒未<sup>レ</sup>除、伏以自重、某敬白、正月仲五日

另啓、工藤生之自東役歸也、在邸之士山添某者、因<sup>レ</sup>生致<sup>レ</sup>欲<sup>レ</sup>學<sup>レ</sup>兵<sup>レ</sup>道<sup>レ</sup>之意、<sup>審</sup>其人材識為人果足學<sup>レ</sup>兵<sup>レ</sup>道<sup>レ</sup>否、<sup>有</sup>然嘗聞古之道、來者不<sup>レ</sup>拒、去者不<sup>レ</sup>追、大器大成、小器小成、亦可、縱令其人非<sup>二</sup>其才、於<sup>レ</sup>我固為無損益、幸今先生在<sup>レ</sup>役、使<sup>レ</sup>工藤謂<sup>レ</sup>山添氏就<sup>レ</sup>先生<sup>レ</sup>謀<sup>レ</sup>、<sup>○</sup>且誓書一通<sup>○</sup>先容<sup>○</sup>不備、<sup>○</sup>附<sup>上</sup>、山添氏有請、一祈先生處置焉、

右與<sup>二</sup>甫田先生<sup>一</sup>書

戊申正月三夜稿具

吉田大次郎再拜

(この文ミ次の與松村文祥の文ミを一卷として綴りこめてある)

復<sup>二</sup>村田喜左<sup>一</sup>

手書勤々、如<sup>レ</sup>接<sup>二</sup>清容、且辱<sup>レ</sup>贈<sup>レ</sup>水滸解・小説字彙・徂徠集・徂翁學則各一冊・三音正譌二冊・唐譯便覽五冊、實為<sup>二</sup>望外之幸、謝々、繼當<sup>二</sup>赴謝、尺牘先<sup>レ</sup>之、矩方再拜、

(添削は他筆)

與<sup>二</sup>松村文祥<sup>一</sup>

聞問濶焉、近狀云何、昨於<sup>二</sup>浦君所、見<sup>二</sup>尊弟宰輔、得<sup>レ</sup>悉<sup>二</sup>足下清健、往年山縣世璣之南遊也、遺<sup>二</sup>小野生之放翁詩抄一卷於尊叔秋君所、世璣謂一卷之書不<sup>レ</sup>足惜焉、唯借<sup>二</sup>人之物而失<sup>レ</sup>之、遂不能復、是為<sup>二</sup>一悔事耳、故蒼皇躊躇、復<sup>レ</sup>之之謀、嘗因<sup>二</sup>岡生而以書言<sup>レ</sup>之、又會<sup>二</sup>秋君而以口言<sup>レ</sup>之、而遂不能復、乃呆然絕望、歸<sup>二</sup>諸無可如何、世璣之意、實可體<sup>レ</sup>之、僕欲<sup>レ</sup>因<sup>二</sup>宰輔<sup>一</sup>言之足下、因<sup>二</sup>足下言之秋君、以復<sup>レ</sup>之世璣、又復<sup>レ</sup>之野生、願足下於<sup>二</sup>秋君、親則叔姪、居則鄉里、足下而言之秋君、固所謂一舉手一投足之類耳、乃一開口一鼓舌之勞也、故僕於<sup>二</sup>足下云々、抑且聞<sup>レ</sup>之、古之人為<sup>二</sup>朋友者、<sup>或</sup>阻<sup>レ</sup>難<sup>レ</sup>備嘗而不辭、況手足口舌之小勞乎、唯足下察<sup>レ</sup>之謀<sup>レ</sup>之、



另啓、去年之夏、安田子誠出養於山縣氏、改名衡、字世璣、是在其身上為一大事、而  
聞足下簡牘賀之、想未聞耳、方自足下辭松下之社而歸家而來、經月五十二、妻葛再更、  
嘗屬宰輔之婦、以國字書一通寄足下、足下不屑簡牘之末歟、遂不有迴音、僕疑足下之意。  
夫禮尚往來、未詳高意如何。  
 故尔後不復修書、已而謂、方其比肩追隨、相談咲、相唱和、一旦相離也、曾路人之不如、小  
也人之常態、好古志道之士、如斯而可乎、雖然不可言而言、是傷言也、君子之所惡也、  
然僕固可也、至如深栖山縣等、則其唯待迴音何如、矩方再拜、人品自不下與俗輩同、足下當以朋友之道、可不小人之  
 態、僕好敢言、故簡牘以陳區々、唯待迴音何如、矩方頓首白、

吉田大次郎再拜

兵學學規 (嘉永二年)

鄙生矩方才性鷲下、學識褊淺、而犬馬之齡、垂弱冠、諸老已以家業見任、亦唯以箕裘之業  
 不可曠、斗升之祿不可糜、妄處蒙生之先、固所不安、古之道稱、二十之時、博學不教、  
 內而不出、今既襲其業、則不得委諸古道、然竊自謂、古所謂教者、門人小子是刑是做耳、  
 非章講句釋之謂、是以難矣、觀于孔孟可見也、矩方則不然、只與共講究討論先師之書  
 已、矩方於先師之書、雖未得其要領、誦讀有日、雖不能企先輩造詣之深、至蒙生之

需、自有不甚辭者、故建設學規、與共從事于斯、凡學無規矩、無所統紀、雜博固陋、職  
 此之由、無益而有損矣、

初學者、先授以全書正文、逐次精讀二三遍、正文有文字短簡而含蓄、大費註解處、亦有委  
 曲而平易、不待註解處、亦唯悠柔厭厭、至難解者、蓄之胸中耳、不必籍人講說而通、  
 二三遍後、疑難交蒸、便授註疏讀之、則嚮之所疑所難、從讀從解、譬之食蔗、特恐其易  
 盡耳、註中所解、或有不合己意者、冊記以請人批評、為佳、切要不阿註家、其識力乃  
 進、其後博涉是務、上自孫吳、下至愈戚諸氏、自甲越、至輓近諸家、皆通習之、原聖經賢  
 傳、知立國行兵之大本、涉野史俗說、通臨時處事之萬變、覽華夷古今之籍、觀制度沿  
 革、人情異同、萬國形勢、所以不陷于孤陋也、雖然雜博無用、博期之實、是為得之、  
 盖用力于博、用心于實、久之、至見識高邁、知慮圓活、胸襟濶大、天下之理、一本萬殊、一  
 部全書實為全也、然此法為少解書義者耳、或其幼稚不能解書者、先授全書正文、次授  
 七經等書、使專力於誦讀、又勸其就儒師而受句讀、待畧解書、而後從事于規矩焉、或  
 其人老衰、非復少年精神、而要簡易者、先授註疏、使其省力、亦自一法也、是謂學規、初  
 學之士觀于此、或有取焉云爾、



庚戌九月仲八始詣萬介先生、適臥病、不得接見、因記來謁之由、與執事、(第五卷書簡、第五號、  
同文につき略す)

(與鄉人一書) (嘉永三年九月廿五日平戶客中)

矩方頃遊長崎、轉<sup>抵</sup>平戶、乃知東武之為都、初謂長崎清蘭商夷之所幅湊、其於夷虜之情、必洞而察之、平戶當賊衝而隣長崎、其於戰守之策、必講而究之、抵崎、交其人、聽其說、非誇說奇技淫巧華麗侈靡、則文化年時故事耳、其於夷情戰策、塗聽道說、固不足慊吾心矣、抵平戶、得觀新著數部、而致自崎云者十而一、致自武云者十而九、其虜情戰策、固依書而察而究耳、然則武豈不都哉、雖然矩方於是有所深感焉矣、夫平戶土地險阨崎嶇、雖吾長不足以此焉、而以其君好騎、馬匹蕃庶、官廐馬至于六十四云、其地西偏遠都、而以其老侯留意邊備、致新著數十部、且都之新著、獲諸清蘭者十常七八、經崎而至都、然後著也、是知求則無物不獲、不求亦何獲、今工藤半右適在都、諸老諸兄不以矩方之說為中大非、冀轉致半右、勸其求之、何如、秋冷漸臻、伏惟自重、月日、矩方再拜、

諸老  
諸兄

付片

一阿芙蓉彙聞 七冊

右疑係<sup>二</sup>楳谷甲藏所<sup>レ</sup>輯、凡五篇、曰、原始、禁煙、交兵、懲娼、善後、其所<sup>レ</sup>載、雖<sup>二</sup>隱憂錄所<sup>レ</sup>載、或蘭商風說、或鴉片始末之類、亦多<sup>レ</sup>未<sup>レ</sup>曾聞見者、頃借<sup>レ</sup>觀數冊云、

一海備芻言

右山鹿素水翁所<sup>レ</sup>著、而齋藤拙堂序云、未<sup>レ</sup>得<sup>レ</sup>觀焉、

一海防彙議 十冊

右輯<sup>二</sup>諸家海防議、會沢・齋藤之策亦載云、亦未<sup>レ</sup>得<sup>レ</sup>觀焉、

一新論 二冊

右會沢氏所<sup>レ</sup>著、形勢、虜情、守禦二篇、特其初篇耳云、亦未<sup>レ</sup>得<sup>レ</sup>觀焉、

一百幾撒私 五冊

右百幾撒私人名云、然此必論<sup>二</sup>百幾撒私砲之書也、未<sup>レ</sup>看、砲家豐島權平亦曰<sup>レ</sup>未<sup>レ</sup>看、自余數十部、共係<sup>二</sup>老公所<sup>レ</sup>致<sup>レ</sup>自武、以<sup>二</sup>其官書、未<sup>レ</sup>得<sup>レ</sup>縱借觀、故不<sup>レ</sup>復悉錄<sup>二</sup>書名、本藩既致<sup>二</sup>其書、否、聖武記附錄之由、與<sup>二</sup>家兄書中悉<sup>レ</sup>之、伏祈<sup>二</sup>商議、耽<sup>レ</sup>新好<sup>レ</sup>奇、無<sup>レ</sup>益<sup>二</sup>于事、歟、抑博搜徧求、有<sup>レ</sup>資<sup>二</sup>于學、歟、矩方白、  
庚戌九月廿五日起草



(添削は葉山佐内か)

論學一則 (年月不明)

學兵者、不可不<sub>レ</sub>治經也、何也、凶器也、逆德也、用以濟仁義之術、苟非通經者、安能然哉、禁暴弭亂、膺我懲<sub>レ</sub>荆、救生靈於塗炭、存<sub>レ</sub>國體於將墜、仁之至、義之尽也、若不<sub>レ</sub>然、利<sub>レ</sub>人土地兵甲士女玉帛、起<sub>レ</sub>兵以爭、凶孰甚<sub>レ</sub>焉、逆孰甚<sub>レ</sub>焉、苟徒講<sub>レ</sub>攻戰守禦百戰百勝之術、而不<sub>レ</sub>達<sub>レ</sub>所以用<sub>レ</sub>之之原、安知其不<sub>レ</sub>滔<sub>レ</sub>乎陷<sub>レ</sub>于此、吾故曰、學兵者、不可不<sub>レ</sub>治經也、但經亦多端、性命之精微、鬼神之幽妙、下及<sub>レ</sub>訓詁之繁冗、其書則詩・書・禮・易・春秋、有<sub>レ</sub>論孟、(有<sub>レ</sub>申韓、)有<sub>レ</sub>宋明諸家之學、有<sub>レ</sub>本邦伊物之流、推<sub>レ</sub>類分<sub>レ</sub>部、無<sub>レ</sub>知<sub>レ</sub>畔岸、如<sub>レ</sub>之何、其學兵之餘、而能偏探而精覈乎、雖然、人唯有<sub>レ</sub>五典五常、亘<sub>レ</sub>古今<sub>レ</sub>而<sub>レ</sub>變、雖<sub>レ</sub>夫精微幽妙與<sub>レ</sub>繁冗者、其言不能<sub>レ</sub>無人<sub>レ</sub>而<sub>レ</sub>異同、典常行<sub>レ</sub>於其間、而不<sub>レ</sub>相乖相悖、典常既得、凶逆可<sub>レ</sub>以濟<sub>レ</sub>仁義、學兵者之治經、於是乎足矣、何必朱王伊物云尔乎哉、唯泛濫無<sub>レ</sub>紀不堪其弊、故或朱、或王、或伊吾紀原、物、適從而可、

錄呈

鎧軒先生梧下伏乞

叱正

吉田矩方再拜

漫筆一則 (嘉永三年九月平戸客中)

古之論政者、曰率<sub>レ</sub>由旧章、曰政貴<sub>レ</sub>隨<sub>レ</sub>時、而世之守<sub>レ</sub>株膠<sub>レ</sub>柱者、頑然曰、吾能率<sub>レ</sub>旧、而不<sub>レ</sub>知<sub>レ</sub>天下之勢既已變<sub>レ</sub>矣、好<sub>レ</sub>新艷<sub>レ</sub>奇者、公然曰、吾能隨<sub>レ</sub>時、而不<sub>レ</sub>知<sub>レ</sub>祖宗之法既已爛<sub>レ</sub>矣、二者相背馳、而皆足<sub>レ</sub>以致<sub>レ</sub>禍敗、則古之論<sub>レ</sub>之者非耶、抑世之為<sub>レ</sub>之者誤矣、徒徇<sub>レ</sub>其名<sub>レ</sub>而不<sub>レ</sub>檢<sub>レ</sub>其實、所以誤<sub>レ</sub>也、余謂<sub>レ</sub>二者相濟<sub>レ</sub>為<sub>レ</sub>用、不<sub>レ</sub>初相背馳<sub>レ</sub>矣、今誠欲<sub>レ</sub>率<sub>レ</sub>旧、則不能<sub>レ</sub>不<sub>レ</sub>隨<sub>レ</sub>時、何則旧固隨<sub>レ</sub>時而立、必也觀<sub>レ</sub>時勢、而取<sub>レ</sub>舍斟酌<sub>レ</sub>於其間、然後旧可<sub>レ</sub>得而率<sub>レ</sub>矣、苟徒知<sub>レ</sub>墨守<sub>レ</sub>之、而不<sub>レ</sub>能<sub>レ</sub>觀<sub>レ</sub>時勢<sub>レ</sub>而取<sub>レ</sub>舍斟酌<sub>レ</sub>焉、則徒法雖<sub>レ</sub>存、其實既失、旧豈可<sub>レ</sub>率<sub>レ</sub>哉、然則隨<sub>レ</sub>時所以率<sub>レ</sub>旧也、雖<sub>レ</sub>然率<sub>レ</sub>旧隨<sub>レ</sub>時之間、自<sub>レ</sub>非<sub>レ</sub>擇<sub>レ</sub>之精、察<sub>レ</sub>之審、有<sub>レ</sub>所<sub>レ</sub>刻意勵精確守強為<sub>レ</sub>、未<sub>レ</sub>免<sub>レ</sub>守<sub>レ</sub>株膠<sub>レ</sub>柱、而為<sub>レ</sub>率<sub>レ</sub>旧、好<sub>レ</sub>新艷<sub>レ</sub>奇、而為<sub>レ</sub>隨<sub>レ</sub>時也、無<sub>レ</sub>所<sub>レ</sub>刻意勵精確守強為<sub>レ</sub>、則旧不可<sub>レ</sub>率、時不可<sub>レ</sub>隨、因徇依違、無<sub>レ</sub>成而終耳、則如何而可、亦唯藥<sub>レ</sub>不<sub>レ</sub>瞑眩、則病不<sub>レ</sub>瘳痊、奮然激昂、期<sub>レ</sub>於成<sub>レ</sub>天下之大事業、立<sub>レ</sub>天下之大經濟而已矣、則率<sub>レ</sub>旧隨<sub>レ</sub>時、亦在<sub>レ</sub>其中、余襲<sub>レ</sub>箕裘<sub>レ</sub>修<sub>レ</sub>家學、常用<sub>レ</sub>此說、

(西遊日記附錄第三  
所載同文につき省  
略)

(與<sub>レ</sub>鄭幹介)

(嘉永三年九月廿一日)



與三鏡軒先生

(嘉永三年九月廿三日長崎所寄)

嚴寒漸臻，伏惟萬福，告別之後，忽焉十餘日，寤寐反側，輒思侍書幃奉警效之時，茫然自失，留<sub>二</sub>在貴地之際，煩<sub>二</sub>先生實多，感謝萬般，至<sub>二</sub>飛船之事，最深拜<sub>レ</sub>辱，六日未牌開帆，天晴日暖，風微波恬，宛如<sub>二</sub>陽春，遙觀<sub>二</sub>河內之浦，追<sub>二</sub>思鄭氏之事，感慨勃<sub>レ</sub>々，扣<sub>レ</sub>舷獨嘯，至<sub>二</sub>區須止滿里，夜既過<sub>レ</sub>戌，風休潮逆，因投<sub>二</sub>碇泊舟，七日未明起<sub>レ</sub>碇，霜氣凜<sub>レ</sub>々，星彩爛<sub>レ</sub>々，晴色可<sub>レ</sub>喜，至<sub>二</sub>鯛浦，日既近<sub>レ</sub>午，潮候方好，徑進<sub>二</sub>瀨門，不<sub>レ</sub>得<sub>レ</sub>見<sub>二</sub>所謂桶子者，以為<sub>レ</sub>憾耳，至<sub>二</sub>時津，夜已亥，尚在船而宿，八日上<sub>レ</sub>陸就<sub>レ</sub>途，已時抵<sub>レ</sub>崎，訪<sub>二</sub>郡司生于其寓居，生四五日前已歸去矣，僕茫乎將<sub>二</sub>即去，遂過<sub>二</sub>高島氏，云，生將<sub>二</sub>數日而復來，幸少待<sub>レ</sub>之，於是投<sub>二</sub>所知醫生郵上仲亮者家，既而有<sub>レ</sub>人致<sub>二</sub>生所<sub>レ</sub>留書，云，待<sub>二</sub>足下<sub>レ</sub>久矣，僕資財懸罄，不<sub>レ</sub>可<sub>二</sub>久淹，乃抵<sub>二</sub>赤馬關而還，亦唯前日之約在焉，數日而將<sub>二</sub>復來，僕乃欲<sub>レ</sub>相拉歷<sub>二</sub>島原熊本諸府而歸，則前日之約既可<sub>レ</sub>踐，而復來之勞亦可<sub>レ</sub>償矣，某見書，謂義不<sub>レ</sub>可<sub>二</sub>即去，等待至<sub>二</sub>今日，已十餘日矣，歷<sub>二</sub>島原諸府，復延<sub>二</sub>數日，則誤<sub>二</sub>歸期不<sub>レ</sub>下<sub>二</sub>三十日，亦唯騎虎之勢也，雖<sub>レ</sub>然無<sub>レ</sub>入而不<sub>レ</sub>自得，學者之所志也，故自<sub>レ</sub>卸<sub>二</sub>行李以來，稍<sub>レ</sub>々<sub>レ</sub>暇，得<sub>二</sub>書數十冊，又知<sub>二</sub>士數名，得<sub>レ</sub>不<sub>二</sub>甚寥寥，書劍無恙，伏惟無<sub>レ</sub>勞<sub>二</sub>垂念是祈，草々裁書，蕪陋殊甚，某頓首。

附啓

洗心洞劄記四冊，獲<sub>二</sub>諸店上，得以窺<sub>二</sub>盜賊空虛之說，渠固卓識之士，吾人讀<sub>二</sub>其書，不<sub>レ</sub>挾<sub>二</sub>勝心客氣，而要<sub>二</sub>于躬行心得，不<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>無<sub>レ</sub>所<sub>レ</sub>發明焉，昔人不<sub>レ</sub>以<sub>レ</sub>人廢<sub>レ</sub>言之意或然，先生以為<sub>二</sub>何如，所<sub>レ</sub>賜瑤篇三章，感喜之餘，口哦不<sub>レ</sub>已，既而翻然生<sub>レ</sub>疑，謹按，末章押<sub>二</sub>婚轅刑字，而婚轅通用<sub>二</sub>先韻，刑字獨係<sub>二</sub>青韻，豈偶失乎，抑轉若通乎，某行李所<sub>レ</sub>携，無<sub>二</sub>韻書字書以資<sub>二</sub>考證，臆度以<sub>レ</sub>遵<sub>二</sub>無隱之義，併乞<sub>二</sub>高教，恐懼無<sub>レ</sub>已。

隨筆

(嘉永三年)

余觀<sub>二</sub>滿清鴉片之亂，大患在<sub>二</sub>漢奸自<sub>レ</sub>內勾引，蓋由<sub>二</sub>隣里鄉黨之制廢，而伴助扶持之教荒<sub>二</sub>耳矣，吾邦宗門之制令，伍法精明，不<sub>レ</sub>特足<sub>二</sub>防<sub>二</sub>邪教之染，萬一變故，亦可<sub>レ</sub>無<sub>二</sub>內奸勾引之慮，唯恐昇平之久，無<sub>レ</sub>復如<sub>二</sub>伊斯把尼亞·波爾杜瓦爾者，挾<sub>二</sub>邪教而入，則俗吏或視為<sub>二</sub>具文，未<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>知，儒者論<sub>二</sub>井田，或曰，可<sub>レ</sub>行<sub>二</sub>于後世，或曰，不<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>行，或曰，可<sub>レ</sub>行<sub>二</sub>于吾邦，或曰，不<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>行，夫指<sub>二</sub>井々區區，家治<sub>二</sub>百畝，同養<sub>二</sub>公田者，而為<sub>二</sub>井田，豈可<sub>レ</sub>行<sub>二</sub>于吾邦乎，抑未<sub>レ</sub>矣，乃如<sub>二</sub>九一之征，亦非<sub>二</sub>可<sub>レ</sub>行者，何也，國用有<sub>レ</sub>常，俸祿有<sub>レ</sub>制也，然是何傷<sub>二</sub>于王政乎，王者愛<sub>レ</sub>民之心固無<sub>レ</sub>極，而二十而取<sub>レ</sub>一，孟子以為<sub>二</sub>貉之道矣，唯征稅画一，而使<sub>二</sub>暴君汚吏無<sub>二</sub>時加<sub>二</sub>聚斂于正



征之外、則亦猶九一之制也、若夫出入相伴、守望相助、疾病相扶持、以致斯民親睦、則王政之要矣、而迂儒或視為支流、未可知也、余觀鴉片之亂、有知宗門之制固不可苟、而井田之法亦有可行矣、因表而出之、

吉田矩方再拜

(與人書)

月日、某再拜、先生六月十五日之手書、以客月念二日達、足下 盛嗽拜誦辭氣愿款且既以某氏之策二道、乃審不見棄、不堪感佩之至也、而所既二策、反覆數回、初奇之、謂文巧而論當矣、既而又謂、是未免俗習之見耳、試舉一二質之先生、足下 夫恂々然畏三西夷、如猛虎、滔々乎喜三奇異、如美玉者、蓋都下之俗習也、今春有下人自江都歸、某因問以都下之事、其人有云、曰、都下談兵者、自非術涉西洋、不在屈指之數、又曰、侯伯有倣西洋之節制而操銃隊者、

俗習二字、先破都下談兵者之膽、(深柄評)

眼高、(同)

又曰、有翻譯西洋鈴鞘之書銃砲步騎之說者數十種、夫以蘭學名家、以翻譯為務者、槩鑿家者流也、鑿而講兵書、非其專攻、胸中無所素持焉、且非欲明其道、窮其術、以裨補國家、徒取代其耕耳、固不知有下我人情與夷不一、我兵制與夷不同、夷之某器不若我某器、夷之某術勝於我某術、此事行於彼不行於我、此法便於海而不便於陸也、亦豈

求窮其所未知、而歸之可必用哉、然而妄意譯其書、一向術其術、驅陋劣無識好奇喜異之徒從之、終至侯伯閣其家法、而專倣彼、實可長大息矣、江都蘭學家之淵藪也、号大家名家極多矣、大家名家者異口同談、誇說夷之人物制度、以術其術、則信者益篤、疑者終信、確乎不惑者、無一人焉、於是乎其風習成矣、今策中都賈、田舍兒、西土之虎、長崎之犬、虎狼、蜂蠱之數喻、如謂下万無奈何之中唯有中一死、何畏夷如彼、謙我如此也、是亦陷于彼誇說之論耳、惡在其審夷情乎、嘗以兵之多寡強弱較彼我、西洋諸國以魯西亞、貌利太泥亞尤稱盛強、而其本國之兵、皆不過數十萬、比吾邦所備、三分之二耳、吾邦雖昇平之久、武藝操練亦不甚生、由是觀之、彼豈遽得視我如田舍兒、策中又有水戰火術則效而修之之語、某窃不取焉、謂水戰火術必不倣彼、夫西夷水戰之術無他長、船制堅牢而長大、如城郭而已矣、是豈可倣乎、夷之得製是船、亦自有由、蓋夷以貿易為生、以侵掠為事、潮汐之所通、無遠而不至、唯其貿易為生、故其得奇貨不少、可以償製船之費、唯其侵掠為事、故其船有所用、而非徒設之器、我則異此、国之儲雖無乏、其入自有常数、夷之寇雖可備、其來固無定期、安得糜國用而徒造之、且大船非我技之所習、又非我性之所適、胡元寇鎮西、豐公征朝鮮、我每々以小者制大者、亦可以見我之長矣、我欲捨此而倣彼、豈不悖事情乎、西夷銃砲之制、與本邦不同、本邦之砲、要不動如山、故其製



不佞嘗學三操刀之術，讀至此，服乎君之精於其技。(深標評)

重遊，牀有三層之設，是以彈丸必遠達而善中，雖三四十丁之遠，可以殺敵，雖咫尺之近，亦可以殺敵，故術士有與砲同死之言，西洋砲反之，要其疾如風，故其製輕便，有三車臺之設，是以丸不遠達而善中，故有與小銃合編之制，砲之用於利是為少矣，若欲其活動，則我更有行軍砲用三百錢者之說，又有鳥銃，何舍此而就彼乎，且至小銃，則欲倣夷之為者尤惑矣，觀夷之隊法，三人為伍，層列為一行，並列數行為隊，一隊九三層，案夷說云，三人直列，一行為三隊，多隊多並列，十六行為一隊，設幾丁，設幾丁二前後左右務相緊隨如一字形，以薄隊形，敵砲之來，如墜自空，則百發而難一中，且雖中不過殺三人若六人耳，銃頭施劍，以兼長短之用，銃丸之徑不甚小，而銃極輕便，約之以步法，使全隊數十人一舉手一投足皆一，以肅氣齊力，是其大畧也，奇則奇也，然何足倣乎，欲倣夷之為，其尤不可者五，夫相緊隨，則兩刀大不便，故隊形之小，不若夷，減人數，則銃之多不若夷，又折士節而解兩刀，以悉倣夷之為，亦惡若其數十年用之實地之精且熟乎，其不可一也，夷之手法步法，則夷性之所適，而樂而實學焉，我士氣勇悍強捷，手步之法，其勢自有與彼不同，則固不樂而實學，操之雖數年，安能如夷乎，画虎適類犬耳，其不可二也，銃頭施劍，則本重而未輕，權衡失宜，其用固鈍，是何有利於殺敵乎，且我則有刀有槍，其利銳萬國無比，豈可以外夷至鈍之物，代我神國至利之刃，其不可三也，夫丸徑不小而輕便，則丸不遠達也，亡論已，我銃則更遠達，豈有舍己之長，從人之短之

理乎，其不可四也，古之論兵者曰，取用於國，蓋以其習慣也，以其衆多也，今欲舉倣夷，新操之術，不如此夷之習慣，遠來之器，不如此夷之衆多，其不可五也，且夫本邦之砲與西洋砲異矣，獨西洋砲，其彈之來自空，故隊形薄，則百發一中亦以難，苟悉本邦砲之用，破賊隊更便者，夫有五不可而無一益，其得失不待論而判然矣，唯其馬術，或可以補我之闕，蓋聞，西夷馬隊以擾銃隊為務，故其調習飼養鑿治之術，必有足用焉，且夷陵萬里波濤而來，不能多從騎，故我用騎而利也，凡用兵之道，以異敵人之為為貴矣，自銃砲船馬之術，異夷之為，而利乃可收矣，而今欲舉而倣之非也，近本藩或亦倣夷之銃隊而操之，且以倣夷之為，囂然自誇說，大異某所聞，蓋本邦銃砲之源，出于西洋，而論其道傳其術者，未嘗誇說其所出焉，有古人之深意也，凡知其道則慕其人，知其人之則慕其國與世，人之情也，儒者之艷于漢，鑿者之艷于蘭，其理一也，夫艷于外國者，禍寓乎不測，某故謂有古人之深意也，且古之人，神會其道，活用其術，獲魚舍筌，至如與彼初不相涉也，今之人則異是，艷于夷也，頑然，誇于夷也，囂然，形容坐作，皆倣夷以高于世，豈古人之心邪，某又過慮謂，夷學之日明，陷外國之畫中也益深矣，西夷以兵書鬻我，豈特要利而止乎，必謂使日本倣之，然後可大有為，某目擊方今之事，不任忿忿之至，因策中之言，反覆推論之，足下以質先生，足下以為何如先生教以當否是祈，論多強枉，文無條理，炳亮幸甚，時維歲寒伏惟自愛某拜白，



立論恰如韓白之口授、使都下之談兵者避三舍、豈唯都下之談兵者哉、使西洋夷一讀焉、則膽寒而阻絕覬覦之心也、文字之妍媸、豈足論哉、此吾輩之所以不能容喙也、敬服感服、或曰、孔子之胃、千歲無顯人、非無顯人也、難為顯也、使貴家之世業再鳴者、非君而誰也、

辱交 深栖幹妄言

與清水赤城書 (弘化四年二月朔)

(初稿である、貞の卷に添削を施したものがあつた故に、のは略する)

與妻木士保 (嘉永元年)

矩方性狂愚、而少有慷慨之氣、不屑為白面之書生、愛馬革裹尸之氣象、常舉以語足下、足下亦不以為非、因謂足下慷慨可交、僕平居謂、方今天下清寧、上自相將、下至士庶、偷安玩歲、因循苟且、至武備之事、率措而不講、居其職而素其餐、為其事而無其功、雖萬無天墜之懼、綢繆之謀不可忽、況今羯狗窺我、日甚一日、一旦有變、何以對君上、何以對祖宗、何以對方民、何以對本心、四月中、足下奉命管砲、僕抃躍曰、慷慨之人為之、砲之一事既修矣、及足下請業永氏(守水編右衛門)益信所見之不誤、而期將來之可振、爾來每接足

下、未嘗不問以此事、而不聞有所振作、僕甚疑焉、因數詰由、初詳足下之意、如外夷不足慮、國事不足憂者、及僕力弁、足下曰然、其後又詳足下之意、刀槍、兵士之急務、棄急務而及他事、未得其間、且砲、平生之所未習、今而卒然學之、賊之來、一日之外不測、不幸而學未成而有變、何以處之、將具由辭之、僕一再弁之、而足下未以為然、因自顧、愧無鑒識之知人、而前日之失言、欲默々而止、既而又謂、朋友之義、不宜如此契(契カ)、且前日之所弁、皆不得肯綮、特與足下論弁闘口舌耳、宜矣愈言而愈不能服足下之心、今當改陳、願足下不以僕之愚、而虛懷留意聽之、夫人臣之事君有二、有以道者、有以材者、以道者常難于進、而以材者否、古之聖賢隱晦耕之間、則輸租稅、供徭役、致手足之力不辭、而及上求見之者懇請再三、然後始應、今仕者世祿、則已致身于君、々因其材、而任使之、當致力竭思、勤勉刻苦、夜以繼日、以求適用、斃而後已、此猶為人民輸租稅供徭役也、而足下悠悠々不絕以曠日、恐非所以事君、且足下果辭之、將更以何圖報、今切為足下二謀、當專力于永氏之學、與同儕議、請官操練打砲、如此、則不久而其技可習、其用可弁、足下自奉命以來四五十日、不無如此之間、而未施行、僕之所以致疑也、宜早謀之、企足舉首、待回音何如耳、矩方再拜、



護民策一道 (嘉永元年五月六日)

豐公之征朝鮮、土人畏我兵勢也、分散遁逃于荒野、食盡餓死者極多矣、平八之猾大坂也、老幼恟々、哭痛之聲盈街、由此觀之、方今天下雖無事、一旦有烽燧之警、則孰保無餓死與哭痛乎、則制之之術、不可不講也、余嘗竊推戰國間之事、太率其國有難、則人民扶老携幼、裹糧收財、避之深山幽谷、寇退則還、幸而無毀傷其牆屋則可矣、蓋古者、人民習戰、平居虞變習戰、故不至于惶恟奔走、後老棄幼、虞變、故不至于急遽草率、遺糧忘財、譬如今人避水火、漲落炎滅則還、苟不漂其宅焚其居、則豈以為大患哉、今也不然、以不習戰之人、無虞變之心、吾不善制之、而任彼自為、則狼狽紛擾為何如哉、而制之之術無他、平居申令曰、賊之來、或猛威可懼、何事於細民、必能安其居、勿騷勿走、家隣里鄉、皆自有長、聽令勿背、家無丁壯、而老幼婦孺于隣里者、隣里勿不惠、紛紜擾亂、勿雜隊部、凡犯斯科者、人々得斬之、又預為之法、町奉行巡行市座、代官巡行郡鄉、縛執犯令者、喻之誠之、每要約之處、置關差兵、以要遁逃之人民、具銃砲兵器、以備不虞焉、輪次巡行、以要間道之遁逃焉、一管轄之各所陣將、且以巴城形勢論之、新溝諸江、凡七、兩川之橋、凡二、四郊山坂、凡五、皆此所也、如是而一郡一鄉、金城而湯池也、一郡一鄉金城而湯池、然後人心始定矣、而猶遁逃者滿街逼闕、則斬其一二以

町奉行巡行市座、代官巡行郡鄉、今制為然、而不知此輩預講是等之處置、否也、(治心氣齋評)

徇、如是而人心不定者、未之有也、雖然有是說而無是法、則不能補十分之一、有是法而無是教、則不能補十分之五、夫愚鈍無慮者、莫甚于細民、必也上有法、下有教、處置得宜、然後庶幾補十分之七八、余亦不敢自謂之全策也、故或以為迂、余亦以為迂、但謂比下謂之迂而不為、臨變身自狼狽者、則不迂一等耳、或以為慘、余亦以為慘、但謂比下謂之慘而不為、遭事使民餓死、則不慘一等耳、或曰戰士戰、而守兵守、鑿賊而後安民、何必減戰守之兵、而分差四方、制其遁逃之煩之為乎、余以為不然、何則縱人民之遁逃、則士心亦不堅、吾士心不堅、而賊兵勢益奮、何以能鑿賊乎、兵法自戰其地為散者、非以是歟、且夫人民者、國之精氣根本也、精氣耗而四體衰、根本搖而枝葉彫、人民逃則戰雖勝、守雖堅、亦暫耳、何以能永久哉、為人上者、奈何不敬、

戊申五月六日

吉田大二郎再拜

置關、得我心、不獨撫定人民擾亂、更有置之於死地而助我勢氣之利也、何以言之、愚嘗聞市井之語、曰、勿為雇卒而入隊伍、不得臨事容易逃亡、如取松明、則甚易逃亡、嗚呼、雖市井之小人不足論、而預為此言、則警急可知耳、前者賊船數十艘泊對馬島、人人不言老幼、把農具等奮激待之、何則馬島孤立乎大海中、無所逃亡也、是置之死地也、能置人於死地、而後勝可制矣、

治心氣齋主人



課業人物論

北條早雲

先勝而後求戰、修己而後攻人、寧費歲月之久而且不悔、○是我北條早雲之所、以戰必勝、攻必取、得之五世、功業日昌、以豐臣 德川之勇知、而不能俄取也、夫 我本邦、士氣強剛、驍勇、得之天性、而及室町衰、英雄割據、各競雌雄、於是天下之武風一旦鼓舞縱好勇惡怯榮死辱生將士皆謂與退而全軍、寧進而覆軍、是以以上杉謙信之英敏、而有小田原之役、將士離散、卒之委輜重而去、以豐臣大閣之雄畧、而有高句驪之役、上下倦怠、要之勞而無功、蓋皆任己之明敏雄畧、而少老成之計、廟勝未必決、○求戰勝於原野、己未全、修而或攻入於鋒刃、求盛業大功乎目前、而不必期保之万世也、早雲則不然、初早雲陰窺伊豆、而未得間焉、足利政知長子茶々狀繼母、弑政知、殺大臣、而自立、早雲聞之、乃伴稱有疾、浴伊豆溫泉以調之、曰、伊豆可取也、遂勒其七隊、并今川氏援兵、凡五百人、抵堀越氏、縱火攻之、茶々自殺、以余觀之、政知庸主也、其政令不能服關東之人民、雖為三兩上杉所陽尊、其受三山內氏封耳、且於是時兩上杉主、皆以暗愚管大國、上下壅蔽可知已、則於伊豆之治安得將士一體守備、周整乎、然則伊豆之為國、固其太易取者耳、一旦茶々之

○添削は他筆  
○一旦機來、如火然原、如

逆、事以三理勢論之、黨者半、則不黨者亦半、○豈得三其合一乎、至早雲所率之兵、則積思之所感、人々欲三自效、人心之離合如是、其勝敗亦為三較、著矣、一旦早雲之於伊豆、其所曾窺至、地形人情將士智愚勇怯守備疏密、固已諳而知之、然則機來、乃起乘之而可如無、復煩揣度思慮者、然必也浴湯調之、而後為之、亦可三以見早雲之思慮縝密也、且以小制大勢不得不然也何則其所謂七隊及援兵者孤注也一旦失之則後日之所畫策皆隨失焉是以不容不縝密也然世之甚縝密者、多無及事雖有機來尚懷猶豫之思早雲則不然、雖三其縝密、至見可乘、亦甚果決、是所以其為英雄也、何日果決其於伊豆之役、夜濟三黃瀨川、且抵堀越氏、其於箱根之事、被獵衣裳、縱牛隨之、非果決之謂乎、然以縝密為主、果決輔之、故其成功運鈍夫豐公老、而其子見放、謙信死、而義子爭嗣、若北條氏、確乎五世、父死而適、未嘗見有篡奪之逆、是豈偶然乎、與下豐公謙信之、為目前之謀、而不及身後者、固不同、余故曰、先勝而後求戰、修己而後攻人、寧費歲月之久而且不悔、余嘗論之、今之時使早雲者使三之、依三松前崎、如三其今川、○流三落蝦夷薩嘴之間、必懷惠三鮮其土人、如下、假貸遠近、收以薄息之事、其有疾病也、如三救伊豆之疫、教諭之也、如三諭伊豆之父老豪傑、更能隨時隨處千變万化、合三其人情、應三其民心、以致三上下之一體、睥睨滿清止里、如三、兩上杉、又如助三定正而攻三顯定、之事如三兩虎相鬪、一狗乘之、之警其間或有下如藤賴者、乃如下被獵衣裳踰三箱根之事、而主三持費歲



月之久而不悔之心、則可大有成也、且早雲則實單身也、今有斯人、則蝦夷薩嗚我屬國也、堂々神國為之依據、神威之所臨、百蠻震恐、其於張勢為尤便矣、嗚呼、今之時、無復有如我北條早雲者、即有之、亦絕無有、如足利義視者、古今人不相及信哉

吉田大次郎再拜

(對問)

問、攻守之道、大而言之、為君之道、小而言之、為將之法也、而子一命之士、而身學習之、益何哉、對曰、威南塘曰、天下之事、難者多矣、至于兵、難之尤者也、夫兵之為道、材智過于人、而學習又致精、然後有得矣、雖有材智、不學習、之則無取於習俗、而無法於古、不能與古之良將智士、議論揚榘推其事、亦已而已、雖學習之、無有材智、亦固於法術、而無弁用於今、兵家之事、千變萬化、安能一々處之而得其當乎、二者、偏得其一、亦難、況兼之乎、夫材智得之天、學習之人、二者得之與不得、有命而存焉、雖以君將子弟或不兼之、雖以一賤士之子或得之焉、其天者得之、人者雖賤士亦當講習討論、寧忍以一身非其職而棄之哉、夫織田信長於豐臣秀吉、武田信玄於山本道鬼、皆能舉側陋而充將校、其事固邈矣、然上有可言之事、我有可言之實、則言之可也、言而不聽、亦無實也、言而聽、則有益、

△行間細書の夫材學の上にある口而巳の三字意義がわからぬ

△一旦有事、誰任其責者、故待用于他日耳

也、何必身親登壇、折衝禦侮、戰勝攻取出諸已、而後愉快乎、古曰、詢于芻蕘、後之君將、何獨不然乎、且以本藩之事度之、平士之任、官、不可不知兵機者、不下三十員、而貴族上下任陣將隊長、在外焉、不亦多乎、○是雖如不足大展其才、亦非斯道之裂而何也、夫道、大、其所學者、或行、或不小行、或不行、命也、時也、於我何慊也、至若得天下之英才而教育之、後世識者聞而知之、則姑屬之餘事云

吉田大次郎再拜

○今屈指世之學兵者、僅々無幾、以不學無識、充之、是雖如士之所任、其用固小、然非學斯道者、則其事廢矣、凡戰、操練之平時、縱令不能親身行之、得英才而教育之、如大江、於八幡公、永鍊戰必勝乎、為後世之程式、如甲越山鹿北條諸家之、亦所以為益也、

漫錄 (弘化二年)

天文九年秋九月四日、尼子晴久圍我郡山城、即夜、洞春公召家族國老、從容語軍事、因曰、得先簡戰而見敵人首級、幸也、兎玉就英竊聞曰、是易事耳、乃戴笠披蓑、為漁者裝、漁、南軍陣前小渠、北軍士井原七十郎來見之、就英拔刀劊之、歸獻、公不悅曰、我未之命也、不許、謁者旬日、蓋惡其阿君心、而圖寵祿、其不出武士正道、而為野人黠計也、而或謂公心悅其忠、而以不待令而發、不待已黜之、殊不知公存心于王室、其志非小、不下一首級而為喜悅、亦明矣、而曰公悅之、實以小人一度聖賢耳、



(以下長槍論論批評  
添削及心氣齋)

三五人主擊、勇而  
人亦主擊、勇而  
有主擊、勇而  
人主擊、勇而  
力、而未必勝、  
何則、有術存焉、  
愚故以為古之  
為勇士也、易  
而今之為勇士  
也難矣哉、  
未悉、  
凡槍法、鋒常下  
向、而忽刺、刺  
喉、鋒常上向、  
又忽刺、刺腰、  
鋒下向、未刺、  
喉、鋒上向、未  
必刺、腰間、是  
熱槍法者也、  
然初上陣之士、  
恐出於操習之  
十一耳、況未熟  
者乎、莫如鋒  
下而難入也、  
主刺、故一二寸  
之功、先生不  
思

槍鈹說 (弘化四年)

嘗聞之、槍鈹能擾亂敵隊、非刀劍之所能及也、初謂、槍鈹之為器也長、故其為用也遠矣、此所以刀劍之不能及也、頃求其所、以然者、恍然如有得之于心焉、夫槍鈹之用、不主敵一人、而主撥衆人、不主刺喉咽、而主擊脛股、唯夫不主敵一人、刺喉咽、故手握之外、所剩之柄五六尺者、皆為我用矣、此其所以非刀劍之所能及也、夫主敵一人者、遇二人之敵、則已、若遇三人五人相伍、為主助應援之勢之敵、則必為他所困矣、故以撥衆人為心、則雖敵我者衆也、亦不以為畏也、主刺喉咽者、所照常高、而槍鋒常上向矣、鋒上向、則敵一格而進、則已深入我槍身內、故要脛股、擊脛股、則鋒常下向矣、鋒下向、則敵必難入焉、且夫主刺、則不盈尺之刃、豈利於三尺之刀劍、況刺而不中、勢不得、不縮、不縮必為敵所入乎、夫臨戰、精神靜定者蓋鮮矣、精神不靜定、則手握處不活潑、手握處不活潑、則刺敵難中、不中則縮退、兩陣相接之際、其幾微矣、一人回頭、大眾同疑、一人轉移寸步、大眾亦要奪心、況人々以刺而不中縮退、寧不鈍兵鋒乎、凡敵一人、刺喉咽者、若單騎相較、則古或有之、兩陣相接者、當有獨身一槍、衝突大陣之勇氣矣、焉區々為敵一人、刺喉咽之事乎、如下大久保忠為魁于吉田、三村某、大河內秀光殿于朝

槍之有縮、猶  
兵之有守、守是  
攻之機、縮是刺  
之機、此則以槍  
而言者也、若以  
軍陣言之、縮  
恐有害于戰  
勢矣、學槍之  
士、不可不  
察、然以縮之  
故、未必可廢  
刺、要活潑應  
而已  
(治心氣齋評)

鮮、皆以二二人、克撥數千萬人之敵焉、兵士之所宜法也、故曰、槍鈹之用、不主敵一人、而主撥衆人、不主刺喉咽、而主擊脛股、或曰、若子之言、則今之學之者、非邪、曰、否、不然、去今之法、而將何往焉、然以今之所學為實用、而拘之者、必為術所誤矣、為無益而廢之者、必為器所使矣、二者、皆一偏之說也、予嘗謂、今之學者所得三、活潑得之于手、進退得之于足、機會得之于心、此三者、學之益也、只在用之何如耳、先生識高、能論妙處、惜哉不親學習之、故至論末、則有未能服人者、

治心氣齋主人

甲冑論 (弘化四年)

兵家之  
凡。器械、有衛身者、有克敵者、甲冑楯櫓所以衛身也、弓矢戈矛所以克敵也、既有甲冑楯櫓之衛身、而後以弓矢戈矛克敵、是猶以一術為正、一術為奇也、堂々整々、以正合、以奇勝者也、然器械有變、固不可執一而論也、何謂變、曰、有古用而今廢者、有今有而古無者、若火器、則今有而古無者也、既有火器、則甲冑之堅、為之所奪矣、蓋甲冑之於銃砲、猶寡之於衆、弱之於強、固不可敵也、故以寡弱之兵、當衆強之敵、欲堂々整々、則必為彼所粉齏、故或乘暗夜襲之、或擇鐵騎突之、或以水夫佐戰、一用奇術、然



如彼所謂中、  
錄、雖不中、  
而必受其害、

後可以制勝矣、而器械亦有此機、兵家、不可不知也、若賊盛放銃砲、而我欲接戰者、當不  
披甲、胃、而使足便疾、手便刺擊、直撥亂賊隊部也、蓋甲胃之作、起于不得已也、而  
今乃果無益乎衛身、則何如脫去之輕便乎、且西洋發銃砲不必中、而要多發、故我被  
重甲、則進步艱澁、不能迅速接之、而受其害也更多矣、則豈不  
嘗見魯西亞、都兒格等  
戰圖、並無披甲者、然賊若以接戰為主者、即未可下輕以赤體與也、

先生之論悉矣、今與賊戰、其勢當如此、雖本邦砲術家、亦言甲胃益鮮而害多焉、然愚不  
能無半信半疑于此焉、亦質之於先生、西洋各國以火器為主、兩軍相接、而猶不能  
棄銃砲、雖似助戰勢、而或有害于兵機矣、且器械有增人志氣之德、況於衛身者  
乎、本藩頃嚴備甲胃、至為廝養雜卒備之、則或有以紙製塞責者、卒見之、大有危  
懼之色、有以鐵製之者、出而示之卒曰、披之則可以赴戰、夫愚昧之卒、固已知甲胃  
之不可當銃砲、而未免有恃于此也、由是觀之、甲胃不可廢也、廢與不廢、其有  
關係於兵機也大矣、不可不察也、愚乃以為或廢、或不廢、共因時宜耳、且其製作務  
要輕便、切禁重大、先生之意如何、

治心氣齋主人

長槍論 (弘化四年)

雖無損益於  
我、而恐增敵  
氣、所謂得勢則  
為之益、威我  
既然、可以恕  
人也、  
長槍卒、固不可  
後、唯撰其人  
而已、

孫子曰、善戰者、求之於勢、不責於人、夫勢如轉圓石於千仞之山者也、得之者勝、失  
之者敗、其得失之際、謂之機矣、兩軍未接之際、我打銃而進、兵刃將接、一齊打放、及  
藥煙未散、而長槍隊長以身先卒、迅疾衝突乘之、勢之得失分焉、所謂謂機也、或曰、長槍手雜  
卒耳、手無技藝之熟、心無義勇之存、惡可使在陣頭乎、殊不知求於勢者、不責於人、  
苟得勢、則勇者不獨進、怯者不獨退、齊勇如一、惡愛雜卒無技藝義勇乎、而其能  
如此者何乎、由隊長之忠以奉上、勇以先卒、然則撰隊長、亦不重乎、蓋古人以長槍備于  
陣頭、可謂用心深且遠矣、夫兵士以雜卒在前、亦不有恃焉、故長槍而失勢、亦不至兵  
士為之破膽、得勢則能為之益威、若使其在兵士之後、固以為壁壘干楯、是以兵士轉移  
寸步、則風靡而不可復止焉、兵士能卻敵鋒、則固無待乎雜卒矣、故曰、古人、用心深且  
遠矣、  
吉田矩方

求於勢之論、固出於意表、非責於人者之所及也、夫求功於勢、則製槌而當秦楚之  
兵、亦不為難、然求於勢者既在我、加之以下責於人者、則兵氣十倍、而其收功也易矣、  
愚故謂、二論合行之、則天下無強敵矣、  
先生嘗曰、長槍、余有別論、今作長槍論、々固未當然、實以候先生之論耳、伏乞叩其兩



學官秋試

平内府論

此惡文、僥倖入内科、可恥之至也、

弘化四年丁未九月晦具

學官秋試平内府論一通

吉田大次郎

(紙表)

(半紙二ツ折形)

(當時學館に出した  
真蹟の此文稿には  
員の手による添削  
がしてある本添削  
發行間細書は本添  
添削は松陰の自訂  
るは松陰の自訂であ  
たの抹消)

凡事親之道、居人倫之變、而事頑嚚之親、亦有經權焉、蓋以所居不一、而所遇不同耳、所謂易地皆然者也、何謂經、愉色婉容、負罪引慝、曲承其意、是也、何謂權、熟諫善諭、千方盡術、要歸諸正、是也、虞舜之事瞽瞍也、夔々齊慄、唯失其懼、是懼、故完廩之火、浚井之土、

無一所忤命焉、蓋曰、宜樂其心、不違其志也、平重盛之事清盛、則不然、其橫逆狂暴、知無不諫也、故上皇之幸、稱病則諫、禿童之鑿、虐下則諫、怒基房則諫、族成親則諫、至其欲圖不軌、且泣且諫、務感其志、而猶慮不入也、則假稱以受詔、而徵兵士于第、以畏其志、蓋曰、是豈可号泣而隨之者乎、是所謂行權者也、夫經者、至誠之感、固無待于權、々者、假助于術、而亦歸于誠、曰經、曰權、以所居之異而然、固不可下以權之故而非之也、故曰、易地皆然、何謂所居之異、曰、夫瞽瞍者吠畝之一頑夫耳、雖令彼縱所為、其毒害之所被、不過隣里、固不至于為大姦也、至清盛、則豈如此而已耶、其親、爲皇后之父、爲至尊之舅也、其貴、爲天下之相也、而任左右大將者、皆出其諸子、則又有兵馬之權也、以上逼上皇、下虐百姓、其心之所能忍、而其力之所得為一也、瞽瞍之與清盛、其志之小大、其毒之輕重、不較而可知也、夫清盛之惡、過於瞽瞍、重盛之德、不及虞舜、為重盛者、豈不難乎、重盛而行舜之所行、則清盛之驕僭、益無忌憚矣、是所以其有待于權也、夫藥石之苦、鍼砭之痛、所以去病而保身也、熟諫善諭、苦諫、重盛之所以安清盛也、若人有病而不下餌藥石、下鍼砭、則其加也必矣、清盛而不諫諭、則其不得尊死也必矣、是可見重盛之孝、而其孝乃所以為忠也、世之論者謂、重盛豈忠哉、亦繼清盛之志者也、何則平氏之驕僭、於是乎極、雖漢之梁氏晉之楊氏、何過焉、重盛果忠乎、宜恭敬謙抑其身一



也、而自請拜<sub>二</sub>右衛大將<sub>一</sub>、非<sub>レ</sub>要<sub>レ</sub>君乎、余謂、重盛之事<sub>二</sub>君父<sub>一</sub>、用<sub>レ</sub>心深、慮<sub>レ</sub>憂遠矣、故先為<sub>二</sub>之防<sub>一</sub>耳、當<sub>二</sub>是時<sub>一</sub>、平氏之顯赫、至<sub>レ</sub>曰<sub>二</sub>非<sub>レ</sub>其族<sub>一</sub>者非<sub>レ</sub>人也、則使<sub>二</sub>重盛不<sub>レ</sub>請、而他人拜<sub>レ</sub>之、亦必平族也、若使<sub>二</sub>他人拜<sub>一</sub>、必濟<sub>二</sub>清盛之事<sub>一</sub>、勢已至<sub>レ</sub>是、則重盛雖有<sub>二</sub>諫<sub>レ</sub>之之心、無<sub>レ</sub>有<sub>二</sub>止<sub>レ</sub>之之力、故曰、用<sub>レ</sub>心深、慮<sub>レ</sub>憂遠矣、由<sub>レ</sub>是知<sub>二</sub>其自請則忠孝之志、而非<sub>レ</sub>為<sub>レ</sub>身謀<sub>一</sub>也、亦所謂權也、論者又謂、重盛告<sub>レ</sub>神而祈<sub>レ</sub>死、有<sub>レ</sub>不<sub>レ</sub>憂<sub>二</sub>父之禍<sub>一</sub>、而欲<sub>二</sub>獨潔<sub>二</sub>其身<sub>一</sub>之意、非<sub>レ</sub>孝子之所<sub>レ</sub>以為<sub>レ</sub>心也、余謂、是妖妄無稽之說耳、死生有<sub>レ</sub>命、豈可<sub>レ</sub>以<sub>レ</sub>祈<sub>レ</sub>而得<sub>レ</sub>乎、重盛實患<sub>二</sub>瘍疾<sub>一</sub>而沒、死非<sub>二</sub>其志<sub>一</sub>也、何以知<sub>レ</sub>非<sub>二</sub>其志<sub>一</sub>、曰、清盛之惡、貫盈已久、其無<sub>レ</sub>悛心<sub>一</sub>也、不<sub>レ</sub>待<sub>二</sub>是時<sub>一</sub>而後知<sub>レ</sub>也、設令重盛有<sub>二</sub>求<sub>レ</sub>死之志<sub>一</sub>、則遲留顧惜、豈至<sub>二</sub>于此<sub>一</sub>哉、且觀<sub>二</sub>其稱<sub>レ</sub>詔徵<sub>レ</sub>兵之事<sub>一</sub>、欲<sub>レ</sub>以<sub>レ</sub>姑畏<sub>二</sub>清盛之志<sub>一</sub>、因以度<sub>レ</sub>其後耳、是重盛之志也、豈有<sub>レ</sub>半途而忘<sub>二</sub>君父<sub>一</sub>、而祈<sub>レ</sub>死之理<sub>一</sub>乎、其無<sub>二</sub>此事<sub>一</sub>也、斷可<sub>レ</sub>知矣、病革之間、若有<sub>二</sub>此言<sub>一</sub>、則或者出<sub>レ</sub>于<sub>レ</sub>知<sub>二</sub>病之必不<sub>レ</sub>起、而憂<sub>レ</sub>志之不<sub>レ</sub>能<sub>レ</sub>終也、其心必謂、死既不可<sub>レ</sub>免、唯可<sub>レ</sub>以<sub>レ</sub>感<sub>二</sub>父志<sub>一</sub>、古者、史魚屍諫、能進<sub>レ</sub>賢退<sub>二</sub>不肖<sub>一</sub>、足以取<sub>レ</sub>法焉、其用<sub>レ</sub>心也、與<sub>二</sub>藤房之遷、正成之死<sub>一</sub>同、欲<sub>二</sub>其君父之一旦翻然悔<sub>レ</sub>前之所<sub>レ</sub>為<sub>レ</sub>也、非<sub>レ</sub>欲<sub>二</sub>自潔<sub>一</sub>也、亦所謂權也、夫生則盡<sub>二</sub>其辭<sub>一</sub>、死則盡<sub>二</sub>其心<sub>一</sub>、然而清盛之不<sub>レ</sub>悛者天也、亦何得<sub>レ</sub>答<sub>二</sub>重盛<sub>一</sub>哉、至<sub>レ</sub>如<sub>レ</sub>其信<sub>レ</sub>佛而為<sub>レ</sub>之供<sub>レ</sub>燈、贈<sub>二</sub>金育王山<sub>一</sub>之事、余固疑<sub>レ</sub>之、然風習之沾染、雖<sub>レ</sub>以<sub>二</sub>重盛之賢<sub>一</sub>不<sub>レ</sub>能<sub>レ</sub>脫者、或有<sub>レ</sub>之、縱有<sub>レ</sub>之、何有害<sub>レ</sub>乎其為<sub>二</sub>重盛<sub>一</sub>乎、且 本邦載籍、佛氏之徒、造<sub>レ</sub>怪紀<sub>レ</sub>偽、以<sub>レ</sub>衛<sub>二</sub>其說<sub>一</sub>、

\*（進賢の下に而の字が入れられてあるのは松陰の自訂である）

不足<sub>レ</sub>取<sub>レ</sub>信者、固為<sub>レ</sub>不<sub>レ</sub>少矣、如<sub>二</sub>二事<sub>一</sub>、亦詎知<sub>レ</sub>不<sub>レ</sub>出<sub>レ</sub>于<sub>レ</sub>斯、若以<sub>レ</sub>是非<sub>二</sub>重盛<sub>一</sub>則誤矣、孟子有<sub>レ</sub>言、曰、尽信<sub>レ</sub>書則不<sub>レ</sub>如<sub>レ</sub>無<sub>レ</sub>書、若能取<sub>二</sub>其可信<sub>一</sub>、捨<sub>二</sub>其不可<sub>レ</sub>信<sub>一</sub>、則重盛之忠孝、亦何容<sub>レ</sub>疑焉、

吉田大次郎矩方再拜

南北興亡論

或曰、南朝之將帥、自<sub>二</sub>楠・新田<sub>一</sub>以下、其事<sub>レ</sub>上也忠、其相接也和、其視<sub>レ</sub>卒也愛、據<sub>二</sub>正義<sub>一</sub>而臨<sub>二</sub>逆賊<sub>一</sub>、而終不<sub>レ</sub>成而折、北朝之將帥、奸邪讒佞、甚至<sub>レ</sub>于<sub>二</sub>以<sub>二</sub>將軍之弟<sub>一</sub>、叛降<sub>レ</sub>敵、求<sub>二</sub>其善謀善戰者<sub>一</sub>、寥寥乎、而足利氏遂以成<sub>二</sub>霸圖<sub>一</sub>、由<sub>レ</sub>是觀<sub>レ</sub>之、賢者之無<sub>レ</sub>益<sub>二</sub>於國<sub>一</sub>者、是邪、一余曰、否、南朝之所<sub>レ</sub>以<sub>レ</sub>亡<sub>二</sub>、天下厭<sub>二</sub>朝政<sub>一</sub>也、失<sub>二</sub>賞信於赤松<sub>一</sub>也、佞臣格<sub>二</sub>善謀<sub>一</sub>也、北朝之所<sub>レ</sub>以<sub>レ</sub>興<sub>二</sub>、天下樂<sub>二</sub>武治<sub>一</sub>也、國郡之封不<sub>レ</sub>愛也、諸侯疆大、足<sub>レ</sub>以<sub>レ</sub>拒<sub>レ</sub>寇自衛<sub>一</sub>也、此其得失之顯然者、自古之所<sub>レ</sub>通論<sub>一</sub>也、且就<sub>二</sub>戰法<sub>一</sub>論<sub>レ</sub>之、亦大有<sub>レ</sub>得失、蓋南朝之諸將、以<sub>二</sub>忠藎之心<sub>一</sub>、銳意竭<sub>レ</sub>力、不<sub>レ</sub>復計<sub>二</sub>利害<sub>一</sub>、勤王敵愾、東奔西走、是以不<sub>レ</sub>能<sub>レ</sub>相<sub>レ</sub>時察<sub>レ</sub>勢、一張一弛、從容活潑、攻<sub>二</sub>必不<sub>レ</sub>拔<sub>レ</sub>之城<sub>一</sub>、衝<sub>二</sub>必不<sub>レ</sub>敗<sub>レ</sub>之敵<sub>一</sub>、以<sub>レ</sub>自挫自斃、使<sub>二</sub>北朝<sub>一</sub>得<sub>レ</sub>興、至于<sub>二</sub>尊氏諸將<sub>一</sub>、皆自營<sub>二</sub>其利<sub>一</sub>耳、非<sub>レ</sub>殺<sub>レ</sub>身成<sub>レ</sub>仁、故可<sub>レ</sub>為<sub>レ</sub>則為、不<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>為<sub>レ</sub>則不<sub>レ</sub>為、綽々有<sub>レ</sub>裕、乃與<sub>二</sub>見<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>而進、知<sub>レ</sub>難而退者<sub>一</sub>、有<sub>二</sub>暗合<sub>一</sub>、是所<sub>レ</sub>以<sub>レ</sub>其為<sub>二</sub>得失<sub>一</sub>也、然則一興一亡、時也、勢也、凡戰道、屈伸之理、變化之妙、無<sub>二</sub>時而處而



不存焉、而諸將中善明斯理者、獨楠公而已矣、其他則無、其言曰、勝敗常也、不可少挫折、交其志、故赤坂之難、詐死、公綱之來、不戰、金剛之守、無倦色、京師之戰、詐喪、將及尊氏大舉東上、又奏避其銳、不聽、乃死、非深明屈伸變化者、安能如是哉、嗚、令天子與時將帥盡知此理、恢復決不難也、其他諸將之死、要自挫其銳耳、雖遭天步艱難、甚不可為而死、實為可悲、抑亦非謀之善者也、故余意謂、南朝之事、宜遣還諸將於其本土、畜力足食、使內殿實不輕舉兵離土、隣國有隙、則乘之、以徐謀之恢復也、其處置之要、坏城郭、繕器械、用間諜、置斥候、通機密、便應援、養士馬、教旗鼓、恤陣亡、療夷傷、賑矜寡、復流亡、勸力田、墾草萊、無非畜力足食之策也、敵來則固守封疆、不與爭、敵虛則長驅陷數十城、敵守則誘其邊氓、以少惠、招其將士、以國郡、多方擾之、無非乘隙之謀也、夫諸將拋於本土、狼踞虎視、則天下之形勢蓋有其半、且楠在河內、可下以蔽吉野而窺京師、新田在越前、則可下以與楠為犄角、而絕東西、北畠之在奧、可下以率東北之官軍、而平定地方、乃南部之在極北、得延松前蝦夷、以深根本、菊池之在肥、可下以挫小貳大友、而驅探題、乃大館之在豫、合連之勢、得由益張、名和、兒島、忠勤之最篤者、而在伯備、可下以扼山陰山陽也、而戰畧關係之大者、非所可忽也、東北宜騎、固已用之、西南宜船、未必用之、由其所用、戰畧存焉、不可不習練鼓舞也、志摩伊勢之海戰

習、則宗良親王之在駿、亦可少安焉、伊豫之海戰習、則菊池之圖豐、亦可得力焉、雖然我能往、寇亦能往、習練鼓舞、敵豈不為哉、唯我善和善勤、事無遺陋、每々先人、乃為可恃耳、是南朝之事也、抑詳成敗之情、使尊氏諸將當南朝之難、吾見其叛逆相尋、潰散立滅耳、金崎鷹巢之義死、豈復有其人哉、夫京師、北朝之心腹也、義詮、將軍之嗣子也、以嗣子守心腹、而受攻輒走、以至于五六、其無堅志如斯、賢者之有益、於是乎見矣、

○ (與御辭介書の餘白に附記したるもの)

- 内藤安房守 奉行 御代官付
- 一色丹後守 御米藏預十二人
- 高木定四郎 御代官 御武具藏預四人
- 旗本格御鉄炮方高木助二郎 長崎 會所役人
- 御勘定役三人 輪番
- 御普請役二人 唐通事
- 與力 盜賊方六人 三人ッ、 蘭通辞
- 町年老七人 年番アリ 七十七丁



商買ノ頭 宿老四人 京大坂江戸境

五ヶ所宿老五人 御奉行付

散使

町司

舟番

唐人番

遠見番

御船頭

御役所座

長崎甚左衛門

一町ノ長一人 一町二人 一町一人

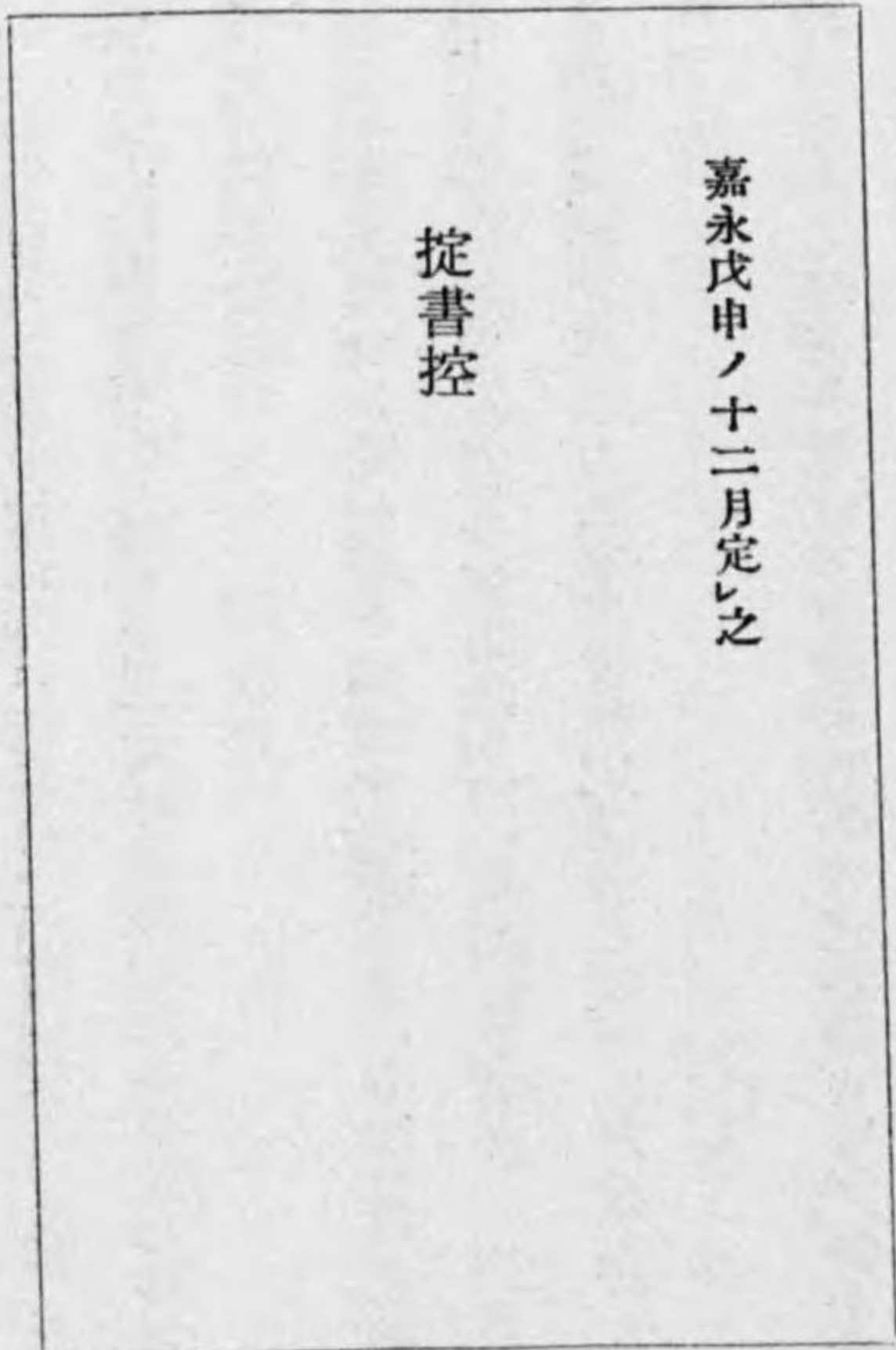
乙名 組頭 月行司 市中取

瓊浦

垣田元仙

未焚稿

亨



(紙表)

嘉永戊申ノ十二月定レ之

捉書控

(兵學寮捉書條々案)

今般厚記 御思召ニ由明倫館御興隆被ニ仰付候ニ付門弟教導之儀先達武藝師一統御再興方



被<sub>レ</sub>仰渡<sub>二</sub>候趣有<sub>レ</sub>之総しる武士やしるを義茂守り法を正し孝悌忠信禮儀廉恥之行を勵<sub>ミ</sub>深く文學ニ志し常々武藝を玩む古之忠臣義士ニ及ん事を冀ふ是則本分之職ニノ御奉公之基本ニ候假令一技一藝ニ拔群たり共己が才能ニ誇つて長上を凌ぎ礼法戎乱り候輩と治世にてハ上之御風化戎坊け戰場にてハ大將之法令を破り治乱共ニ御奉公之道茂知<sub>ル</sub>ざる輩と言べし然ハ武邊修行仕候者此誠を努々忘却不<sub>レ</sub>仕御興隆之 御思召ニ相叶候様相互ニ申談し稽古出精仕度事ニ候依<sub>レ</sub>之兵学寮稽古之規則左之通相定候事

一稽古之法式面着之順次ニ隨む銘々課業之書講習可<sub>レ</sub>有<sub>レ</sub>之候左候る見合頭取并身柄間可<sub>レ</sub>致<sub>二</sub>監督<sub>一</sub>候尤上等之衆之儀ハ見合身柄間計り可<sub>レ</sub>致<sub>二</sub>監督<sub>一</sub>候事

一各輩課業講習之書之外兼る私業之書相定講習之暇可<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>致<sub>二</sub>研究<sub>一</sub>候疑難之處質問之儀可<sub>レ</sub>準<sub>二</sub>前條<sub>一</sub>候事

一一應之稽古相濟<sub>ニ</sub>候後各申合せ會讀會講等相催候儀可<sub>レ</sub>為<sub>二</sub>勝手次第<sub>一</sub>候事

一毎月三日宛朝四ツ時<sub>ハ</sub>中等已上之衆傳書討論會可<sub>レ</sub>相催<sub>一</sub>候左候る見合衆不<sub>レ</sub>殘出勤にて身柄一同監督可<sub>レ</sub>致候事

但討論會前後<sub>ニ</sub>常式可<sub>レ</sub>致<sub>二</sub>稽古<sub>一</sub>候左候る會業之節ハ初學其外會外之衆可<sub>レ</sub>有<sub>二</sub>聽聞<sub>一</sub>候事

一上等之衆毎月課業論策貳度宛相調へ可<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>申候事

一中等之衆毎月傳書講義史類和譯各壹度相調へ可<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>申候事

但論策講義漢文和文可<sub>レ</sub>為<sub>二</sub>勝手次第<sub>一</sub>候事

一於<sub>二</sub>學寮<sub>一</sub>着席其外言語應對ニ至る迄尊卑長幼之序ニ隨む禮儀禮讓茂專とし鄙俚猥雜之譚話等堅可<sub>レ</sub>相誠<sub>一</sub>候事

一他之稽古場に行キ候歟或ハ早帰り等之節ハ身柄并見合頭取間<sub>ニ</sub>其由具達之上可<sub>レ</sub>有<sub>二</sub>退出<sub>一</sub>候事  
一學寮罷出課業不<sub>レ</sub>相勤<sub>ニ</sub>面着而已にて被<sub>レ</sub>致<sub>二</sub>退出<sub>一</sub>候段名聞を專<sub>ニ</sub>せし候様相見甚以不本意之事ニ候萬一左様之儀御座候ハ、面着除キ可<sub>レ</sub>申候事

一他流を毀り候ハ勿論総る妄りニ人を是非長短致し候儀堅可<sub>レ</sub>相誠<sub>一</sub>候事

一講習討論之節勝事を好む之心茂持シ人之議論を排斥し私之意見茂遂げ候儀深く相誠むへし専ら義理茂明ニせる之心懸可<sub>レ</sub>為<sub>二</sub>干要<sub>一</sub>候事

一多人數之中ニモ自然氣性之不同も有<sub>レ</sub>之もの候へ共是等之類大概私心より起る事ニ候へハ互ニ寛容いとし隔心無<sub>レ</sub>之様相心得先進を敬む後進を導候儀可<sub>レ</sub>為<sub>二</sub>干要<sub>一</sub>候事

右之通相定候間自然違犯之衆有<sub>レ</sub>之候へハ無<sub>レ</sub>據師弟之義茂絶候儀茂可<sub>レ</sub>有<sub>レ</sub>之候處左様ニる<sub>ニ</sub>第一御主意筋も難<sub>ニ</sub>相立<sub>一</sub>甚以氣之毒之至ニ候間宜可<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>相守<sub>一</sub>候事

申ノ十二月

吉田大次郎



此分別紙新折手紙ニ相認差出候事

此度明倫官御再興ニ付私稽古場提書大略別紙之通相定可申奉存候然處御再興ニ付るハ一統被仰出候儀も可有之候ヘハ差除之箇條表可有之且等級其外見合人數等追々申出仕候儀被仰出候上ニ書加可申箇條も可有之ヲ奉存候間其節増損仕相定處追可申出候奉存候事

申ノ十二月

吉田大次郎

嘉永貳巳酉二月五日

御再興方に差出候控

吉田大次郎

(紙表)

明倫官御書物類是迄官外ハ三部ニ限り且手形等差出借下ケ仕來候處當時別文武御興隆之儀御座候得兵書類并歴史其外兵學ニ預り候書物類兵學寮に部數之限り無之且手形等ニ不<sub>レ</sub>及諸生寮に御貸渡之形ニ<sub>ノ</sub>通帳を以る借下ケ相成候様尙又殿様御參堂或ハ當役衆見分等之節表控本其外講釋講義等にて俄等<sub>(四字衍カ)</sub>にて俄ニ入用之書籍を於<sub>ニ</sub>時<sub>ニ</sub>借下ケ被<sub>ニ</sub>仰付<sub>ニ</sub>候様相成候ハ、難<sub>レ</sub>有仕合ニ奉<sub>レ</sub>存候此段宜様御詮義被<sub>ニ</sub>仰付<sub>ニ</sub>被<sub>レ</sub>下候様奉<sub>レ</sub>願候以上

酉ノ二月

吉田大次郎

多田藤五郎

大西喜太郎

(兵學寮日割稽古を銘々稽古場に改められ度願書)

今般明倫官御興隆被<sub>ニ</sub>仰付<sub>ニ</sub>劍槍射術之儀を銘々稽古場有<sub>レ</sub>之其餘稽古場之儀孰<sub>レ</sub>是迄<sub>カ</sub>ハ手廣く相成候就るを私共一統厚に御思召之旨奉<sub>ニ</sub>感戴<sub>ニ</sub>門弟教導之儀微力<sub>レ</sub>盡し専ら心配仕度奉<sub>レ</sub>存候然處兵學之儀ハ禮式砲術等之稽古共違ひ兼る修行仕候筋至る手廣き事ニ<sub>ル</sub>和漢古今之兵書軍記等専ら博涉仕候ニ付るを先幼少初學之輩ハ句讀<sub>カ</sub>授け追々等<sub>レ</sub>経る進<sub>ニ</sub>學力<sub>レ</sub>相備り道理之大畧ニ通し候ハるを不<sub>ニ</sub>相成<sub>ニ</sub>事故中々日割稽古等にてハ教導<sub>カ</sub>難<sub>ニ</sub>行届<sub>ニ</sub>歟<sub>ト</sub>奉<sub>レ</sub>存候是迄之儀を館中稽古日之外於<sub>ニ</sub>宿元<sub>ニ</sub>會業等相催候得共向後<sub>ニ</sub>稽古仕候<sub>ニ</sub>面々孰<sub>レ</sub>官中<sub>ニ</sub>日勤<sub>ニ</sub>て終日稽古可<sub>レ</sub>仕候<sub>ニ</sub>ハ



右宿元會業等難ニ相調ニ奉レ存候宿元會業相止候得ニ是迄古稽古日數致ニ減少ニ可レ申候左候ヘテ素ク  
 懈怠勝之人情如何様鼓舞仕候ルモ興起致兼候儀表可レ有レ之歟且總ル甲州越後北條山鹿等之兵學ニ  
 皆古人之陳跡ニテ當今為レ指益ニ不ニ相成ニ之の杯も心得違出來可レ仕哉表難レ計奉レ存候乍然等  
 畢竟兵學未熟ニテ甲越流ニサヘ申候ヘハ早晚五段之備ニ限リ候ル別手段無レ之様考候類之陋見カ  
 起リ候ニテ若左様之儀ニテモ孔明ガ八陣李靖ガ六花モ不レ能レ申何流ニテ表無益ヲ可レ有レ之候得ニ  
 全流儀之罪ニテ無レ之偏ニ學者之罪ニテ何之流逆表古法古義表推廣免時勢ニ叶ヒ候様修行仕候ハ  
 同主意ニ御座候然モ強ク右体之儀を心ニ懸ル事ニテ無ニ御座ニ候ヘ共文武御引立ニ付ルハ相成事ニ  
 候ヘテ少壯之銳氣表挫候様之儀無レ之様仕度候旁兵學寮之儀も劍槍射術同様ニ銘々稽古場ニ相成  
 候ハ、御興隆之一助ニ表可ニ相成ニ奉レ存候此段宜様奉レ願候以上

二月

吉田大次郎

嘉永戊申歲

兵學寮掟書條々

吉田大次郎

(紙表)

(前文總テ前掲の案をその儘用ひ、唯流を禮ニ改め禮儀の儀を義ニ改めたるのみであるから、此處には掲載を略し規則箇條のみを掲げる)

- 一 享保度御定相成候文武稽古之式并今般増補被ニ仰付ニ候條々其外被ニ仰出ニ候旨宜様可ニ相守ニ候事
- 一 學業之次第等級之序ニ隨ヒ孤陋ニ陷ビ雜博ヲ趨ビ實用ニ相叶候様可レ被レ致ニ修練ニ候事
- 一 稽古之法式中等以下之衆面着之順次ニ隨ヒ銘々課業之書講習可レ有レ之候左候ル見合頭取并身柄  
 間可レ致ニ監督ニ候事
- 一 上等之衆之儀ニ毎月五度宛夕八ッ時ハ七書其外諸家之書討論可ニ相催ニ候事
- 一 毎月三度宛夕八ッ時ハ中等以上之衆傳書討論會可ニ相催ニ候尤員外并等級未定之衆ニテも力量次



第會業ニ相加リ候儀可レ為ニ勝手次第候左候見合衆不レ殘出勤ニて身柄一同可レ致ニ監督ニ候事

但討論會前後ニ如ニ常式ニ可レ致ニ稽古候左候會業之節ニ初学其外會外之衆可レ有ニ聽聞ニ候事

一各輩課業講習之書之外兼る私業之書相定講習之暇可レ被レ致ニ研究ニ候左候疑難之處時々可レ被

レ致ニ質問ニ候事

一一應之稽古相濟ニ候後各申合せ會讀會講等相催候儀可レ為ニ勝手次第候事

一員外并等級未定之衆稽古之品銘々任ニ其意可レ為ニ勝手次第候事

一上等之衆毎月課業論策貳度宛相調ヘ可レ被レ申候事

一中等之衆毎月傳書講義史類和訳各壹度宛相調ヘ可レ被レ申候事

一等級筆並順次之儀少シ依怙ニ涉ビ嫌疑を避ビ衡平之處ト考相定候事ニ候乍ラ然勿論不當表可レ有

レ之候處其段被ニ氣付ニ候衆無ニ遠慮ニ可レ被レ致ニ評論ニ候於ニ其理ニ優劣相試候上可レ致ニ黜陟ニ候事

一於ニ学寮ニ着席其外言語應對ニ至る迄尊卑長幼之序ニ隨ル礼儀禮讓専ヤシ鄙俚猥雜之譚話等堅

可ニ相誠ニ候事

一他之稽古場ニ行き候歟或ト早歸り等之節ハ見合頭取間ニ其由具達之上可レ有ニ退出ニ候事

一学寮罷出課業不ニ相勤ニ面著ノミニテ被レ致ニ退出ニ候段名聞を專トシ候様相見甚以不本意之事ニ

候萬一左様之儀御座候ハ、面着差除キ可レ申候事

一他流を毀り候ニ勿論惣ニ妄リニ人を是非長短いとし候儀堅可ニ相誠ニ候事

一講習討論之節勝事茂好む之心を持シ人之議論を排斥し私之意見茂遂げ候儀深く相誠むべし専ら

義理を明ニする之心懸可レ為ニ肝要ニ候事

一多人數之中ニモ自然氣性之不同有レ之もの候ヘ共此等之類大概私心ヲ起る事ニ候ヘモ互ニ寛

容致し隔心無レ之様相心得先進を敬む後進指導候儀可レ為ニ肝要ニ候事

右之通相定候間自然違犯之衆有レ之候ヘハ無レ據師弟之義を絶候儀及可レ有レ之候處左様ニ有レ第一

御主意筋を難ニ相立ニ甚以氣之毒之至ニ候間宜可レ被ニ相守ニ候事

申ノ十二月

吉田大次郎

(右擬控書東京市吉田茂子氏藏のものあり、校合濟園)



嘉永元年十一月二日於益田支蕃殿宅左之通  
 授相成候事  
 今般明倫官御興隆ニ付るハ厚況  
 思召之旨深感戴仕各其業を相勵

等級之次第

門弟取立候儀肝要ニ付先達る銘々氣附  
 筋申出有之其詮義相成候然處門弟取  
 立之義ハ兼る師家\*

(紙表)

\* (表紙の文末缺く、この授けの全文第  
 七卷明倫御御再建控に在り)

等級之次第

一初學 素讀之部

内

乙科

入門之初此科ニ入傳書素讀仕候事

甲科

傳書讀終り此科ニ進ミ七書其外之兵書素讀仕候尤漢文自在ニ讀得候へハ乙科ハ直様中等ニ

進候事

兵學之儀ハ和漢古今ニ通し候ハるハ變化少ク遂ニ傳書之義を推廣免奥を極る事不レ叶也  
 の故初學ハ其心得を用ひ候る教導仕候事

初學ハ中等ニ進候法漢文之書之内四五ヶ所即席素讀ニ試レ之

一中等 傳書講釈之部

内

乙科

初學ハ此科ニ進ミ傳書之内武教小學書侍用武功名撰功上同斥候上等講釈仕候事  
 此諸篇終り候へハ武士之教誡臨陣一區きの心得戰功軍法之次第使番物見之要訣等相弁ふる  
 能実用ニ心を用ひ候へハ治乱共ニ一騎前之心得大畧相調候事

甲科

一騎前之業相濟候後此科ニ入傳書初篇ハ終篇迄通し講釈仕候事  
 中等ハ上等ニ進候法傳書講釋相濟候後全部之内四五ヶ所即席講義ニ試レ之

一上等 諸家涉獵之部

七書を始免和漢兵家之書古今之軍記等ニ博涉るるを業せし且兵機ニ関り候史論策論并疑義難



問等題を設け胸中ニ致<sub>レ</sub>蘊蓄候兵理ヲ文ニ發シ書ニ述<sub>ル</sub>之修練仕候事  
上等ノ最上等ニ進み候法和漢軍記之内疑義難問等を以<sub>ル</sub>ニ度試<sub>レ</sub>之毎度即席相調<sub>ヒ</sub>其述<sub>ル</sub>所  
理ニ當り又ハ一説ニ備ふべきハ最上等ニ進ミ候尤文章漢文ニ限り不<sub>レ</sub>申候事

中等ノ傳書を以<sub>ル</sub>專業とを言共其暇涉獵を勤<sub>ル</sub>上等と和漢ニ涉獵と云共其間節々傳書  
を照<sub>ル</sub>は勿論之事

凡胸中ニ其理を致<sub>シ</sub>蘊蓄候も文ニ發シ書ニ述<sub>ル</sub>事不<sub>レ</sub>能ハ其道未熟之故ニ候へ共且  
作文之修行不<sub>レ</sub>仕故ニ候心ニ致<sub>シ</sub>會得ながら筆紙ニ述<sub>ル</sub>事不<sub>レ</sub>相成<sub>ニ</sub>不便利之事ニ付講義  
論策等と傍其弊を救ん為<sub>ニ</sub>御座候併心を文章之道に潜<sub>ル</sub>辭句花やり成を主とをるに<sub>レ</sub>無  
レ之達意にして明白成を以<sub>ル</sub>主と致<sub>シ</sub>候事

一最上等

諸家之博を窮<sub>ル</sub>傳書之約に反<sub>リ</sub>候部

七書其外和漢古今之書籍等何<sub>レ</sub>傳書之義を擴<sub>ル</sub>奥を極<sub>ル</sub>の助ケに候へは博涉仕候餘、約を  
知り本ニ反<sub>リ</sub>傳書一部ニ收<sub>リ</sub>候段兵学の要に<sub>ル</sub>最上等之工夫に御座候事

一員外

流義功者ニて是迄免許皆傳等相濟候歎<sub>ル</sub>於<sub>ニ</sub>流儀一厚き勤功有<sub>レ</sub>之候部并中年已上ニて御役

所勤仕官暇之時分罷出少壯之者同様ニ出精不<sub>レ</sub>得仕候部又ハ壯年を過<sub>キ</sub>候<sub>ル</sub>此度 御興隆厚  
に 御思召之旨奉<sub>ニ</sub>感戴<sub>ニ</sub>折々稽古場罷出候へ共一々等を追<sub>ル</sub>進<sub>ル</sub>様之修行不<sub>レ</sub>得仕候部此科

二入候事

此科の儀<sub>ニ</sub>當時之振合を以<sub>ル</sub>暫時立置候へ共數拾ケ年之後只今少壯之者成立候上ハ自然<sub>ト</sub>  
此部無<sub>レ</sub>之様相成可<sub>レ</sub>申<sub>ニ</sub>奉<sub>ニ</sub>存候事

右此度明倫館御再興ニ付私稽古場等級之次第前書之通相定可<sub>レ</sub>申<sub>ニ</sub>奉<sub>ニ</sub>存候以上

與<sub>ニ</sub>劍客齋藤新太郎<sub>一</sub>書 (嘉永四年)

(添削評點は深柄であら)

某生<sub>ニ</sub>武門<sub>一</sub>列<sub>ニ</sub>士籍<sub>一</sub>、而才鈍質弱、幼也父兄責以<sub>ニ</sub>讀書<sub>一</sub>、至<sub>ニ</sub>馳<sub>レ</sub>馬試<sub>レ</sub>劍之事<sub>一</sub>、措<sub>ニ</sub>諸度外<sub>一</sub>而不<sub>レ</sub>省、  
荒<sub>レ</sub>職棄<sub>レ</sub>業、矣、然僕之自待、未<sub>レ</sub>敢<sub>ニ</sub>比<sub>ニ</sub>尋常之人<sub>一</sub>、  
今已<sub>ニ</sub>二十二年<sub>一</sub>荒職棄業内顧悚然但<sub>ニ</sub>二十二年之轍不可輒回<sub>一</sub>、欲<sub>レ</sub>得<sub>ニ</sub>有志氣<sub>一</sub>者、有<sub>レ</sub>所<sub>ニ</sub>議論<sub>一</sub>、而  
求<sub>ニ</sub>諸<sub>一</sub>文人儒士、委靡柔懦、趨<sub>ニ</sub>文華<sub>一</sub>而無<sub>ニ</sub>実論<sub>一</sub>、求<sub>ニ</sub>諸武人<sub>一</sub>、粗鄙自足、無<sub>ニ</sub>學識<sub>一</sub>、皆非<sub>ニ</sub>吾所欲與議論<sub>一</sub>  
也僕雖鈍且弱荒職棄業之人竊有得於古人而自以為期者也、何<sub>レ</sub>者夫<sub>ニ</sub>藝<sub>一</sub>、氣之輔也、氣、志之隸也、  
有<sub>レ</sub>志而後氣為<sub>ニ</sub>之用<sub>一</sub>、有<sub>レ</sub>氣而藝為<sub>ニ</sub>之用<sub>一</sub>、苟無<sub>ニ</sub>志與<sub>レ</sub>氣<sub>一</sub>、其為<sub>ニ</sub>藝也雖<sub>ニ</sub>精且巧<sub>一</sub>、臨<sub>レ</sub>敵而沮、遇  
敗而挫、甚至<sub>ニ</sub>有<sub>ニ</sub>禍福利害所<sub>一</sub>屈撓<sub>ニ</sub>而替<sub>ニ</sub>其常度<sub>一</sub>、者是何足<sub>レ</sub>尚乎、昇平之久、風習日汚、所謂  
武者徒藝是學、苟非<sub>ニ</sub>有志氣<sub>一</sub>者興而振<sub>ニ</sub>發<sub>ニ</sub>之<sub>一</sub>、江河滔々、何所<sub>ニ</sub>底止<sub>一</sub>、願<sub>ニ</sub>僕之鈍弱<sub>一</sub>、固非<sub>ニ</sub>所能抑



也王豹縮駒華周杞梁之妻，尙能有以變其國俗，況僕幼從事于學，而不不足使百千砥礪振發其風習，激勵其志氣而其藝可尙將何以報所生哉是所自為期也若乃區々為一文人。僕亦不為，果足下乃以僕為荒職棄業之人，其大節或為不失矣足下以為何如向足下之來弊邑劍鋒無前，声名籍籍如是則雖荒職棄業之人，其大節或為不失矣足下以為何如向足下之來弊邑劍鋒無前，声名籍籍甚，僕時意，特粗鄙，耳，又有稱足下，工詞章善議論者，僕亦意，特文華耳，遂不敢一見請問也，頃來江戶有潘人從足下一學劍者，稱道先生有志氣之士也武而不粗，華而有實，毅然以天下士風為己任，僕聞蹶而起，謂殆先得吾心者，歟，悔向失斯人今當相見而交臂，議論，敢以書先之，某再拜，

復中村道太

(嘉永四年)

六月念七得書，勇往之氣，蓬勃逼人，如相對晤言，教僕以所師，深謝情義，僕來江戶已三月矣，未有所師，意江戶之地，無可師之人矣，何者，都下文人儒師，賣講代耕，無復士人任道之志，固不論也，今僕與足下，貫武門之籍，學武士之道，其所素志，所常職，與都下所謂文人儒師云尔者，固有庭徑，若夫弓馬武夫，氣貌可嘉，而學識淺陋，鮮有大志者矣，是所以無可師之人也，況僕經術之粗，文章之陋，足下之所熟識，雖得文人儒師而從之，固無進益之可望也，僕之學，獨有償所素志，盡所常職而已，足下以為

僕不以其人而  
乃以此人為  
其人也  
有文亦佳氣而  
行通亦無兄果  
古取斯言乎僕  
能也而後必  
(深禮可)

何如，有山鹿素水者，雖無學術，才性過人，能講究家學，良齋經學文章，卓尔大家，諄々誘人，皆可輔吾學耳，東肥人宮部鼎藏，毅然武士矣，僕常以為不及，每々往來，覺有資益，旬日前作房相行，亦相隨云，宿陰子，僕亦嘗欽其為人，頃聞篤疾，未得相見，鄙況碌々，因仍舊貫，足下有氣，必非僕迂腐，源々吐露，幸辱鞭策，疾速裁答，不能多及，二白，嚮辱贈言，今賚芳誨，而僕百事仍々，久缺問聞，無禮之極，不覺汗背，但恃知己之人，必不以區々末節，疑吾責吾而已，

與阿兄

(嘉永四年四月二十一日)

有所志而遊，不遠三千里，去國而來，荏苒四十五日，未有所發奇策，發雄論，可以聞家庭者，所志蔽乎，豈果消滅而尽乎，羞恥之事，孰甚焉，其在行也，官程有期，道雖近，心則急，加以軟脚弱體，不能跋涉名山川，經歷古戰場，慷慨悲憤，發為詩文，以奮吾勃々焉者，其來邸也，居所未奠，假寓他局，人皆有官守，比局冗劇，吾輩遊學書生，事雖簡，心則動，且所交，俗士胥徒而已，所讀，陳編腐文而已，不能讀放縱豪蕩之文，交卓犖慷慨之士，豪談劇論，以養吾浩々然者，夫心急而動者，涵養無素，志氣有時餒而然耳，則何疑乎無奇策雄論，頃居處初奠，欲讀文交士，償初所志，矩方於是有私謀於阿兄者，夫去



國三千、平日之所交遊往來、師之友之、寤寐不能忘于懷者、人之情也、既不能忘于懷、修書以通問問、亦所以行情也、情而不行、離人類而陷禽獸、以獲罪於師友矣、嗚呼、奇策雄論、舉以質示師友則善矣、不可不為也、苟徒通問問、而取于免罪焉耳、為與不為、豈大庭徑哉、費不可輕之光陰、役不可三用之精神、并厄楮與墨筆、而無一益于彼此、不亦迂哉、夫平安之報、於家庭則足、自餘尋常問問、寧獲罪斷不為、不知於道之權何如、且使矩方碌々無狀、依然旧態、死生天壽、固不足言焉、幸而少有所得、期滿而歸、訪旧尋盟、未晚也、誠如是、而後事可省、事省而志可專、志專則奇策雄論、往將有所得焉、不知卓識以為何如、伏乞高教、若以為不非、冀致此意於治心氣齋先生、及同社諸賢、求其以所得不惜示、以問問不致責、幸甚々々、矩方再拜、

四月念一

家伯教兄

梧下

曹參論 (嘉永四年)

良齋批題  
○鄙文一通錄呈

良齋安積先生帳下伏乞

大教

吉田大次郎矩方頓首百拜

(紙表)

凡天下之事、創業、<sup>似</sup>難而易、守成、<sup>似</sup>易而難、後世唯見創業之難而守成之易、未<sup>知</sup>其易者、更有難於難者存焉也、古三代之聖人、能知易之難、是以守成之烈、昭于萬世、至治之澤、被于四表、蓋周公位冢宰、方天下既平之時、猶且吐哺握髮、以下天下之賢、誠知天下之理無窮、萬機之務無盡、而守成之難也、後世不能知之、則三代之治不可及、固無<sup>足</sup>怪也、漢惠帝之時、曹參為政、曰、高帝與蕭何定天下、法令既明具、陛下垂拱、參等守職、遵而勿失、不亦可乎、其言似矣、而考其行事、賓客見參不事、欲有言至者、參輒飲



以醇酒、醉而後去、終莫得開說、相舍後園近吏舍、吏日飲歌呼、參遊後園、聞吏醉歌呼、乃取酒張坐飲、大歌呼與相和、嗚呼、彼參者非特不能吐握下賢、杜絕人言、亂敗禮度、豈守職勿失之謂哉、且當惠帝之初、呂后驚悍、匈奴僭疆、內憂外患、萌動于其間、而創業之功臣為國家之重者、稍々薨逝罷免、豈一日暇逸哉、是誠不可不為之時也、況惠帝雖仁柔、觀其使密諫參、圖治之志可見矣、觀其及參免冠謝、曰善、容言之量可見矣、有君如此、則又可為之時也、然參也必謂、方今天子仁柔、呂后驚悍、匈奴僭疆、而創業之臣、稍々薨逝罷免、以區々之一身、任天下之事、非己才之所堪、是誠不可為之時也、且亂離初定、人心厭動而好靜、苟載其清淨、禍災固遠、度已不<sub>能</sub>及見、則又不必為之時也、是以因仍苟且、以度日耳、安在其為宗臣乎、嗟夫、世之君子、任天下之事者、無謂非己才之所堪、彌縫目前、使參憂國奉公、致身竭<sub>也</sub>力、舉天下之賢以圖治、守成之烈、至治之澤、豈無可稱道者哉、史稱、參曾召長老諸先生、問所以安集百姓、而言人々殊、既見蓋公、蓋公為言、治道貴清靜而民定、參於是治要用黃老術、由是觀之、參之所為、則其所學也、吾於是益信不由聖人之道無以為治也、

結末、議論甚高、  
(良齋評)

送中村士恭歸國序 (嘉永四年)

辛亥之春、吾公東觀、牛莊中村先生以侍講陪駕、其子士恭從焉、而余亦適東遊、隨儀衛之後、及至邸、則與先生比舍而居、得與士恭朝夕切磨、各視其所志、而士恭與天下豪傑交遊、以積成其志業、而自期焉、既而吾公先例歸國、先生將復陪駕而去、士恭欲然有憾、不得成其志業之色、微贈言余、余學淺而識劣、其論固不能振士恭、其說又不足張士恭、願辱切辭最切矣、如之何默而不言、初士恭之在國學、與一時茂異議論、蓋亦盛矣、而其志之所期、業進志壯或有不如<sub>也</sub>今者、吾安不<sub>也</sub>惜其歸、蓋人情溺于見聞、安于所常、其所與共學、無有<sub>也</sub>太可畏、所論說、無有<sub>也</sub>大出入、則自以為足、不<sub>也</sub>甚刻苦勵精、加之家累世故、居處衣食、妨其業、撓其志者、累々乎隨除隨興、是在國之常、而宴安之所致也、至在邸舍、事務簡而規制肅、無家累世故、凡為妨撓者、而其及出見天下豪傑、則每交<sub>也</sub>未相知之人、接<sub>也</sub>未嘗聞之論、不<sub>也</sub>得復不<sub>也</sub>刻苦勵精也、則士恭之在國、未如在邸之勝也、夫天下之勢、治則樂、々則怠、々則亂、々則憂且勤、而治從之、故隆者必替、而屈者復伸、物皆然、學何異此、以是言之、士恭之在國也、不免昇平宴安翳花消日之情、而在邸、則有保聚避寇乘間講武之態也、如何不<sub>也</sub>惜其歸哉、雖然、苟能志立矣、無不可為之事、而無不可為之地、願在其所期何如耳、吾觀士恭之所志、常以下鼓舞士風、維持世教、為己任焉、



則今之婦也、將復入學以成其志業、駸々俛々、勞而不沮、折而不撓、不復昔日在國、為宴安、移其心也、則亦何為惜其婦乎、但先生之婦、士恭不得留、余一朝失名師良友、誰共相切磋哉、則不復惜士恭之婦、而吾自惜焉也、遂書以應其徵、亦安知不士恭有省於此乎哉、

\*(井上與四郎)

復某父執一書 (嘉永四年)

月日、某再拜、復某父執座下、客月念三日、以本月仲五、達出家七旬、未嘗修一書以候起居、失敬於長者、而忽接來教、慚懼兼至、無知所謝、然其致失敬者、抑有由、敢具復座下來教及矩方之與業何如而碌々舊態無可言者、矩方竊謂、學問之業、譬猶畧定天下、自古英雄豪傑、畧定天下、筭先定矣、然後務力於攻戰之間、所謂先勝而後戰也、能使戰輒勝攻輒取、禍、四勝而弊者耳、何足尚哉、故夷吾之九合、決策于檻車之上、孔明之三分、定計于艸廬之中、范雎之策秦、越韓魏而攻者非計不如、遠交而近攻、秦親中國以為天下樞以威禁趙楚皆附齊必懼矣、齊附則韓魏固可虜也、遂以斃六國、是已蕭何之說漢、曰大王王漢中以養其民以致賢、人收用巴蜀之粟定秦天下可圖也、漢定帝業是已、是謂筭先定矣、今矩方來茲修業、聖經賢傳非不講、載籍戰策非不閱也、而踵名儒巨師之門、非不聽其緒論也、然未能斷然知斯

(小島權三郎)

業之規模綱領果安在、(著實下手果安在、而心目注視、屹々致々、舉全力而爲之、東奔西走、)筭之不定也、如此、則使盡愚劣之力、屹々致々以至三五歲之久、其所成就、塊然其小、固與今日無大庭徑耳、矩方之心、常不能自慊、臨翰茫然、閣筆者數、是致失敬之由也、雖然、漢高有云、惡能鬱々久居此乎、有志人之心事、每每如斯、雖以矩方之愚劣、未嘗無所期待也、今既辱教、則義不可復有所待而重加罪戾也、是以唐突裁書以復、書不盡意、區々之心、伏祈炳亮、時維向暑、為國自重、矩方頓首拜、

與小島某一書 (嘉永四年)

鄙稿錄呈

良齋安積先生帳下伏乞

(良齋批圖) ○叱正

吉田大次郎矩方再拜

(紙表)



（本文右側に野線を施せる字を抜いて行間書を補つて讀めば紙谷本なる）  
（第一行悉の字紙谷本はイキ）

（千言萬語紙谷本はイキ）

（自安の自の字紙屋本はイキ）

昨夜兄伯教書至、伏審悉尊大人平居素朴節儉、以治家、令賢兄及足下勤武藝而修行義、美事升聞、達君聽、當君心、乃紙谷本因特賜白金若干、僕聞之、乃同拚躍不能自止、非獨為貴家賀而已、又竊為國家賀、尚儉獎武、勸善之盛事也、方今昇平已久、士人之風、浮薄柔弱、率厭朴澁、華、賤武趨文、至于行義、措之度外而不顧、與足下諸兄友平生議論辨說、而扼腕切齒者、要千言萬語不過于此已、耳同但江河迸決、滔々奔流、勢非蘆灰之所能止、自非政教有恆、浸漬人心、則弊俗鞏固、不可輒變易也、雖然是、可獨責於司政教者而已哉、凡食此祿、居此土者、不可不自以為任也、同遇官尚之獎、之勸之、如斯其至之會哉、僕於是有所二言、亦唯平生之既所極論、足下之既所厭聽也、夫賢兄につゞく、紙谷本況國家之盛事、其可不思對揚哉、足下以為何如、夫賢兄與足下、耳同遵乃父之志、續乃父之事、固足以不令名、然豈可止于此、自安乎、亦當思變易弊俗也、苟思變易弊俗、不可無識也、不可不學也、學淵識定、可三以語交易矣、今欲言賀、縱言及此、亦唯平生之所極論反覆紬繹、自不三自知其煩也、道同而

矩方白、

（紙谷本には、別行に、「四月念一、小嶋權三郎君格右」とある、奈良縣紙谷重良氏藏 校合濟園）

楠公墓下作

（嘉永四年三月二十一日）

（東遊日記にあり、略す）

四月三日遇先考十七忌辰、拜哭之餘賦此

（同前）

（山田治心氣齋先生ニ贈ル書）

（嘉永四年）

頃、某氏ノ所ニ於テ、先生撰フ所ノ對策一條ヲ讀ム、立論堂々整々、正大確實、虛高世ヲ驚スノ論ヲ為サス、譬ハ、程不識、李光弼ノ軍ヲ治ムルカ如シ、就中、察三時勢立三大体ノ論、實ニ千古不磨ノ確言ト云ヘシ、東西索居、三百里外、此論ヲ看ルニ及テ、猶、帷ニ侍シ講ヲ聽クカ如シ、欣慰何ヲ以テ此ニ如シ、但、體勢ノ目ニ至テハ、論スル所ニ因テ、發明スル処ナクンハアラス、敢テ既ニ發明セバ吐露シテ教ヲ請スンバアラズ夫、政ヲナスノ目、三アリ、一曰、士氣ヲ振フ、三二曰、人才ヲ育ス、二三曰、君意ヲ宣フ、士風ヲ振フノ要ハ、文武ノ骨髓ヲ得ルニアリ、文ノ骨髓、高論中既ニ之ヲ尽セリ、武ノ骨髓ニ至テハ、或ハマサニ論スル所ヨリモ深キモノアラントス、何トナレハ、實用華法、固ニ論スヘキノ急ト雖也、武ヲ學フ所以ノ意、之ニ先ダ、スンハアルヘカラス、夫レ刀槍諸藝、皆自衛テ敵ヲ殺ス所以也、然則、其之ヲ學フノ意ヲ推ス時ハ、何特リ刀ト槍トヲ把リ、人ト角立スル時ノミナランヤ、醉酒蹠跚タルハ、武ヲ學フノ意ニ非ス、醜酒喧嘩スルハ、武ヲ學フノ意ニ非ス、威儀ノ正カラス、用具ノ佩サル、偃臥尸ノ如ク、言語節ヲ失フハ、武ヲ學フノ意ニ非ス、奉養ノ節ヲ失ヒ、安佚ノ度ニ過キ、身體健ナラズ、骸骨壯ナラズ、



皆以テ退<sup>オク</sup>レテ取ルニ足レバ、武ヲ學フノ意ニ非ス、甲冑朽敗、刀槍鏽蝕、鐵砲有テ彈藥ノ蓄ナク、弓弩有テ矢鏃ノ備ナキ、武ヲ學フノ意ニ非ス、祿以テ妾婢ヲ養フニ足テ、卒徒馬匹軍役ノ定メニ充ツルニ足ラス、財以テ茶器画軸醇酒佳肴諸ノ玩好飲食ノ物ヲ購フニ足テ、弓銃刀槍彈藥矢鏃應用ノ數ニ備フルニ足ラス、武ヲ學フノ意ニ非ス、凡ソ此等、類ヲ推シテ之ヲ觀ルニ、凡ソ自ラ衛リ敵ヲ殺スニ害アル者、皆武ヲ學フノ意ニ非ス、若人々ヲノ是ヲ知ルコトヲ得セシメハ、行住坐臥、必敬スル所アリ、起居飲食、必慎ム所アリ、用費節儉ニシテ、卒馬精銳、器械犀利ニモ至ルヘシ、修身齊國モ是ニ外ナラズ、是ヲ武ノ骨髓ト云、夫レ形ヲ以テ言ヘハ、人固ヨリ若壯老三段ノ働、分別ノ事、先師已ニ是ヲ論ス、刀槍刺擊ノ事、<sup>(不明)</sup>□□□□ニ至テハ、盛強者ト鋒ヲ爭ヒ難シ、然レトモ、其意ニ至テハ窮シテ益固、老イテ益壯、伏波ノ言ノ如シ、死シテ而後已ムコトアルノミ、何ゾ區々十五歳ヨリ五十歳ト期センヤ、骨髓既ニ得ハ、乃高論中ノ所謂文武二致ナキ者明ケシ、皆士氣ヲ振フニ期スルノミ、明對、利心ヲ絶ツコトヲ云テ是ニ及ハス、故ニ以テ質スコトヲナス、曰、文武ノ骨髓、如何ノ得ン、曰君意ヲ宣フルノミ、古ハ君臣ノ間甚遠カラス、君其骨髓ヲ得テ、親ラ臣下ニ率キ先チ、教ヘ導ク故ニ君師ノ名アリ、近ク是ヲ元龜天正諸名將ノ事蹟ニ觀テモ、亦見ルヘキモノ多シ、且聞、細川三齋公ノ如キ、既ニ武功ヲ以テ家ヲ起シ、乃好テ武器ノ實用ヲ精確講究シ、甲冑刀劍等、必親ラ製シ親ラ試ミ、以テ諸將士ニ教ユト、是ヲ以テ、今

ニ至テモ御家流ト稱シ、士人ノ子弟、齋公ノ法ヲ祖述シ、甲冑武器ヲ作ルモノ多シ、夫ノ藩風、太平ノ久シキヲ經テモ、武威卓然トシテ諸藩ニ超過スルハ、豈其遺沢ニ非ズヤ、後ノ人君、文武ノ事ニ於テ、宜シク此意ニ法ルヘシ、曰、太平ノ世ハ、自ラ禮文制度、戰國ノ時ト同シカラス、安ソ法ルコトヲ得ン、曰、然ラハ則、大臣ハ下情ヲ上ニ達シ、上意ヲ下ニ宣ルノ職ナリ、姑ク是ニ望ムニ之ヲ以テセン、曰、大臣ハ其体重シ、故ニ下官屬吏アリテ、其事ヲ分チ掌ラシム、何親ラ是ヲナサン、嗚呼、此言一タヒ出テ、國家ノ事去ナン、夫レ士ヲ造スハ、儒武師ノ職也、儒師ハ未タ其何如ヲ知ラズ、武師ニ至テハ、粗野無文、其教ヲ為ス、多ハ技藝ノ末ニ陷リ易シ、儒師ト雖<sup>下ニ宣布スルニ</sup>、亦悉ク文ノ骨髓ヲ得ンヤ否ヤ、計リカタシ、君意明々昭々、其心目ニ在ルニ非ズンバ、安ソ痼病ヲ治スルコトヲ得ンヤ、國家ノ大患、何レカ是ニ尙ヘン、且夫、戰國ノ時ニ方テハ、風俗質實、暫クモ不虞ヲ忘レズ、人心自カラ從ヒ易キノ幾アリ、然ルニ、古ノ名君賢將、率先教導、勞シテ倦マザルコト彼カ如シ、治平ノ久シキ、風俗輕薄、巧譎百端、而ノ衣食安飽ノ欲是ニ乘ス、最モ其功ヲ成シ難シ、是時ニ當テ、君相安ゾ威重勞冗ヲ惜願スヘケンヤ、固ヨリ將ニ率先教導ノ暇<sup>(アラ脱カ)</sup>サラントス、故曰、君意ヲ宣フルノミ、曰、士氣已ニ振作シ、君意已ニ宣布スレハ、能事畢ルカ、曰、未ナリ、人才不<sup>レ</sup>可<sup>レ</sup>不<sup>レ</sup>育、才トハ何ソ、英雄豪傑、俊異卓絶ノ才ニ、育トハ何ソ、獎誘激厲、任ズルニ重テ以テシ、期スルニ遠



ヲ以テシ、夫レヲシテ常ニ心カヲ窮竭シ、奔走事ニ從フノ及バサラシム、是之ヲ育スル所以ナリ、夫レ気ヲ振ヒ意ヲ宣フル、一モ人ヲ育スル所以ニ非ルハナキ時ハ、必シモ更ニ之ヲ言ハサル可キニ似タリ、然レトモ、此ニ注目セスンハ、氣振ヒ意宣フル、終ニ何ノ用ヲナサン、蓋、人各能アリ、不能アリ、物ノ齊カラサルハ、物ノ情也、坐臥眼ヲ書籍ニ曝ストモ、佐藤捨藏、安積祐助、人々造ルヘキニ非ス、早夜身ヲ刀槍ニ委ストモ、志賀小太郎、大石進士、人々能フヘキニ非ス、乃チ捨藏祐助ヲシテ志賀大石ト相代ラシムル、且能セス、況ヤ其他ヲヤ、人ヲ教ヘ政ヲナスモノ、能ク是ヲ知り、且千羊ノ皮実ニ一狐ノ腋ニ如カサルヲ審ニシ齊カラサル人チ一齊ナラシメントセズ、所謂才ナル者ヲ育スルコトヲ務ムヘシ、才既ニ育セハ、闔國必ズ從テ興起スルモノ多シ、故ニ、經術文章、刀槍銃砲ノ類、其才アル者ヲ撰ヒ、之ヲ育メ大成セシムルヨリ急ナルハ(ナシ脱カ)矩方、カッテ一ノ材武ノ士ト交ル、其人、年齒僅ニ弱冠ニ過ク、而シテ、藩人多ク其右ニ出ルモノナシ、因テ其志ス所ヲ叩クニ、一藩ノ秀タルヲ易カラスト云フ、特ニ天下ノ人ト衡ヲ争フノ志ナシ、是自カラ其人ノ資品ト雖モ、亦育スル所以尽サ、レバナリ、嘆スヘキノ甚シキニ、今ノ弊、闔國ノ人ヲ皆一齊ナラシメント欲スルニ在リ、而シテ、却テ其間、才ナル者特出スルヲ見ス、是レ事繁ニ効小ト云ヘシ、若才ヲ育セハ、事簡ニシテ効大ナラン、是ヲ前古ニ徵スルニ、光武アレハ必二十八將アリ、太宗アレハ必十八学士アリ、孔子アレハ必七十子アリ、亦何ソ疑

ン、明對中、所謂碌々ノ士ヲ教ユルハ英豪ノ士ヲ教フルニシカスト、是ヲ謂フ歟、夫レ既ニ時勢ヲ知り、大体ヲ立テハ、是ニ目亦小トセズ、所謂大体ナルモノ、亦是ニ由テ行ルレバ也、敢テ以テ質スコトヲナシ、叱正是祈、

與三土居幾之助一書 (嘉永四年)

僕読吳起書、至儒服以兵機見魏侯、未嘗不陋其識也、起蓋謂今之儒者、論常而遺變、兵家徒講進戰退守之術、而不能原諸禮義廉恥之教、皆知一而不知一、而已則合二者而有之、提三軍之衆、決(機)机於呼吸、固所長也、而曰修文德而圖國家、亦不失為儒矣、起也特見儒兵之分為二、而不察其原為一、徒知(機)其机、而不曉其道、吾是以知其為陋也、僕生神武之邦、長兜鍪之家、幼所習、長所學、兵道而已矣、是非世之迂儒拘(機)々章句一高談性命者之所與知也、凡生于兩間者人也、禽獸也、魚鼈也、其類万差、不可舉數、獨人也者、靈秀而聰明、就二類中一相區域、有中必有外、有華必有夷、修相愛相助之道、除相害相虐之災、害虐之災不除、愛助之道不暢、必也明君臣上下之義、弁賢邪忠奸之分、士精強而民富美、糧儲饒而器械利、溝塹足以保民、城壘足以衛地、其進也不可拒、其退也不可追、然後中立而外從、華盛而夷憐、災除而道暢、於是生民之能事尽、天下之大業畢矣、是謂兵道、



生斯邦、長斯家、所習所學、豈有他哉、人有恆言、曰、國治、天下平、以兵道論之、未為尽矣、漢文景、明主也、其為政、三代以下所多不見、家給人足、不為非治平、然及其待匈奴、則執敵國禮、尚憐焉、失其權心、是懼、以治平為期者、決不足使外從中、夷懾華也、而善兵道、則治平有不足言者矣、僕仕長藩、親視國事、有流涕大息不能已者、君德非有缺也、大臣非失體也、百官有司非忘職也、文武士業則修之、稼穡農務則勤之、不可謂無治平之實也、而尚流涕大息者、兵道之未全也、夫固不愛厚祿、以養多士者、備不虞之用而已、祖宗嘗收此輩、或以戰功、或以武藝、以膽氣、以力貌、無有二疴弱、無不堪其用者矣、今則否、一干戈騷擾之際、料才度能用之、舉一隊之士、材武無出其右者、而為之長、舉一陣之衆、膽畧無出其右者、而為之將、為探候、為差使、皆無非歷練軍務、要勝敗之數、利害之辨者、舉人命官、有才能之選、而無資格之拘、故祿大者能亦大、班高者才亦高、大臣百官無迂濶空疎尸素無用之人矣、今則否、一祖宗之創業也、英雄角逐、爭衡於中原、較力而斃之、鬪智而服之、身閱沐雨栴風之勞、嘗稼穡飢寒之艱、而無宮室衣服婦女玩好之陷溺其心、其於人情物態、洞悉弗遺矣、今則否、一古者朴素質實、無華奢之風、繕甲兵、峙糗糧、無器玩淫工之好、故于戈相尋、而國亦富實矣、今則否、一嗚呼、以是而進戰退守、雖孫吳復生、吾見其一敗塗地耳、長

之北海五十里、直與朝鮮對、夷舶憧々往來于其間、而吾武未足使彼指望而膽寒股栗、而况北襲滿鄂、西討暗弗、舳艫千里、突巢穴、收要害之望哉、則其於兵道亦何如乎、僕之見先生、不過一再、且學淺力微、如以廷擊鐘、未足發其洪鳴、然窃意議論卓異、非復尋常章句性命儒之流也、因學所習學以為質、至如吳起之陋、僕固不願也、若曰物換星遷、天地之常道、而太古之淳朴、不可復見于季叔、戰國之俗、豈可見於泰治之今日乎、僕默退而已、

此文章文章家に見せ候處文にて成不申由あれ共持論は自ら安する所故前書之御答に當て申候

吉田大二郎

治心氣齋先生侍曹

練兵說畧序 (嘉永四年)

古之善論時務者、必先察時勢、揆人情、而審先後緩急之所當、然、剴摯切實、不敢為高異可喜之論、是以其言行於當時、而後世亦奉以為圭臬矣、輒近策士務為高異之論、其言雖或可喜、而傳會穿鑿、不顧其可行與否、是皆不過發吾胸中之所蘊、而取快於文章言語之間耳、獨我素水山鹿先生、世以韜畧教人、其議論平易、通時勢而適人情、先後緩急、皆



得其宜、與三世之策士大不同矣、嘗著海備練兵數書、今又著練兵說略、其說皆親切著明、今人之欲言、而所未能言、比之古之善論時務者、不多讓焉、昔者范文正謂石徂徠剛正、天下所聞、然亦好異、使為諫官、必以難行之事、責人君以必行、方今主上無失德、朝廷政事亦自修舉、安用此諫官、嗚呼、世之策士、顧其可行與否而論之耳、亦何求高異之為哉、

嘉永辛亥十一月

長門 吉田矩方謹撰

○

宋 余玠

今世胃之彥、場屋之士、田里之豪、一或即戎、即指之為龜人、斥之為噲伍、願陛下視文武之士為一、勿令偏有所重、偏必至于激、文武交激、非國之福、集衆思、廣忠益、孔明所以興蜀也、

屯兵聚糧、為必守計、

趙范

人物必精、將校必勇、器械必利、教閱必熟、紀律必嚴、賞罰必公明、其心術念慮、必人々思親

其上而死其長、信能行比半年而可以強國、

趙葵方之子  
范之弟

從方時、每聞警報、輒與諸將偕出、遇敵則深入死戰、諸將惟恐失制置子、死救之、屢以此捷、

元 史天澤

兄弟之讐、雖死不避、況未必死耶、

相要害、立城堡、以絕其聲援、為必取之計

明 常遇春

人臣而以反名、寧可宥乎、臣誼不與之俱生、

遇春發一矢、噫其當先者、大呼而入、麾下壯士從之、遂尽殺其二十騎、敵遂大潰、

李文忠

患不力戰、何患不富貴、

練兵繕甲、訖不可屈、

文忠橫槊、引鉄騎數十、乘高馳下、直出賊陣、衝其中堅、縱橫搏擊、所向草靡、

沐英



鎮雲南也、簡官僚、剔奸蠹、撫農興學、墾田治水、軍食充足、教化大行、

傅友德

率萬人先登、一鼓而奪之、流矢中頰、鏃出腦後、復洞脇、不為沮、

王信

繕城隍、廣儲蓄、省徭役、立賞罰、選能官、禁窩戶、繕將才、慎守備、

慎專任以利民情、定倉庫以備兵荒、修兵衛以圖無患、禁刑罰以省財用、

王瓊

天下兵馬數多寡強弱、及塞隧夷險、補裨才否、

築墻阻敵、招商實邊、

王守仁

求通民情、願聞己過、

積脅從、復流亡、度地居民、開山通道、

山鹿先生傳

素行先生平高興、素行號、是明舜水朱子瑜以禮稱素行軒、依テ號トス、平ハ姓、一作ニ字子敬、奥州藤原尤可疑、高興ハ実名、又云義呂ト、花名甚五左衛門ト云ナリ、

(全文他紙)  
\*(ソは皆原本のまま、或はこの意か)

會津人也、其先兵藤次、秀任之裔、世々采食於筑前山鹿、其父為全身乱世、不勤產業、去

東客居於會津、越元和壬戌秋、八年八月庚辰、生先生、天性秀逸、志異人、明經通史、弱冠

能屬文、事皆一見誦憶、(腦カ)而無所不總、神道ハ學ト部忌部ノ奥、佛道モ黄蘗山、隱元和尙等ト論ス、意或ハ詩歌音曲ト、其所同學親昵、

難波雅宜・烏丸光廣・黑日直本・森賴直、皆為當時名譽之公侯、先生嘗讀國史曰、嗚呼、吾

朝者、開以往、神武天皇東征舊作王蠻夷、神功皇后西伐三韓、大震武於天下、天下之盛衰、武之興

廢是隨、故謂武、文在其中、是以無武、政教不立、政教不立、國不治、國不治、君子位

危、故武者、君子之柄也、事皆本武、武行政立、君子去武、惡乎成名、嗚呼、大哉武、傷哉武

教不二貫、豈可歎息乎、吾雖布衣、苟詳武教、而不可不布於後世也、於是曝眼於武

事、催心於武教、乃師仕北條氏長、後就氏長所師尾畑景憲、其學夙成、寶永壬午、十九先生

年已廿一、繼先哲之遺緒、述作兵書、雖然言之微妙、書不能文、心之精微、口不能言、故

錄其要者、而將使人嘿而知之、以之示於尾州儒官堀尙意、(正カ)擊節歎曰、此書吾儕小人非所

讀、是必王公坐右之書、乃題兵法神武雄備集、並序始末、於是先生大悅、尙意之言亦適其

意、開其書以教授、乃越侯定總・丹侯光重、先入門、大夫士庶人爭執費、志門者如歸市、

實大都人物之淵藪、而其道大行、且先生之著述二十有五部、皆如車輪鳥翼、不可缺矣、於是

紀公賀侯厚祿拯之、皆不應、實天下之英雄也、(承カ)康應壬辰、元年先生歲已壯、弟子朝夕成其



道、益盛、且其雄俊辨智、以是服人、於是恐有其後害、託罪以三所述聖教要錄而虜之、  
 癸巳秋、二年九月、播伯長直率婦赤穗、長直知非其罪也、深憐之、厚衣食之居、斯年有司、意、  
 甲午夏、三年五月、賜命復歸東都、則家居高山之麓、教授如始、長直就學之、恩遇甚厚、於是  
 赤穗之臣、行東帛者多、嗚呼盛哉、於先生之德、(華カ)牽如此、豈可不謂天性秀逸乎、(貞孝カ)眞京乙  
 丑冬癸未、二年九月死、年六十四、諡曰海月瑚光、葬三宗三禪山、(之カ)  
 先生無嗣、有弟曰高恆、橘馬、高恆嗣立、生三子、兄高基嗣、弟高光、伯父養為子、皆守  
 父祖之業、以軍術仕侯公、高基子不能勝其任、是以其家遂絕也、

(全文他集)

山本勘助晴幸大星目錄

大星トハ日輪ヲサシテ云也、天ニ日輪ヨリ大キナル星ハナシ、故ニ大星ト云リ、天命ヲ崇敬シ  
 用ル也、是兵家ノ要、人事ノ本也、サレハ常ニ天命ヲ慎ミ、今日ノ道理ニ不逆シテ、天  
 地ノ道ニ應ル也、兵法ノ祕術ナリ、凡戰者、不可向レ日、向日則者必敗、其寄也ハ、神武天  
 皇日向ノ國ニ起リ、大和ノ國ニシテ、(長崎カ)足長彥命ト戰、大ニ敗シ、兄ヲ始討死シ玉フ、軍ヲ備ノ  
 中州ニ返シテ曰、吾日ノ神ノ末ニ向レ日而戰フ、故ニ敗ス、吾德化ヲシイテ、日ヲ脊ニノ戰  
 ハ、勝ヲ疑ヒナシトノ玉ヒシニ、果ノ然リ、故ニ日天ニ不逆シテ、順ニ天德ヲ表トシ則

リテ、弓矢ヲ取テ云リ、假令勢ニ由テ、一時天下ニ横行スル、無道不義ニテ、天理ニ背キ邪ナ  
 ル弓矢ハ、天コレヲ助ケス、故ニ終ニ滅亡スル古今皆然リ、

一大星之大事、晝三時定、巳午未、夜三時定、亥子丑、

大星トハ前ニ云日輪ノ也、此大星ノ至極ハ、陽氣專ラ盛テ用ル也、晝三時定、巳午未ト  
 ハ、晝ハ日輪南ノ方ニ移リ、光赫々タリ、陽氣滿々タリ、此時分、敵ト一戰ヲ遂ル時ハ、巳午  
 未ノ方後ニノ戰フ、サスレハ、敵ハ自ラ日ニ向ヒサカフ故、眼ミヘス、日天ニ弓ヲ引故、自滅  
 ノ堪也、(基カ)我ハ天ノ形ニ則テ、陽ノ至極ニ居テ、逆亡ノ敵ヲ討故、勝利必我ニ定テアル也、夜ノ  
 三時定、亥子丑、夜ハ日ノ影北ノ方ニ有、此方ヲ後ニノ戰也、其理晝ノ如シ、陽尽テ陰ニ移  
 リ、陰極リテ陽生ル理有、此意ヲ以、晝夜ノ時ヲ考テ、陽ニ逆ハス背サルヤウニ、弓矢ヲ取ヘ  
 シ、

一北辰北斗傳、破軍尾返、注 北辰ハ北極星ノ也、北ノ方、帝座ニ位ノ不レ動、衆星拱レ之、  
 出沒順環ノ守護ヲナス、中ニモ、北斗ノ星ハ、晝夜時々天中ヲ運テ、四時ヲ建テ、五行ヲ均ス  
 ル星也、俗ニ云七曜星ノ也、此第七ノ星ヲ破軍星ト云、兵ヲ主トシ、陽ヲ含テ盛ル星也、此  
 操リ様、時四ツ去テ月數ト知ルヘシ、今辰ノ時ナレハ辰巳午未ト四ツカヅヘ、月ノ數トハ今月  
 六月ナレハ、申酉戌亥子丑ト六ツカヅヘ、則丑ノ方破軍星劍先向ク也、丑ハ方角ニ當テ見レハ



北東也、此ニ立テ南ニ向フ時、則劍先也、敵ヲノ此劍先ニ向ハセ、我破軍星ヲ後ニシ戰ヘシ、此劍先ノ向処、イカナル堅陣剛敵タリト、忽チ打破ル処ノ威徳アル星ナリ、破軍尾返トハ、右ノ通、常考ヘ用ト云ト、重前半後ト云テ、重ノ日ハ午ヨリ前、巳ノ一時、半ノ日ハ午ヨリ後、未ノ一時ハ、破軍ノ劍先跡ヘ振返リテアル也、是ヲ尾返ト云ニ、劍先我方向ヒテモ不レ苦、又重ハ陰ニ、晝ヨリ内陽也、然、陰陽和合ノ時ナレバ厭ハス、半後上ニ同、

北斗ノ圖畧ス、

一日之四季、圖アリ、隨影習、註 一日ノ中ニモ、春夏秋冬ト移リ行道理有、假令ハ寅卯ノ時ハ春也、辰巳ノ時ハ夏、午未ハ秋、申酉ハ冬ニ、其時々其支ノ方ヲ我後ニ當、敵ヲ此方ヘ引受テ戰ニ、日輪ハ其時々其支ノ方ニ移リ備リテ在ニ、是其時ノ陽氣也、此ヲ日ノ四季ト云ニ、隨影習ハ我影ノ移ル方ヘ向テ戰ニ、サスレハ敵ハ日ニ向ヒ、我ハ日ヲ脊ニノ順ニ、是ヲ隨影習ト云ニ、

右ニ謂処ハ事ノ大星ニノ慣ニ、形ノ正ニ、左ニ云処ハ理ノ大星ニノ、形ヲ離レ形ニイリ、神妙ノ処ニ、

一眞破軍傳、本地虛空藏、註 本地トハ天地ト云意ニ、天地ノ間ハ虛空ニノ大キナル藏ニ、森羅万像其中ニ充滿ノ應用ヲナス、マコトニ世界ハ無尽ニノ理非ヲ論スル時ハ尽ルヲナシ、チ、

マル処虛實ニ、時ニ我兵法正義ヲ守リ、万一モ欠不足ナル処アルトハ、調之、少モ不意虛ナク、治之道ニ叶如クスルトハ、我則日天タリ、北辰破軍タリ、力天地ヲ體ニノ弓矢ヲトリ、不道無義ニノ返逆ナル、欠不足ナル敵アル時ハ、即討レ之、以レ正討レ邪、何レニ向ヒテモ、勝利ヲ不レ得ト云フアラシヤ、是眞破軍ニ、

一眞大星傳、三気朝晝暮、

戰ノ勝負ハ全ク気ニアリ、気ニ三気アリ、朝ノ氣ハ銳ニ、晝ノ氣ハ惰リ、暮ノ氣ハ歸ルト、朝気ハ陽気盛ニ、故ニ銳ク、晝ニ至ハ日モ升リ詰、ソロソロ西ヘ傾ク故、晝ノ氣ハ惰ル也、暮ニ至ハ陽氣尽、日運ヒモ地下ヘ赴ク故、暮ノ氣ハ歸ルト云也、人モ又其如ク、夜中トクト休シ、心気ヲ養フ故、朝ノ氣ハ銳ク盛也、晝ニ至リテハ、ソロソロ惰リ退屈ス気ニ成、暮ニ成レハ、家ニ歸リテ休息シタキ気ニ成也、サイヘハ、彼我共ニ對様ニ何ノ勝負有ンヤ、是實ニ朝晝暮ナランヤ、朝晝暮ニモ又三気アリ、物ノ始中終皆此心ニ、此處ヲ知り會得シテ、常ニ欠不足ナキ如調ヘ、気ヲ養ヒ、イツモ朝氣ノ如クイタシ、敵ノ氣盛ニ實ナル処ヲ避テ、惰リタル虛ノ場ヲウツクハ、何ノ手モナク勝利ヲ得ルナリ、チ、マル処、來銳ヲ避ケ惰氣ヲ討、此眞大星ニ、ナンソ形ノミニカカワランヤ、雖レ然、形ヲ捨テ其業ヲ尽ス時ハ、空理ニノ惰氣ニ、何ソ其妙用ニ至ンヤ、心ヲ染テ能々修行工夫アルヘシ、



城築繩張武功祕傳ノ一

是全書不レ殘口投相濟上ニテ傳ル<sup>一</sup>、狼ニヨムヘカラス、

一界目ノ城、敵ノ責ルニハ攻ニク、自然敵ニ攻トラレタル井、トリ返スニ、手間ヲトラザル<sup>一</sup>、

城ノ大手ノ小口ヲ、我根城ノ方ノ道ヘ向テトル、尤守成ヲ專ラトスル城ナレハ、小口数ヲスクナクトル<sup>一</sup>勿論、然井ハ敵ヲ攻ル井、根城ヨリ援兵ニ後ヨリ討レン<sup>一</sup>ヲ思フ故ニ攻ニクキ、万一敵ニ攻トラル、井ハ、用水井戸ヘ不淨毒藥ヲ入テ去、サレハ敵水ニ渴ノ城ニ得堪ヌ、其時殘兵ヲ集メ或ハ根城ヨリノ援兵ヲ以攻ル、水ニ渴シ勞レタル敵ナレハ、即時取返サル、モノ、尤我用水ヲハ石フタヲ、トメカクメ、祕水ヲ致シ置ヘシ、

一小勢コモル城ニ、大軍コモルニモ、セマカラス、大軍コモリタル城ニ、小勢コモリテモ廣カラヌ取ヤウノ<sup>一</sup>、

是至極ノ心エ、大クハマセ、小クハヘケト云リ、繩ヲカクル<sup>一</sup>、蓮花ノ如クスヘシ、郭ヲ小ツメニ小口ヲシマリヨク取り、人數多ケレハ、郭ヲ幾ツモカケツヘ、小勢ナレハ、郭ヲ一ツ、スツル、

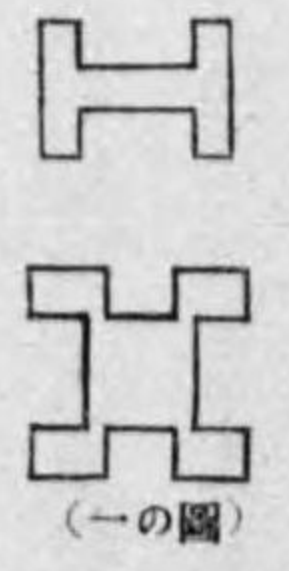
一チキリノ曲尺ノ<sup>一</sup>、

是本城ヲ取曲尺、タトヘハ、チキリヲハリテ置ト、ホトヨク折アリテ、陰陽ノ繩カケヨクノ、ヨキ本城也、此心得ニ取ヘシ、

一万字ノ曲尺之事、注是虎口ヲ取曲尺、此道理ニ虎口ヲ取ハ、敵ヲ我左ニ受ケ、勝手ヨク順、此心得ニ取ヘシ、

一重々ノ曲尺之事、注是惣テ繩ヲカク曲尺、タトヘハ、番匠、曲尺ヲ只様重タル如ニ、繩ヲカクル井ハ、四方ノ折ホトヨクテ、横矢ヨクキケル也、

一本有ノ曲尺ノ事、注是城取上手ノ所作ヲ(以下闕文)



(一の圖)



(二の圖)



(三の圖)

(圖の一は原本この條の文末にある)

(圖の二は原本にはこの條\*印のミところにある)

(圖の三は、原本この條の文末にある)

戰國策

戊申八月念五於<sup>二</sup>治心氣齋<sup>一</sup>會讀始ル

卷一西周

犀武敗<sup>二</sup>於伊闕<sup>一</sup>、周君之<sup>レ</sup>魏求救、魏王昭以<sup>二</sup>上黨之急<sup>一</sup>辭之、周君反、見<sup>二</sup>梁圉<sup>一</sup>、而樂<sup>レ</sup>之也、按、犀武魏將、時為<sup>二</sup>秦將白起所<sup>レ</sup>敗、格外評云、李元齡曰、忘<sup>二</sup>戰守之危<sup>一</sup>、而從<sup>二</sup>遊觀之樂<sup>一</sup>、足<sup>レ</sup>可<sup>レ</sup>為<sup>レ</sup>戒、何孟春曰、于<sup>レ</sup>時、周之罷<sup>二</sup>於奔<sup>一</sup>亦亟矣、而不<sup>二</sup>社稷之憂<sup>一</sup>、而梁園是樂、甚矣周之樂



宮他謂周君曰、宛恃秦而輕晉、秦饑而宛亡、鄭恃魏而輕韓、魏攻秦而鄭亡、二國、楚滅之、蓋恃齊也。齊、陳蔡亡於楚、皆恃援國而輕近敵也、今君恃韓魏而輕秦、國恐傷矣、二國蓋即恃楚不備之也。

秦攻宜陽、周君謂周累曰、子以為何如、對曰、宜陽必拔也、君曰、宜陽城方八里、材士十萬、粟支數年、公仲之軍二十萬、楚將景季以楚之衆、臨山而救之、秦必無功、對曰云々、

韜畧全書 己酉四月八日始

趙括之徒讀父書、房瑄之傲古車戰、○霍去病有氣敢往、上嘗欲教之孫吳兵法、對曰、願方畧何如耳、不至學古兵法、○宗沢大奇岳飛曰、汝勇智才藝、古良將不能過、然好山野戰、非方全計、因授以陣圖、飛曰、陣而後戰、兵法之常、運用之妙、存于一心、○李光弼曰、有險可以勝、可以敗、陣於原、斯殲矣、不如阻險、僕固懷恩不從、賊據高原、以長戰、七百壯士執刀隨之、委物偽遁、懷恩軍爭剽獲、伏兵發、官軍大潰、懷州復陷、○侂得侂失、侂晉詭、重累也、○陸敬輿所謂六敵、措置乖方、課責虧度、財置于兵衆、力分于將多、怨生于不均、机失于遙制、○杜公甫所謂五過、一曰不蒐練之過、不責失之過、不議賞

(唐曰、陛下雖得願、怒、唐曰、今魏尚云云、上說故魏尚云、綱鑑)

之過、不慎罰之過、不專任之過、○隆禮優貌、作敵懷之氣、寬租加餼、裕養士之資、破其拘擊、以得不羈之才、寬其文網、以收使過之效、此常談也、亦實用也、○馮唐對曰、文帝李齊不如廉頗李牧為將也、文帝上拊髀曰、吾獨不得廉頗李牧為將、吾豈憂匈奴哉、○晉楚遇于鄆陵、范文子不欲戰、曰、惟聖人能內外無患、自非聖人、外寧必有內憂、蓋積楚以為外懼乎、○秦使白起攻趙邯鄲、起曰、邯鄲實未易攻也、今秦雖破長平軍、而秦卒死者過半、国内空虛、遠絕山河而爭人國都、趙應其內、諸侯攻其外、破秦必矣、不可、○古兵與民合、故強、今兵與民分、故弱、○澤潞李抱真為澤潞觀察留後、乃籍戶三十一擇獨其能租給司矢、令閑日得曹偶習射、歲終大校、親按籍、第能否賞責、比三年、皆為精兵、○給牛種、無下以小二時耕耨、無下以二工親勸課、無下石磧之視而董禁令、無下遊學之聚而舒歲月、無下且夕責、○兵弊、影射、冒代頑穉、侂靡、飾靡文、○劉裕抗表伐燕、率舟師自淮入泗、裕曰、燕軍貪婪、不知遠計、謂我孤軍遠入、不能持久、不過進扼臨胸、退守廣固、必不能守險清野、及戰於臨胸、果大勝、慕容超遁跡廣固、乘勝逐北、超與數十騎、踰墻突圍出志、追復之、○兩燕之地勢、隅局也、守在一方、攻在中央、競々自完、猶慮侵軼而引敵使入、是以避着為先着者也、○莽着、浪着、避着、退着、劫着、連着、跨着、讓着、實着、忙着、○呂氏曰、宋之立國、以至誠待夷狄、未為不是、而乃侮于遠、肉于金、亡于元、



而受禍為最酷、○要着、先着、險着、危着、虛着、○又不然而講攻心伐謀之策者虛着也、我且不能踐倭虜之庭、而安能以直入其腹心也、○張良借箸而籌、馬援聚米而画、○饒々畏懼良、○李牧、趙北邊良將、嘗居代雁門、備匈奴、市租皆輸入幕府、饜士、習騎射、謹烽火、多間諜、○關外無將、々無兵、々無食、奚所恃緩急乎、○王莽時、匈奴寇邊、募天下力勇、及死罪囚徒、無名氏曰、稀突狼奔、○我所以歲輸金繒百萬以養之者、恰之耶、恤之耶、蓋以戰力之不給、假此以預杜也、○九邊、遼東、薊北、宣府、大同、甘肅、雲中、榆林、固原、寧夏也、明都北京、設九邊以防禦、○虢音暴、虐也、猛也、強侵也、○宋襄不鼓不列、陳餘、儒者成安君不用李左車之計、而敗於泜水、○蘇軾曰、兵有三弊、漢兵雖不知農、而無聚食之弊、唐兵雖聚、而無無事而食之弊、宋兵則有漢唐之患、而無漢唐之利、蓋兼受其弊也、○文學非洋宮之青衿子不得與、如東濕薪然、武舉則不論世類、不問地望、凡各邑人等、堪應武舉者、皆從巡按、考中、送兵部會試、

衛霍之英勇、以不文擢也、○衛青起於奴虜、霍去病、皆未嘗學者也、○不下以小疵累大才、則人才可以全收、○亡國之虜、韓信破趙、募生得李左車、解縛而師事之、卒用其策破燕、○練土著而簡閩勤、清占役而影射禁、足兵計也、廣屯田而脫力倉廩充、時給散而股刑戒、足食計也、精間諜、謹斥候、利器械、明賞罰、

○ 邾以恨魯僖公取須句、出師伐魯、公卑邾、不設備而禦之、臧文仲曰、國雖小、不可易也、無備、雖衆不可恃也、蠶蠶有毒、而况國乎、弗聽、戰于升陘、我師敗績、二年穰苴召軍正、問曰、軍法、期而後至者、云何、對曰、當斬、吳闔廬以員為吳行人、以謀楚、員既破楚軍於豫章、後悉興師、與唐舉伐楚、敗囊瓦于柏舉、楚兵出則歸、楚兵歸則出、五戰及郢、楚昭王奔隨、吳遂入郢、漢剖符封功臣、鄒侯蕭何食邑獨多、功臣不服、帝曰、諸將知獵乎、今諸君徒能得志獸耳、功狗也、至如何、發縱指示、功人也、群臣莫敢言、匈奴冒頓方強、為書遺高后、辭極褻嫚、高后大怒、議斬其使、出兵擊之、樊噲曰、臣願得十萬衆、橫行匈奴中、季布曰、噲可斬也、且夷狄譬如禽獸、得其善言不足喜、惡言不足怒、高后曰、善、報書深自謙遜、冒頓復使來謝、賜之盛服車乘、以壞其目、賜之盛食珍味、以壞其口、賜之音樂婦人、以壞其耳、賜之高堂邃宇倉庫奴婢、以壞其腹、於來降者、上召幸之、親酌飲食之、以壞其心、此五餌也、賈還謂霍光、願往刺之、以威示諸國、羊祜陸抗杜預身不跨馬、射不穿札、崔浩織屣懦弱、手不能彎弓持矛、許書手而段琛離間、



賀若弼請緣江防人交代、必集歷陽、於是大別、旗幟、營幕被野、陳人謂大軍至、悉發國中士馬、既知防人交代、其衆復散、後以為常、不復設備、及此弼以三軍濟江、陳人不覺、襲南徐州拔之、

一

辛卯春、通信使黃允吉、金誠一等、回自日本、允吉還泊釜山、馳啓情形、以為必有兵禍、既復命、上引見而問之、允吉對如前、誠一曰、臣不見其有是、(原典は播磨)因言允吉動搖人心、非宜、余問誠一曰、君言與黃使不同、萬一有兵、將奈何、曰、吾亦豈能必倭終不動、但黃言太重、中外驚惑、故解之耳、

朝廷憂倭、金暉為慶尙監司、李沈為全羅監司、尹先覺為忠清監司、令備器械、修城池、慶尙道築城尤多、或新築、或增修、時昇平既久、民以勞役為憚、怨聲載路、(鮮本兩南)然西南所築、皆不得形勢、且以濶大容衆為務、至於軍政之本、擇將之要、組練之方、百不一舉、以至於敗、

上命備邊司各薦才堪將帥者、余舉舜臣、遂自井邑超拜水使、時在朝武將中、唯申砬、李鎰、最有名、慶尙右兵使曹大坤年老無勇、余啓、請以鎰代大坤、兵曹判書洪汝諄曰、

(原典は悉達錄卷一)

(我文祿元年)

(原典の處々の文句を省いて要處のみを抄録したのである。欠字の處が即その省かれた處である。)

(鮮本は朝鮮本のこと、兩南は慶尙全羅である。)

名將當在京都、鎰不可遣、余再啓曰、凡事貴預、況治兵禦敵、尤不可猝弁、一朝有變、鎰終不得不遣、等遣之、寧早往一日、使預備待變、庶或有益、不然、倉卒之際、以容將馳下、既不諳本道形勢、又不識軍士勇怯、此兵家所忌、必有後悔、不答、壬辰春、分遣申砬、李鎰巡視邊備、鎰往忠清全羅、砬往京畿黃海、皆閱月而還、所點者司矢刀槍而已、既復命、四月一日、砬來見余、余問、公料今日賊勢難易如何、砬甚輕之、以為不足憂、余曰、國家昇平久、士卒怯弱、果然有急、極難支吾、意數年後、人頗習兵、或還收拾未可知、其初則吾甚憂之、砬都不省悟而去、四月十二日、先是釜山浦首領倭、常在數十餘人、稍稍入婦、一館幾空、人恠之、是日倭船自對馬蔽海而來、釜山僉使鄭撥出獵、狼狽入城、不移時、城陷、左水使朴泓見賊勢大、不敢出兵、弃城而逃、(鮮本而ナシ)密陽府使朴晉、馳還密陽、縱火焚軍器倉庫、弃城入山、李珩奔還兵營、先出其妾、乘曉亦脫身遁去、衆軍大潰、金暉初在晉州、聞變馳向東萊、至中路、聞賊兵已近、不能前、還走右道、不知所為、但檄列邑、諭民避賊、由是道內皆空、愈不可為矣、

釜山陷報又至、時釜山受圍、人不能通、泓狀啓、但云、登高以望、赤旗滿城中、以此知城陷、李鎰欲率京中精兵二百名去、取兵曹選兵案視之、皆閭閻市井白徒、胥吏儒生居半、



臨時点閱、儒生具冠服、持三試卷、吏戴平頂巾、自懇求免者、充滿於庭、無三可遣者、鑑受命三日不發、不得已、令鑑先行、使別將俞沃隨後領去、鑑苗尙州、一日發倉開糶、誘出散民、從山谷中介々而來、又數百余人、倉卒編伍為軍、無一堪戰者、時賊已至善山、暮有開寧縣人來報賊近、鑑以為惑衆、將斬之、其人呼曰、願姑囚我、明早賊未至、死未晚也、是夜、賊兵屯長川、距尙州二十里、而鑑軍無三斥候、故賊來不知、翌朝鑑猶為無賊、出開寧人於獄、斬以徇衆、因率所得民軍、合京來將士僅八九百、習陣于州北川辺、依山為陣、々中立大將旗、鑑立馬大旗下、有頃、賊大至、以鳥銃十餘衝之、中者即斃、軍大亂、鑑棄馬脫衣服、披髮赤体而走、內間有去邪之意、宗親聚閣門外、痛哭請勿棄城、領府事金貴榮尤憤々、與諸大臣入對、請固守京城、且曰、倡議棄城者、乃小人也、上教曰、宗社在此、予將何適、衆遂退、然事不可為矣、

\* (鮮本には賊入尙州)

後聞賊出尙州、猶以過險為憚、聞慶縣南十里有古城、曰姑母、扼左右道交會処、兩峽如束、中盤大川、路出其下、賊恐有守兵、使人再三覘覷、知無兵、乃歌舞而過云、其後天將李提督如松追賊過鳥嶺、歎曰、有險如此、而不知守、申總兵可謂無謀矣、蓋礮雖輕銳得時名、籌略非其所長、

過惠陰嶺、雨如注、宮人騎弱馬、以物蒙面、号哭而行、過馬山駅、有人在田間望之、痛哭曰、國家棄我去、我輩何恃而生也、

江原道助防將元豪初、守驪州北岸、與賊相持、賊不能渡者數日、既而江原道巡察使柳永吉檄召元豪、歸本道、賊毀閭里民家及官舍、取屋材、聯為長筏以渡、中流為水所漂、死者甚多、而豪既去、江上無一守者、故累日畢渡、

\* (之以下六字は鮮本には無い、原文の意を纏めて作った句である)

全羅道巡察使李沈、忠清道巡察使尹國馨、慶尙道巡察使金辟之軍潰於龍仁、時巡察皆文人、不閑兵務、軍數雖多、而号令不一、韓應寅金命元之師潰于臨津、軍士奔至江岸、不得渡、從岩石上自投入江、如風中亂葉、其未及投江者、賊從後奮長刀斫之、皆匍匐受刃、無敢拒者、南北道郡縣皆沒于賊、有倭學通事成廷虎者、在京城、為清正所得、同隨清正入北道、柳永立拘賊中數月、賊以為文官、防禁少懈、乘間脫走還行在、

命左相尹斗壽、率都元帥金命元、巡察使李元翼等、守平壤、數日前、城中人聞車駕欲出避、各自逃散、閭里幾空、世子及上集父老、諭以堅守之意、遂各分出、招呼入城、々中皆滿、及賊見形於大同江辺、宰臣盧稷等奉廟社位版、並護官人、先出、於是城中吏民作

\* (以下四字鮮本には上命世子とある)



亂、挺刃橫路、縱擊之、墜廟社主路中、指從行宰臣、大罵曰、汝等平日偷食國祿、今乃誤國欺民、乃尔耶、余自練光亭赴行宮、路上見婦女幼稚、皆怒髮上指、相與号呼曰、既欲棄城、何故給我輩入城、獨使魚肉於賊手耶、至宮門、亂民塞街、皆袒臂持兵仗、遇人輒擊、紛囂雜沓、不可禁、諸宰在門內朝堂者、皆失色、

留守平壤、城中士卒民夫合三四千、分配城堞、而部伍不明、城上人或疎或密、或人上有人、肩背相磨、或連數堞無一人、

沈岱、是年秋、代權徵為京畿監司、從行朝赴任所、路出安州、見余、語國難慨然、觀其意直欲親犯矢石以角賊、余戒之曰、古人不云乎、耕當問奴、君書生臨陣、

終非所能、其處有楊州牧使高彥伯者、君但收拾軍兵、使彥伯將之、可有功、慎勿自將也、「不從、遂為賊所變」 死於朔寧、

(唯々以下及び行間文字皆原本の意を酌みて書きたるもの)

三

獲賊諜金順良、余令拷掠而嚴鞫之、乃吐實曰、小人為賊間、余問為間者獨汝乎、更有幾人、對曰、凡四十餘輩、每散出順安江西諸陣、以至肅川・安州・義州、無不貫穿行走、隨事輒報、余大駭、即狀啓、又按名急通諸陣捕之、或得或逸、斬順良於城外、不久天兵至、而賊不知、蓋其類駭散故耳、茲亦事机之偶然者、莫非天也、

(卷二) 我文統二年

癸巳、賊擄京城已二年、鋒鏑所被、千里蕭然、百姓不得耕種、餓死殆尽、城中余民間余在東坡、扶擔擔負而至者、不計其數、查總兵於馬山路中、見小兒匍匐飲死母乳、哀而收之、育於軍中、謂余曰、倭賊未退、而人民如此、將奈何、時大兵將再至、糧船之自南方來者、皆列泊不敢他用、適全羅道召募官安敏學募得皮穀千石、船運而至、余即狀啓、請以此賑救飢民、以前郡守南宮悌為監賑官、取松葉為屑、每松屑十分、合米屑一合、投水以飲之、人多穀少、所活無幾、唐將亦哀之、自分所食軍糧三十石賑給、百不及一、又日夜大雨、飢民在余左右、哀吟呻楚、不可忍聞、朝起視之、狼籍而死者甚多、大抵自京都至南辺、賊兵橫貫、時方四月、人民皆登山入谷、無一種麥之處、使賊更數月不退、則生類盡矣、

\*鮮本は百不能及一(ある)



未焚稿

利

賜題探得送三人登富山一序上謹撰

(嘉永四年六月十一日)

有志之士、有所觀則必有所感、故觀水則有所感於水、觀山則有所感於山、而所觀小、所感亦小、所觀大、所感亦大、孔子嘗登東山而小魯、及其登泰山也、小天下、是亦可以見所感之大小矣、友人有所欲登富山者、過余問所以觀、余諗之曰、觀物之感、各於其所志、吾子之志未可知、則余固不得一言乎其間也、無已則以余大所感與、余平生讀聖賢之書、想其德業風采、志之所存在此、故感之所發亦在此、余今春遊東武、過白須賀之野、初望蓮岳于雲間、既而數日陰翳、不得再見、及渡大猪川、天日晴朗、三峰戴白者、巍然當前、過富士川、宿吉原驛、則與山咫尺、而零雨冥濛、遂不得窺其全容、而來東武也復見之、余於是有大所感也、先嘗往來田野、登高山峻嶺、輒有小所感、謂山嶺之高峻者、猶賢人君子之歟、其仰之也、人不以為甚高、及從之也、愈攀而愈不可極、

其近也、不甚顯于衆峯之間、及其稍遠也、衆峯群列、獨卓立乎其間、夫賢人君子、其道德事業、人視之不為甚難及、其威儀風采、常以為無大過于人、而其修己處事也、其萬一不可企焉、則知其甚難及、經數十百歲不可多見、則知其大過人、是不甚相類者乎、是余之小所感也、至觀富山、余所感寧止于此哉、蓋其隱顯出沒、變化不測、方可見也、雖遠而可望、不可見也、雖近不可窺、繪畫不足以盡其真、文辭不足以贊其妙、蓋其狀形有不可得而捉摸者也、而三峯巍々然者、終始如一、山固非故為隱顯出沒而自變其本體也、因求諸人、其聖神之儔乎、孟子有言、大而化之之謂聖、々而不可知之謂神、蓋德極其大、則聖而不可知、山之隱顯出沒、變化不測、亦豈有意而為乎、願極其大、而然耳、是余之大所感也、然余嚮繞其麓、而未登其巔也、吾子往矣、吾子足踵其巔、則其感之大、豈余之比哉、余願與聞焉、。余寓江戸藩邸、加以學事無暇、不能縱山水之觀、聞吾子之壯遊、徒神飛意馳而已、幸得一聞其大所感、亦足自慰、所願聞也、

辛亥夏於江戸邸上聽

(武教全書十八箇條 例解)

山本道鬼 自序 三河人、眇目痿躄、嘗學兵於尾形某、以于今川氏、駿河旧臣皆侮易之、



義元不<sub>レ</sub>奇也、勘助寄食數年、板垣信形聞<sub>二</sub>其名、薦<sub>二</sub>之武田晴信、々々與見與語、大悅<sub>レ</sub>之、即日與<sub>二</sub>三百貫邑、賜<sub>二</sub>名晴行、天文六年、以下攻<sub>二</sub>戶石城、功<sub>一</sub>、食<sub>二</sub>八百貫邑、乃往<sub>二</sub>駿河、謝、則嗤笑者交<sub>レ</sub>口称誉、義元悔<sub>レ</sub>之、弘治二年、死<sub>二</sub>河中島役<sub>一</sub>焉、日本外史 卷十武田

(以下一書きは武  
教全書の本文であ  
る)

一争地

兵法曰、我得則利、彼得則亦利者、為<sub>二</sub>争地<sub>一</sub>、イラコロ言ハ、其地勝地ニシテ、防戦ニ利有所<sub>二</sub>云、敵味方相争之地也、地形(武教全書)

天正十年三月、筑前守秀吉將<sub>二</sub>衆四万<sub>一</sub>至<sub>二</sub>尼崎、十二日、秀吉軍<sub>二</sub>山崎<sub>一</sub>、山崎城光秀度、分<sub>レ</sub>兵上<sub>二</sub>天  
王山、臨<sub>レ</sub>陣叢射、不<sub>レ</sub>足<sub>レ</sub>敗耳、十三日昧爽、令<sub>二</sub>偏將率<sub>二</sub>步騎七百弓銃手三百<sub>一</sub>往<sub>二</sub>、秀吉謂<sub>二</sub>堀  
秀政。堀尾吉晴曰、賊脱據<sub>二</sub>天王山、非<sub>二</sub>我利<sub>一</sub>也、二子其往、吉晴為<sub>レ</sub>人勇決、令<sub>二</sub>其部下<sub>一</sub>曰、  
皆疾馳、乃揚<sub>レ</sub>策而前、騎能屬者十五、弓銃手二十、至<sub>二</sub>山腹<sub>一</sub>則賊既先、吉晴從<sub>レ</sub>後蹙<sub>レ</sub>之、弓  
銃無<sub>レ</sub>虛發、賊弓銃在<sub>レ</sub>前、不<sub>レ</sub>能<sub>レ</sub>拒、後騎與<sub>二</sub>秀政軍<sub>一</sub>亦皆至、從<sub>レ</sub>擊殲<sub>レ</sub>之、國史略

一陣中へ商賣人ヲ不<sub>レ</sub>入事、營法

百代後圓融

應安五年、菊地武教帥<sub>レ</sub>師、與<sub>二</sub>探題今川伊豫守貞世<sub>一</sub>阻<sub>二</sub>筑後川<sub>一</sub>相對、武教固<sub>レ</sub>營張<sub>レ</sub>陣、不  
<sub>レ</sub>挑<sub>二</sub>相戰<sub>一</sub>、先使<sub>二</sub>豪士百餘人為<sub>二</sub>商人<sub>一</sub>入<sub>二</sub>置貞世之陣<sub>一</sub>、貞世之兵為<sub>二</sub>実商人<sub>一</sub>、不<sub>レ</sub>疑、武教窺<sub>二</sub>計  
時気、勵<sub>レ</sub>兵渡<sub>レ</sub>川而戰、貞世之兵空<sub>レ</sub>營進應<sub>レ</sub>之、時所<sub>レ</sub>間之豪士放<sub>二</sub>火於敵營<sub>一</sub>、均<sub>レ</sub>発踵<sub>二</sub>貞世之

後、烟焰驟<sub>二</sub>變東西、雷鼓羣箭、乱<sub>レ</sub>發前後、京兵大駭<sub>一</sub>、サウイテ蹂躪遁走、本朝通紀

一船入近ク、物ノ運送自由ナルヲ見立ル事、城築

永祿十一年、今川與<sub>二</sub>北條<sub>一</sub>合<sub>レ</sub>謀、禁<sub>二</sub>商賈<sub>一</sub>、絶<sub>二</sub>甲斐鹽漕<sub>一</sub>、甲人大窘、以<sub>二</sub>武田氏之所<sub>一</sub>統皆山

岡、仰<sub>二</sub>鹽于駿相<sub>一</sub>也、國史畧

一山川海陸ノ考ノ一、城築

秀吉相<sub>二</sub>地形<sub>一</sub>謂、洛邑山勢逼塞、困<sub>二</sub>於運輸<sub>一</sub>、且無<sub>二</sub>地可<sub>レ</sub>列<sub>二</sub>邸第<sub>一</sub>、不<sub>レ</sub>足<sub>二</sub>以待<sub>二</sub>庶邦會同<sub>一</sub>、莫  
<sub>レ</sub>若<sub>二</sub>大坂宏敞、襟<sub>二</sub>帶河海<sub>一</sub>、四通五達之便、天正十一年十一月、大城<sub>二</sub>大坂<sub>一</sub>、國史略

一亂取堅禁制ノ事、客戰

延德三年四月、伊勢長氏勒<sub>二</sub>七隊<sub>一</sub>、并<sub>二</sub>今川氏援兵九五百人<sub>一</sub>、夜濟<sub>二</sub>黃瀬川<sub>一</sub>、且抵<sub>二</sub>堀越氏<sub>一</sub>、縱  
<sub>レ</sub>火攻<sub>レ</sub>之、賊走自<sub>二</sub>殺于成就院<sub>一</sub>、伊豆人民畏<sub>二</sub>其兵威<sub>一</sub>、負擔奔竄、長氏号令嚴明、秋毫不<sub>レ</sub>犯、  
榜<sub>二</sub>于路<sub>一</sub>曰、吾所<sub>二</sub>以來<sub>一</sub>者誅<sub>二</sub>賊子<sub>一</sub>而已、非<sub>レ</sub>有<sub>レ</sub>所<sub>二</sub>暴掠<sub>一</sub>、其各乃安堵以<sub>二</sub>俟<sub>二</sub>我令<sub>一</sub>、敢逃者、蹈<sub>二</sub>  
其椽<sub>一</sub>、火<sub>二</sub>其家<sub>一</sub>、民吏相告言、多<sub>二</sub>來婦者<sub>一</sub>、賊子茶々、茶々聚<sub>二</sub>其黨<sub>一</sub>、弑<sub>二</sub>政<sub>一</sub>、○日本外史九  
知<sub>二</sub>而自立<sub>一</sub>、茶々政知長子也、後北條氏

一軍評定之事、付善ト見テソシル事、(客戰)

天正三年五月朔、武田勝頼大舉出<sub>二</sub>參河<sub>一</sub>、圍<sub>二</sub>長筱城<sub>一</sub>、德川氏復使<sub>二</sub>使請<sub>二</sub>援信長<sub>一</sub>、信忠以<sub>二</sub>騎卒  
五萬<sub>一</sub>赴<sub>レ</sub>之、勝頼自分<sub>レ</sub>兵備<sub>レ</sub>城、築<sub>二</sub>壘于鷲巢山<sub>一</sub>、苗<sub>二</sub>一將<sub>一</sub>守<sub>レ</sub>之、而自進<sub>二</sub>二十餘町<sub>一</sub>、濟<sub>二</sub>瀧沢



川二而陣、信長至<sub>レ</sub>設樂<sub>レ</sub>郷、將士議<sub>レ</sub>戰、德川氏部將酒井忠次進曰、臣請今夜間道遠出<sub>レ</sub>敵背、

襲<sub>レ</sub>鷲巢壘、縱<sub>レ</sub>火敵營、以<sub>レ</sub>褫<sub>レ</sub>其氣、而大軍乘<sub>レ</sub>之、莫<sub>レ</sub>不<sub>レ</sub>勝矣、信長罵曰、咄、田舎兒何知、

諸將皆退、信長使<sub>レ</sub>人陰招<sub>レ</sub>忠次曰、汝計可<sub>レ</sub>用、吾恐<sub>レ</sub>其漏泄、故伴<sub>レ</sub>叱<sub>レ</sub>之耳、汝宜<sub>レ</sub>速發、

一大合戰小セリ合、共ニ味方<sub>二</sub>三度モ勝利ヲ見レハ、戰ヨシト云トモ、猶忘ル事ナク、晝夜堅

可<sub>レ</sub>相守事、兵法曰、戰克、易ク、守<sub>レ</sub>勝難、客戰

永祿三年五月、駿河今川義元率<sub>レ</sub>兵四萬餘、略<sub>レ</sub>遠參<sub>二</sub>入<sub>レ</sub>尾張、進攻<sub>レ</sub>丸根、尋至<sub>レ</sub>桶狹間、尾張地名

與<sub>レ</sub>織田信長<sub>二</sub>戰、信長先鋒佐々隼人等、馳<sub>レ</sub>今川軍<sub>二</sub>而死、駿人獻<sub>レ</sub>其首、義元笑曰、尾人當<sub>レ</sub>殲<sub>レ</sub>

於是役、乃張<sub>レ</sub>宴酣飲、信長望<sub>レ</sub>丸根鷲津之烟、令<sub>レ</sub>軍中<sub>二</sub>曰、轉取<sub>レ</sub>山路、偃<sub>レ</sub>旗鼓、直衝<sub>レ</sub>中堅、

時風砂撲<sub>レ</sub>面、雷雨暴至、諸將或諫止、弗<sub>レ</sub>聽、梁田出羽呼曰、奇策必有<sub>レ</sub>奇勝、師競攀<sub>レ</sub>山踰

嶺、鼓譟而下、今川麾下驚擾、尾人服部小平太望<sub>レ</sub>見義元、進擊<sub>レ</sub>之、義元拔<sub>レ</sub>刀斫<sub>レ</sub>其膝、毛

利秀高鎗刺<sub>レ</sub>義元、獲<sub>レ</sub>其首級、今川軍大敗績、織田兵追擊、斬首<sub>二</sub>二千五百級、今川家老宿將咸

死、國史略

一長陣之心得、攻<sub>レ</sub>城

永祿八年、毛利元就帥<sub>レ</sub>師入<sub>レ</sub>出雲、攻<sub>レ</sub>富田城、夏四月、元就悉<sub>レ</sub>衆三面攻<sub>レ</sub>富田、尼子義久與<sub>レ</sub>弟倫久・秀久同出<sub>レ</sub>城接戰、各當<sub>レ</sub>一面、殺傷相當、元就曰、堅城勅敵、未<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>力爭<sub>レ</sub>也、乃還、

次<sub>二</sub>洗合、九月、復進<sub>レ</sub>軍、築<sub>レ</sub>長圍逼<sub>レ</sub>富田、益斷<sub>レ</sub>其糧道、尼子氏受<sub>レ</sub>圍既七年、城中食尽、外絕<sub>レ</sub>救援、人人危懼、秋七月、義久出降、尼子氏亡、國史略

一付カエリ討之事、攻城篤城責メ不落シテ引上ル心得ノ事

天文五年十一月、信虎出<sub>レ</sub>兵信濃、攻<sub>レ</sub>海野口城、城主平賀源心善戰、信虎以<sub>レ</sub>兵八千<sub>二</sub>攻<sub>レ</sub>之、

踰<sub>レ</sub>月不能<sub>レ</sub>拔、會大雪、諸將議曰、時已窮臘請<sub>レ</sub>班師、敵亦必不<sub>レ</sub>尾也、信虎從<sub>レ</sub>之、晴信請<sub>レ</sub>

自殿、信虎笑曰、敵必不<sub>レ</sub>尾、而請<sub>レ</sub>殿、如<sub>レ</sub>三郎、必不<sub>レ</sub>然也、晴信固請、以<sub>レ</sub>兵三百<sub>二</sub>殿、後<sub>二</sub>

大軍<sub>二</sub>數里止舍、親警<sub>レ</sub>其兵<sub>二</sub>曰、勿<sub>レ</sub>釋<sub>レ</sub>甲、勿<sub>レ</sub>卸<sub>レ</sub>鞍、食<sub>レ</sub>於馬<sub>二</sub>而後食、五更即發、唯吾所<sub>レ</sub>嚮

是視、兵皆竊嗤<sub>レ</sub>之曰、風雪如此、何警<sub>レ</sub>為、五更、晴信即發、還向<sub>レ</sub>海口、與<sub>レ</sub>三百騎<sub>二</sub>冒<sub>レ</sub>雪

馳、味爽抵<sub>レ</sub>城、源心已散<sub>レ</sub>遣其兵、獨與<sub>レ</sub>百人<sub>二</sub>留守、晴信分<sub>レ</sub>兵為<sub>レ</sub>三、自<sub>レ</sub>以<sub>レ</sub>一隊<sub>二</sub>入<sub>レ</sub>城、二

隊揚<sub>レ</sub>幟城外<sub>二</sub>應<sub>レ</sub>之、城兵不<sub>レ</sub>測<sub>レ</sub>其衆寡、不<sub>レ</sub>戰而潰、乃斬<sub>レ</sub>源心、以<sub>レ</sub>其首<sub>二</sub>歸獻、一軍大驚、日

本外史十武田氏

逆寄心得之事、守城

天文十一年春、大内義隆率<sub>レ</sub>軍、攻<sub>レ</sub>尼子富田城、在<sub>二</sub>出雲晴久在<sub>レ</sub>圍城中、固守不<sub>レ</sub>出、大内兵挑

戰不<sub>レ</sub>止、蟻附登<sub>レ</sub>城、晴久察<sub>レ</sub>其無備、左<sub>二</sub>右<sub>二</sub>子義久・倫久、率<sub>レ</sub>退兵、開<sub>レ</sub>城門、大呼馳出、

防兵驚擾、解<sub>レ</sub>圍潰散、大内義房死<sub>レ</sub>之、晴久乘<sub>レ</sub>勝追擊、元就殿防<sub>レ</sub>之、晴久乃班<sub>レ</sub>師、國史略



一敵ニヨリテ用捨之事、伏戰

永享十年秋九月、持氏復遣兵擊憲實、于時持貞等為出其不意、捲甲陰旗、馳八十餘里於一夜、黎明到上野邑藤岡而屯、持貞以為寇未知、姑息兵、不設備、時憲實謀而初知之、故使兵伏森林、出浮兵襲持貞之軍、持貞以為憲實來到、合前後之兵圍之、時憲實之兵不戰奔、持貞之兵擾列追之、陷伏中、於是所伏之兵均起前後、張翼挾應、鎌倉兵大驚敗走、上杉之兵追擊、斬首數十、持貞漸遁歸、本朝通紀

一我カ威風ヲ發シ敵ノ氣ヲ奪フニ用ル事、火戰

元龜二年八月十三日、信長攻叡山、遂分兵、四面合圍、縱火燔伽藍、悉捕僧侶、併其所蓄婦女童幼皆斬之、山谷為空、乃藉其田、予明智光秀、國史略

一一方ヲ放火シ敵ヲ集メ、其虛ヲ打ニ用ル事、火戰

曆應元年夏六月、顯家戰死之後、八幡之官軍倍失助、城中大疲勞、故南帝賜宸筆、勅書於義貞、使促八幡之援兵、義貞蒙勅、自在越前、圍高經所守之黑丸壘、使義助屬二萬餘騎、救八幡、義助卒兵臻敦賀、尊氏聞之、以為境裏敵未亡、又北國之大軍入京、大事也、乃馳使於八幡攻兵告之、師直恐縱攻援兵之至、故潛使間放火於神殿、時疾風吹火、延火覆諸營、所圍攻兵乘之、蟻附登城、城兵大周章、義助在敦賀、聞八幡炎燒、以為城

已陷矣、不能速來援、城中倍食盡無奈何、顯信・義興知事不濟、乘夜<sup>二十</sup>出城逃、義助

亦自敦賀引兵還越前、本朝通紀

一爰ニ軍有ト云事ヲ、餘所之味方ニ知ラシメンカ為ニ用ル事、火戰

文和二年夏、山名時氏及師氏帥師、自伯州上洛、與南軍會師、掠京師、南方之官軍放火於八條九條、以揚相圖之烟、於是時氏・師氏等亦縱火於梅津嵯峨仁和寺西七條之所、入洛、本朝通紀

曆應元年春正月、義貞・義助在杣山、密聚兵、尊氏聞之、使足利高經及伊豫守將三千騎擊之、高經到越前據府城、與義貞相對、不挑戰、時加賀越前官軍約期、將攻府城、於是義助亦帥四百餘騎、勦力陣鯖江宿、高經間察義助之寡兵、使細川出羽守<sup>從兵五百</sup>出城襲義助、義助兵躡三万死戰、出羽守開扉、義助使篠塚某放火於村岡、告急於遠近、國內官軍望見而來援、京兵益擾亂、本朝通紀十三

一敵大ニ勝タル夜ノ一、夜戰

永正十四年、兩上杉氏大舉來攻、曰、此行必剪滅小田原、至河越、圍城數重、意期必取、北條氏康聞之曰、吾必赴援、乃自將赴援、憲政・朝定并晴氏、兵凡八萬騎、氏康計驕而襲之也、佯請和解、憲政等不聽、氏康出至入間河南、上杉氏兵來迎、氏康不戰而走、居五六



日、又出至河南、敵來、又走、氏康曰、可矣、夜半直衝上杉氏軍、軍大驚擾亂、我兵縱橫奮擊、莫不<sub>レ</sub>當<sub>レ</sub>百、殺傷二萬餘人、虜<sub>レ</sub>朝定、走<sub>レ</sub>晴氏、憲政、八州豪傑即夜降<sub>レ</sub>氏康者九十餘姓、時十五年四月二十日也、日本外史九後北條氏

一敵驕ルカ臆セルカ見定ル事、夜戰

天文十一年三月、義清・長時・頼茂與<sub>レ</sub>木曾義高、舉<sub>レ</sub>信濃兵<sub>レ</sub>來攻、諸將皆懼、晴信曰、四人合從、議必不<sub>レ</sub>一、可<sub>レ</sub>一戰而破<sub>レ</sub>也、乃佯浚<sub>レ</sub>溝高<sub>レ</sub>壘、四人以為<sub>レ</sub>怯、進入<sub>レ</sub>境內、晴信夜發、乘<sub>レ</sub>霧雨<sub>レ</sub>逼擊、大敗<sub>レ</sub>之、

永祿六年、里見義弘出<sub>レ</sub>兵下總、與<sub>レ</sub>大田資正<sub>レ</sub>合、氏康・氏政將<sub>レ</sub>兵發<sub>レ</sub>小田原、與<sub>レ</sub>義弘<sub>レ</sub>夾<sub>レ</sub>鴻臺<sub>レ</sub>而陣、其夜、候騎報曰、義弘兵却、我先鋒遠山某・富永某進濟<sub>レ</sub>搦木瀨、平旦引<sub>レ</sub>兵登<sub>レ</sub>臺上、敵將正木某伏<sub>レ</sub>臺傍<sub>レ</sub>二里許、卒起要擊、我兵大敗、二將力戰死、餘兵大走、敵進至<sub>レ</sub>氏政陣、氏政應<sub>レ</sub>兵橫擊却<sub>レ</sub>之、氏康已濟<sub>レ</sub>水、得<sub>レ</sub>敗聞、召<sub>レ</sub>諸將<sub>レ</sub>曰、吾欲<sub>レ</sub>為<sub>レ</sub>二將<sub>レ</sub>雪<sub>レ</sub>恥、何如、氏政曰、曩者遣<sub>レ</sub>二卒、雜<sub>レ</sub>敵入<sub>レ</sub>其陣、還報曰、義弘在<sub>レ</sub>臺上<sub>レ</sub>檢<sub>レ</sub>二將<sub>レ</sub>首、意色甚驕、曰敵喪<sub>レ</sub>其良、度已退去、吾且日濟<sub>レ</sub>水追<sub>レ</sub>北殲<sub>レ</sub>之、乃釋<sub>レ</sub>甲休<sub>レ</sub>兵、是其可<sub>レ</sub>襲也、氏康曰、然、乃勒<sub>レ</sub>二軍、氏康・氏政自為<sub>レ</sub>先鋒、會日且暮、大霧、咫尺不<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>辨、二軍自<sub>レ</sub>臺南北<sub>レ</sub>鼓譟而登、聲震<sub>レ</sub>天地、義弘軍大驚潰走、

一首取ベカラズ、打捨ニ可<sub>レ</sub>仕事、夜戰

北條氏康援<sub>レ</sub>小田原、永正十五年四月廿日、夜衝<sub>レ</sub>上杉氏軍、約日勿<sub>レ</sub>取<sub>レ</sub>其首、

武者七八十有テ、源心ヲ始メ番ノ者共五六十討殺、高名モ無用、平賀カ首計是ヘ持テ參レトテ、晴信公ノ御前ニ置、信玄全集海野ノ城責ノ條下

一上着胴肩衣ハ白カルヘキ事、夜戰

一指物ヲ不<sub>レ</sub>指、袖印笠印可<sub>レ</sub>有事、同

北條氏康援<sub>レ</sub>小田原、永正十五年四月廿日、夜衝<sub>レ</sub>上杉氏<sub>レ</sub>軍、令<sub>レ</sub>其兵皆尙<sub>レ</sub>白布於鎧上、約<sub>レ</sub>之曰、遇<sub>レ</sub>不<sub>レ</sub>白者、輒斫<sub>レ</sub>之、

一火ヲ付ル處心得之事、同時分ノ事、夜戰

文明元年春三月、<sup>十六</sup>勝元夜使<sub>レ</sub>兵襲<sub>レ</sub>宗全營<sub>レ</sub>燒<sub>レ</sub>之、火及<sub>レ</sub>廐、宗全擊破<sub>レ</sub>之、勝元兵遁走、

國史

兵學小識目錄

學門大科<sup>(六カ)</sup>

第一科 養兵学



撰兵法 給糧法 授衣法 戒裝法 療病法

第二科 練兵学 一終ル 出三二兵之各条

卷之二(朱書以下同)

第三科 製器学

礮類四種 迦 白 忽 エーホーレン 銃類四種 ムスケツト 大手銃 カラベイン 騎銃 スナツパン 歩銃 ヒストウル 小手銃

卷之四

彈丸火箭廿一種 カルロナーダ ボンプ彈 カラナーデン 榴 ブリツキドウス 雹 葡萄 鐵格

卷之五

鐵腔 火囊 鉛 錐 雷 光 烟 鏈 へタル 火桶飛柱

卷之六

火車 火箭 火壺 鉄菱 附火繩 急火管 地雷火土白礮 附火藥

卷之七

硝石 硫黃 木炭

鎗劔十種 甲冑四條 兜蓋 胸甲 掩膊 脛衣

軍中雜器 弓 矢 牌三 菱板 菱格 繩梯 雲梯 礮車 傳令管 喇叭

鼓 屈曲管 旌旗

放礮諸雜器 棚杖 火藥匙 彈鈇 擧彈棒 火繩鈇

第四科 營城学

營城学總論 城類區別 城壘名目 菱城之利 方圓城之不利 附子城牙城之論

三國城制之異同 獨以都・拂蘭察・和蘭 諸壘造法總論 石壘土壘之論 二重壘三重壘 諸壘名

目諸部區別 城門角壘造法 城門口壘造法 堞牆造法 殿宇樓臺城門兵舍造法

湟城婁總論 滿水湟 乾湟 雷火坑 地雷火裝藥放發法 附礮臺造法 固定礮臺 離合

礮臺 放礮四法

第五科 檢地学

檢地總論 平地陣營檢查製造法 山營同上 林營同上 川側沼邊同上 都府同上

村莊寺院同上 古今陣營造法 三兵陣營區別 前軍陣營排列法 中軍同上 後軍

同上 遊軍翼軍同上

第六科 修路学

山路修造法 平地修路法 諸橋造法 大川巨沢通行法 狹路通行法 深村通路法

術門三科

第一科 戰鬪術

步兵之部 步兵編制 橫隊疎密 縱隊疎密 散隊 附操練法

騎馬之部 附方陣 圓 梯 菱 鏈 離合中軍隊 聚散變化陣



行軍之部 行軍法則 急行軍 緩行軍 前軍進退諸法 中軍—— 後軍——  
 翼軍遊軍同上 山路諸軍進退法 平地同上 濕地—— 狹路—— 四季風  
 日雨中行軍之法 敵之近傍行軍之法 敵兵在前後左右時—— 斥候 搜伏法  
 接戰之部 步兵戰法 騎兵—— 礮兵—— 正—— 奇—— 前軍——  
 中—— 後—— 翼—— 步騎接戰之法 騎兵破步兵法 步兵防騎法 橫  
 隊戰法 縱隊—— 散隊—— エスカトロン隊—— 縱橫兩隊接戰之利害 翼軍攻  
 法 屯營攻法 近世馬軍破陣之新法 方陣攻法 圓陣—— 梯—— 菱——  
 鏈—— 礮兵助戰法 礮兵進退排列諸法 三兵連屬法 都府戰法 僻鄉陋  
 村—— 山戰 夜—— 林—— 堤—— 橋—— 狹路戰法 水辺—— 急襲法  
 夜軍戰法 回軍——

第二科 攻守術 此編未定稿、

第三科 用兵術 此編譯業未竣、

○ 隱元年

○鄭ノ莊公ノ時、共叔ヲ京ニ居ラシム、祭仲曰、姜氏何厭之有、不レ如早為之之所ト、祭仲カ所  
 謂為之之所モノ其意果ノ如何、且此事ヲ處スルヲ、如何セバ則允當ナルベキ、  
 ○鄭伯叔段ノ戰、其邪正逆順、論ヲ待タズ、唯鄭伯カ克ツ所以、叔段カ敗ル、所以ハ、則安クニ  
 カ在ルヤ、

二年

○春公會ニ我于潛ニ我請盟、公辭、蓋シ好ヲ脩スルヲ許メ、盟ヲ許サルハ、夷狄ヲ禦グ所以ト  
 見ヘタリ、然ルニ、未ダ一歲ナラズノ、秋盟ニ于唐ニモノハ何ソヤ、夷狄ノ横ナルカ、魯ノ終始  
 一意ナラサルカ、傳明ニ之ヲ言ズ、當時ノ勢、推シ言ベキモノアリヤ、且其得失何如、

三年

○周鄭交質、君子曰、信不レ由中、質無レ益也、明知而行、要之以レ礼、雖レ無レ有質、誰問レ之、  
 君子ノ言ニ依レハ、周鄭ノ間、其處置如何セハ則可ナラン、  
 ○宋穆公疾、召ニ孔父ニ而屬ニ殤公ニ焉、對曰、羣臣願奉レ馮也、孔父カ言、信ナルカ、將諛言ナル  
 カ、

○穆公殤公ヲノ位ニ即カシメント欲ス、故ニ使ニ公子馮出居ニ于鄭、是レ時措ノ宜キト云ベキカ、  
 ○衛ノ石碚、莊公ヲ諫ムル語中ニ曰、將レ立三州吁、乃定レ之矣、此言亦其理アリヤ、唯激ノ其言



ヲ為スカ、

○石碯カ事ヲ言テ、桓公立、乃老スヲ以テ之ヲ終フ、傳家觚ヲ操リ思ヲ構フルノ意何如、

五年

○古へ蒐獮ノ典、以テ昭ニ文章ニ明ニ貴賤ニ辨ニ等列ニ順ニ少長ニ習ニ威儀ト云フ、後世操練ノ事アリト雖モ、恐クハ此ニ及バズ、此レ其法ノ未タ得サルカ、將其時ノ不同アルカ、

○鄭伐レ宋、宋人使ニ來告レ命、公使者ノ一言ニ怒テ、救フヲ止ム、仁ニ親ミ隣ニ善キノ道ニ於テ、合サルニ似タリ、如何、

九年

○北戎侵レ鄭ノ一段ヲ味フニ、車ヲ以テ徒ト戰ヘバ、車兵利少キニ似タリ、未タ其説ヲ得ズ、豈北戎ノ徒、格別ニ勇悍ニノ然ルカ、毎戰皆然ルカ、

十年十一年

○庚午、鄭師入レ郟、辛未、歸于我、庚辰、鄭師入レ防、辛巳、歸于我、鄭師入レ許、齊公以レ許讓レ公、公乃與之鄭人、鄭伯使ニ許叔居ニ許東偏、使ニ公孫獲處ニ許西偏、傳是ヲ断ノ、一ハ正矣ト云、一有レ礼ト云、齊鄭ノ處置、時ニ措クモノカ、理ニ當ルモノカ、

○鄭伯使レ詛射ニ穎考叔者、傳是ヲ断ノ、將何益矣ト云フ、然ラバ則如何セハ益アラシカ、

○隱公羽父カ請ニ從ハズノ、却テ身弑セラル、君子此ニ當ツテ、身ノ防ヲ周包スルノ道アルベシ、何如、

桓二年

○宋督殺ニ孔父、公怒、督懼、遂弑ニ殤公、按ルニ、是亦隱公ノ羽父ニ於ルト同日ノ論ナリ、何如、

六年

○鬬伯比羸師以張レ之、以為ニ後圖ト云フ、羸師ハ一時敵ヲ誘スルノ策ノミ、而ノ其後圖トナル所以ノモノ、其詳説聞クヘキカ、

○楚ノ鬬伯比隨ヲ謀ル、季梁隨侯ニ謂テ曰、君姑脩レ政而親ニ兄弟之國、庶免ニ於難、方今邦國ノ防寇ヲ論スル者モ、亦皆脩レ政ヲ以テ本トス、得タリ、但親ニ兄弟之國ニ至テハ、未タ其論ヲ聞カズ、敢テ問、今ノ親ミ、以テ之ニ尚フルヲナキカ、亦未シカ、

十年

○虞叔伐ニ虞公、故虞公出走ニ共池、叔カ不弟不臣、其罪固ヨリ免ル、ニ所ナシ、然レ叔タル者亦難シ、此時ニ方ツテ、心ヲ宅キ行ヲ制スル、何如セバ則可ナラン、

十二年











直ニ賊ノ横ヲ衝ク、声勢ヲ借テ歩銃隊亦銃ヲ擔ヒ接戦ヲナス、砲隊退テ松間ニ止リ、吾接戦ノ兵、万一利ヲ失テ却走スルニ備フ、而シテ歩隊前進シテ関ヲ發シ、賊ヲ追立ル様ヲナスヲ以テ、前操ノ終、松間ニ伏シ、掩撃ニ備ルノ砲銃隊又砲ヲ打ス、本營鼓止ミ金鳴リ、進撃ヲ止メ、貝鳴リ旗磨シテ、諸隊原地ニ還ル、

旗幟

各兵皆袖章アリ、隊長腰旗アリ、砲隊赤章、銃隊青章、歩隊白章、本營赤青白三色ノ旗ヲ立ツ、赤旗ヲ搖セハ砲隊進ミ或戰フ、之ヲ磨スレハ則原地ニ還ル、之ヲ伏スレハ則坐定ス、青白旗ノ銃歩隊ニ指揮スル、皆之ニ準ス、尤赤青白ノ三色、深ク拘スルコトニ非ス、唯色以テ目ヲ感スベクシテ可ナリ、

金鼓貝

金ハ止ルコトヲ令ス、鼓ハ進ムコトヲ令ス、貝ハ人ノ耳ヲ起ス所以ニ、故ニ旗ヲ搖シ、或ハ旗ヲ磨シ、及ヒ金鼓ヲ鳴ラスノ前、必ラズ貝ヲ吹テ、人ヲノ之ヲ見聞セシム、

斥候使武者

使武者ハ將ノ近キニ在テ、將ノ令ヲ衝テ諸隊ニ告ク、若シ將命有テ賊ヲ候セシムレハ、則斥候トナル、大率三員アル時ハ、一員ハ陣頭ニ在テ賊ヲ候シ、二員ハ麾下ニ在テ將令ヲ待ツベシ、

屯玉

賊三四町ノ内ニ來ル時、屯丸ヲ行軍砲ニ裝ノ之ヲ發ス、其法、小丸數十百箇ヲ封メ、其玉目ノ三倍タラシム、其詳在砲家書今畧シ之而シテ其丸ノ着ク處、横ナラシメント欲スレハ横ナラシメ、縦ナラシメント欲スレバ縦ナラシムベシ、遠キニ及ビ堅キヲ貫クノカナシト雖モ、之ヲ野戰ニ用イバ、猶小銃ヲ連發スルガ如シ、一發ノ力ヲ計ルニ、夷ノ工巴偪尼ノ兵銃ヲ連發スルニ勝レリ、大凡五百目銃以下ヲ行軍砲トス、是実丸ヲ用ルノミナレバ、甚小業ト云ベケレ共、此一術アリテ、此種ノ砲大益アルヲ覺フ、

炮烙彈

西洋術ヲ尊信スルモノ、甚ボンベン彈ヲ恐ル、然レモ、ボンベンハ特リ破ルノカアルノミ、吾邦ノ所謂炮烙彈、既ニ破ルノ力アリ、又燒ノ能アリ、或又ホーイツスル筒ヲ便トス、然レモ車臺ノ製、高大重澁、且發ノ中ヲ命スルコト能ハズ、吾邦炮烙筒形狀、少シク異ナリト云モ、要スルニ大差ナシ、而シテ其之ヲ用ル、率裸筒ニ用ユ、亦中ヲ命スベシ、又本臺摺臺ヲ加レハ更ニ妙ナリ、余思フニ、新奇ヲ術スルモノ、或ハ格致ノ一端ト云モ、時ニ或ハ近ヲ去テ遠キニ趨リ、実ヲ捨テ虚ヲ取ルコト、是ノ如ク甚敷コトアリ、



〔武政全書客戰篇〕  
〔客ハ我敵國ヘ入テ戰フナル故ニ客トナルノ義ニテ、客戰ト云、

客戰敵國ヘ働入

○敵國ヘ働入ヘキ前方重習 未戰前ニ常平日四方ノ敵ト戰ヘキヲ習シ、之事  
又戰ントスルニ臨テ重テ又習スヲ重習ト云  
一 小敵事不足ナル敵 弱敵 大人数ナレトモ戰愚 邪敵 国政邪多ク士民苦 考 敵ハ小カ弱カ邪カト考ヘ是  
道ヲ考ヘシトナリ、之事

〔三〕敵ハ大将ノ上ニカ、ルナリ、  
ハ考ノ字一條ノ眼字、考レ敵考ニ攻術ノ義、皆有ニ考字、

一 敵之人数、大小强弱 敵ノ人数ノ大 同加勢後詰 親族隣國ヨリノ 之考 何ノ國ハ何ノ國ト親族ニ 之事  
小强弱 小强弱算積リ 同加勢後詰 加勢後詰ヲ考フ 之考 何ノ國ハ何ノ國ト親族ニ 之事

付強弱内習 敵ノ強弱ノ内 前後替 又後臨レ戰ハ一万トツモレハ、一万ト直ニ士卒ヘ云聞ヘシ、此レ替也  
習ヲ作スニ 前後替 又後臨レ戰ハ一万トツモレハ、一万ト直ニ士卒ヘ云聞ヘシ、此レ替也

〔三〕大小ハ分限ニヨルト云ヘトモ、百石四人五人ナト、兵賦  
ノ異ナルヲアレハ、先彼カ分限ト兵賦トヲ以テ考ヘシ、

〔本〕武藝盛ナレハ強、反レ是弱、前後替先觸立ノ時ハ敵人多キ如ク、備弱トテ侮ラズ、又後  
ハ直ニ云ハ、士卒ハ我ヨリハ少シト思、英氣益益ト云ヘリ、○然レモ又侮ラヌ心得要、

一 国一國之風俗 東國ハ馬能シ、西國ハ舟ヲ能シ或 弓矢之格 此風俗、即弓矢 之事、国ニ風俗有 國々  
弓鉄或劍鎗類、此國ノ風俗ナリ 弓矢之格 此風俗、即弓矢 之事、国ニ風俗有 國々

タノ風俗 人ニ眞草ノ格有 人ノ弓矢ヲ取ニ、敵ニ剛敵 ツヨキ敵 強敵 一旦モヘ立 弱敵 戰ノ道愚カ  
カアル也 眞草ノ格アリ 眞草ノ格アリ 敵ニ剛敵 ツヨキ敵 強敵 一旦モヘ立 弱敵 戰ノ道愚カ

隨敵 木ノ風ニ隨如 若敵 若クシテマダイ 之五敵有事 五敵、古註、配ニ五姓、曰、剛爲レ金、強爲レ火、弱  
隨敵 木ノ風ニ隨如 若敵 若クシテマダイ 之五敵有事 五敵、古註、配ニ五姓、曰、剛爲レ金、強爲レ火、弱  
信玄、強爲レ謙信、弱爲レ上杉、  
隨爲レ信長、若爲レ家康、云々、

〔ハ〕猶ニ戰格、蓋戰必用ニ弓矢、  
〔ト〕眞者備ヲ云、一二陰陽、左右前後法ノ如クス、將ハ本陣ニ有テ下知ヲナス類、  
〔在カ〕  
艸ハ跡留有テ、法ニカ、ハラヌ時ノ宜ニ從也、眞艸ト云、其中ニ眞艸兼タルヲ云  
ナルベシ、格、カタ形義ナリ、

一 天之時 孤虚旺相 寒暑之時分 極寒極暑ニハ兵ヲ 之事 此條、用レ兵日レ不レ可  
之類也 孤虚旺相 寒暑之時分 極寒極暑ニハ兵ヲ 之事 此條、用レ兵日レ不レ可  
〔子〕孫子所レ謂、天者陰陽寒暑、亦同意、

一 地形之品々 地形ニ 遠近險阻 易平 廣狹死生 是 考 地形ノ品々ヲ考、之事  
品々有 遠近險阻 易平 廣狹死生 是 考 地形ノ品々ヲ考、之事

同繪圖 敵國地形ヲ以テ、内談 某地遠或近又險 致シ、諸軍ヘ可ニ申聞 覺サスルニ 事  
同繪圖 敵國地形ヲ以テ、内談 某地遠或近又險 致シ、諸軍ヘ可ニ申聞 覺サスルニ 事  
附リ、繪圖致様 細詳ナルコトニハ及ス、只地形ノ品々又何ハ 之事  
附リ、繪圖致様 細詳ナルコトニハ及ス、只地形ノ品々又何ハ 之事

一 内習 密 顯ハアラハ、密ハカクスナリ、内習 之事  
人ニ知ラシメ顯スコト又密スコト有 之事

〔是〕用レ兵之要道也、タトヘハ関東ヘ働入シニ木曾ヲ經テ發向スレハ、其木曾ノ道スチヲ繪圖ヲ以テ士卒  
ヘ合点サスル、是顯、何故ヲ以、本道ノヨキ道ヲハサシキ木曾險ヲオスナトノ處ハ知シメズ、是虛也



一敵國糧之様子 敵國ノ豊凶、或ハ處々多ク 並味方兵糧之運送 味方兵糧運送スルニ、海陸其便不 計 便ナド、又舟人、馬何程入ノ類ヲ

〔語解二則〕

一學レ古用レ新、為レ新用レ古、

私云、智者ハ古ヲ師トス、天ノ德地ノ道ニノツトリテ、是ヲ行ト云凡、其事ハ又當然ノ理ニ隨テ新用レ之、是學レ古用レ新也、事物ノ變ハ無レ窮、不レ竭如ニ江海ニ無レ窮如ニ天地、然レ凡用ニ當然之理、則更不レ滯、能轉化而其事新ナリト云凡、亦万代不易ノ一理也、是為レ新用レ古ト云也、

一相尅相生、  
私云、相尅者、水尅火、火尅金、金尅木、木尅土、土尅水也、相生者、水生木、木生火、火生土、土生金、金生水也、相尅而相生者、天地ノ理也、

〔問條十則〕

△趙括少ヨリ兵法ヲ學テ、天下能當ルモノナシト謂ヘリ、而ノ遂ニ白起ガ敗ル所トナリ、数十万ノ軍、悉ク長平ニ坑セラル、是ニ於テ、後世兵ヲ談スル者、皆一概ニ括也ヲ非笑ノ、深ク其由ヲ尋テ、然レ凡、括、當時ニ在テ、始ヤ父奢ト兵事ヲ言、奢、難スルヲ能ハス、終ヤ趙王遽

ニ老練ノ廉頗ニ代フ、思フニ、其論辯亦後世ノ非笑スルカ如キ迂濶ニ非サルニ似タリ、而シテ藺相如、變ニ合フヲ知ラザルヲ譏リ、父奢、易ク兵事ヲ言フヲ譏ル、然則括カ學フ所果ノ何如、後ノ學者自ラ括ニ別ツ所以、又何如、名將譜 趙奢

△古今戰畧ノ異同、大抵器械ニ依ル、源平ノ時弓矢ノ利用最モ盛ナリ、遠ケレハ則彼我共ニ矢軍シ、迫レハ則太刀長刀接戰ス、南北ノ争ニ至テ專ラ干楯ヲ以テ矢ヲ防ク、叢鎌敵ヲ射テ、其動搖ノ機ニ乘テ騎馬衝突ス、槍ヲ用テ南北ノ末ニ剋ルト雖凡、天文永祿天下鼎沸ノ時ニ盛ナリ、斯時ニ當テ鳥銃ノ傳漸ク廣シ、弓ト銃ト皆之ヲ雜卒ニ授ケテ、是ヲ陣頭ニ置キ、敵ニ對スルニ及ンデハ、先ツ弓銃相抵テ、其機ニ因テ刀槍ヲ用テ接戰ス、多クハ步戰ヲ用テ騎戰ヲ用ズ、是戰畧ノ大異同ニ、其他小異同蓋シ亦一二ナラズ、或、各家ノ長技戰畧ノ異同ヲ致スモノアリ、惣軍刀ヲ短フシテ以テ接戰ニ便シ、騎銃以テ敵ヲ破リ、槍ヲ雜卒ニ授テ敵陣ヲ薙立、槍柵ヲ作テ以テ騎兵ヲ拒クノ類ニ、地形ノ便利、戰畧ノ異同ヲ致スモノアリ、坂東ノ騎、南海ノ船、甲越ノ步鬪ノ類ナリ、斯數ノ者、勢節險短ノ說ニ於テ合フヲアリヤ、且昇平以來火器ノ精巧古ニ十倍ス、今ニオイテ戰略ヲ論セバ、亦器械ニ依テ異同ノ云ヘキアルカ、

△今ノ邊備ヲ論スルモノ、興ニ操習ニ繕ニ水師ニ造ニ船艦ニ鑄ニ銃砲ニ築ニ墩臺ニ堀ニ坑道ニト云サルハナシ、此數ノ者悉ク舉レハ邊備既ニ全キカ、且此數ノ者ヲ施用ンニ亦緩急アルカ、豈別ニ事体ノ



此ヨリ重ク、時勢ノ此ヨリ急ナルモノ有リヤ、忌諱スル所ナクノ其説ヲ悉セ、

△魏ノ武侯、吳起ニ問フ、兵何以勝ツヲセシ、起之ニ對フルニ治ヲ以テス、起カ對フル所、當時魏國ノ政教風俗ニ於テ激スル所アリテ言カ、亦天下古今ニ通フ云フカ、且其所謂治者、居動、進退、前却、左右、絶散、安危、合離、用疲ノ数件、特ニ其効驗ヲ言ノミ、其是ヲ致ス所以ノ道、果ノ何如、吳子治兵篇

△元龜天正ノ際、上下百余年天下分裂シ、能將謀士、戰ヘハ勝チ攻レハ取ルモノ、一時輩出シ、後世能及フヲナシト稱ス、唯其及フヘカラサル所以ノ実、道德仁義、己ヲ修メテ以テ人ヲ治ルノ道及フヘカラサルカ、節制操練、自ラ保テ勝チ全フスルノ術及フヘカラサルカ、且選舉委任、賢ヲ用イ能ヲ使フノ法及フヘカラザルカ、夫父ヲ出シ子ヲ殺ス、其道德仁義、稱スルニ足ラズ、教旗演武ノ制アルヲキカズ、策試科擧ノ法アルヲ聞ス、然ラハ則其及フヘカラズトスル所以ノ実、己ヲ修メ人ヲ治メ、自ラ保チ勝チ全フシ、賢ヲ用イ能ヲ使フノ外ニ在ルカ、△才果ノ事ニ益アルカ、学果ノ事ニ益アルカ、兵法ノ如キ、学テ益アラハ、霍去病何為ソ古ノ兵法ヲ学バサル、岳飛何為ソ陣圖ヲ授カラサル、北條早雲何為ソ其講ヲ竟フルヲ待タサル、則学果ノ益ナキカ、学益ナク、才特リ益アラハ、孫武吳起何為ソ書ヲ著メ後世ニ傳フル、狄青何為ソ節ヲ折テ書ヲ讀ム、武田信玄何為ソ孫武ノ兵法ヲ講論ス、二者其得失何如、

△孔子曰、軍旅之事、未之学也、孟子曰、善戰者服ニ上刑、吳子曰、數勝得天下二者稀、以亡者衆、ト、則古ノ聖賢、兵ニ於テ取ラサル所アルカ如シ、而ノ禹貢ノ綏服、外ハ武衛ヲ奮フト稱ス、周官ノ六卿、司馬其四ニ居ル、則兵廢スヘカラサルモノ、如シ、且、古今以來稱ノ忠義ノ臣トスル、齊ノ田單、蜀ノ諸葛亮、唐ノ張巡、宋ノ岳飛、明ノ王守仁、及ヒ吾楠新田諸公ノ如キ、皆善ク兵ヲ用ヒ、以テ其忠義ヲ遂ク、則兵ヲ廢スルヲ得ズ、然レハ、孔孟吳起ノ言、夏周ノ制、歴代忠義ノ事跡、相矛盾スルニ似タリ、亦各當ル所アルカ、請其説ヲ悉セ、

△海防ノ設備、其道ヲ得スハ、左ニ備ヘ右ニ備ヘ、我常ニ寡カラザル所ナシ、戰畧其權ヲ得スンバ、東ニ奔リ西ニ走リ、我常ニ暇アルヲ能ハズ、是ニ處スルノ法、蓋シ亦地利ヲ審ニシ、守ヘキ支ヘキ戰ヘキノ所ヲ知テ、屈伸變化、人ヲ致メ人ニ致サレサルニ在ランカ、然レモ、其支喉要約之地、敵ノ必攻ル所ニ、我レカヲ尽メ之ヲ守リ、敵力ヲ尽メ之ヲ攻ム、其レ正成ノ赤阪カ、清正ノ蔚山カ、且、海寇ノ如キハ、巨礮大艦ヲ挾テ直ニ來迫ル、我疇昔ノ跡ヲ執テ、是ニ備フヲ得ズ、則守ルノ法、預メ講セズバアルベカラズ、請其詳ヲ聞ン、

△古ノ所謂名將ナル者ヲ見ルニ、李廣、霍去病、趙充國、長孫晟、賀若弼、史万歲、李愬、渾瑊、狄青、張俊、吳玠、楊存中、魏勝、史天澤、常遇春、傅女德、馬昊、愈大猷、陳九疇ノ如

(原本にはこの一問條は二大團線を劃して全部を抹殺してある)



キ、皆騎射ヲ善クスルノ名アリ、其他、王彦章カ鐵槍騎突、張弘範カ馬槊、及ビ岳飛カ獨馳テ敵ヲ迎ヘ、尹繼倫カ敵將ヲ擊殺シ、且、存中カ騎射、之ヲ孫吳ノ兵法ト並ヘ精フシ、勝カ騎射亦智勇ト並ヘ稱シ、隋文帝、晟ヲ謂、亦武藝奇畧並ヘ稱ス、則名將一技一藝ノ末、刺撃力闘ノ事ニ於ル、身自ラ之ヲ修鍊シ、敢テ之ヲ輕蔑セズ、其故如何、然レモ張良多病ナルモ、亦能ク籌ヲ運シ、王守仁進士ナレモ、亦能ク戰ヒ勝ツ、則武藝必シモ學フコト事トセサルカ、後ノ將タル者、其レ何ノ法トル所ゾ、

△今ノ防寇ヲ論スルモノ三策ニ出ズ、曰海船、曰礮臺、曰陸闘、而ノ三策中亦得失アリテ、一ヲ用テ他ヲ廢ヘキカ、ハタ三策並用ヒテ、各施ス所アラシカ、且、三策、各戰畧ノ大意聞クコトヲ得ヘキカ、

操習空蹄 (嘉永二年)

(杉民治筆附箋)

以下五葉別冊ノ總論ニヨク  
貞卷 嘉永二年羽賀臺

操二行軍一

操練ノ初メ、一處ヲ占メ軍ヲ集メ、其處ヨリ行軍ノ法ヲ以テ操場ニ至ル、

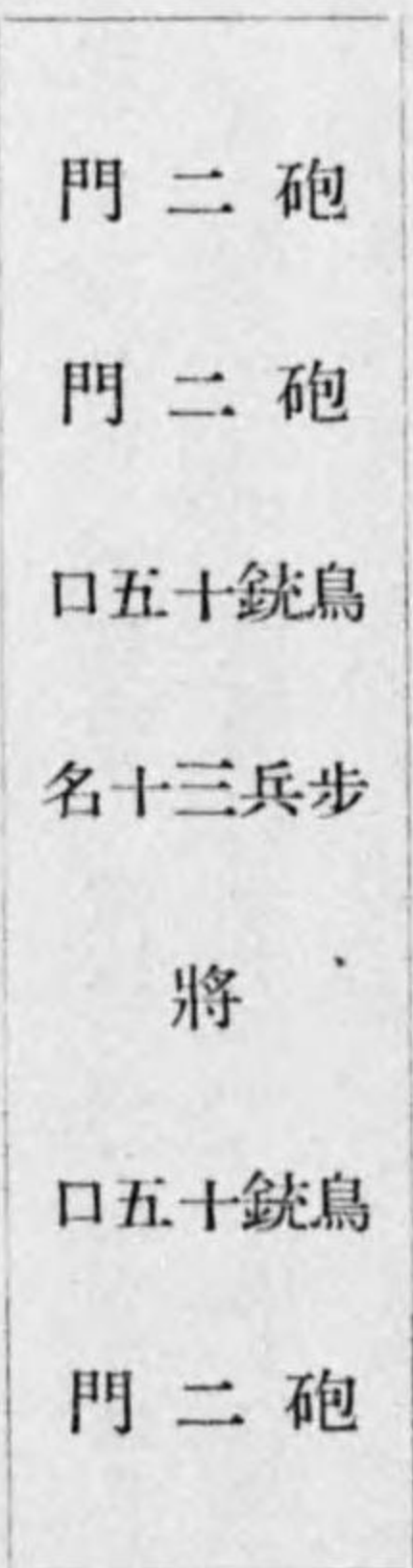
行軍圖

(貞の卷に總論がある)  
\*(五葉とは下の四六二頁五行迄を指す)

砲二門 打手共六名 銃十五口 打手十五名 砲二門 步三十名 將即本 砲二門  
長一名下同 下同

是、敵ニ遠キ時行軍ノ法ニ、然レモ、砲首ニ在リ、又尾ニ在テ以テ、賊不意ニ、或首或尾ヨリ來撃スト雖、機ニ應ルコト阻隘ナシ、而ノ尙賊ノ奇伏、樹林茂密ニ依テ、俄ニ足下ニ發スル時、砲ノ應変誤ランコト恐ル、故ニ、又銃隊ヲ以テ砲ニ繼テ其用ニ備フ、將ノ左右ハ自分ノ士卒ヲ以テ圍繞ス、亦砲銃歩騎アリ、又賊若兵ヲ出シテ吾備ノ眞横ヘ切入トキハ、中ニ在砲、或ハ將ノ自分ノ砲銃ヲ以テ是ヲ挫ク、地易ニノ賊尙跡ニツ、カバ、前後ノ砲、常蛇ノ首尾ヲ合ス、若奇伏足下ニ發スル時ハ、歩騎及ヒ銃是ニ應ズ、是ヲ以テ、首ヨリ尾ニ至ルマデ、畢ク敵ヲ受ケテ敗ル、コトナシ、是行軍ノ法也、

既操場ニ至リ備ヲ疊ム圖





此レ敵ニ近キ時行軍ノ法也、常蛇ノ首尾ノ理ハ一ニ前ニ載スル所ニ同シ、右、行軍ノ中、賊前ヨリ來撃スル様ヲ操ス、初、候騎賊ノ見ユルヲ將ニ報ス、鼓止ミ金鳴リ、軍行ヲ止ム、貝鳴リ赤旗搖キ、砲隊乃機ヲ察シテ砲ヲ打、又賊近ツクヲ以テ、貝鳴リ青旗左ニ搖キ、右ニ搖クヲ以テ、銃隊左右角トナル、金鳴リ旗磨シテ、各兵原地ニ還ル、又賊左ヨリ來撃スル様ヲ操ス、鼓止ミ金鳴リ、軍行ヲ止ム、貝鳴リ赤旗左ニ搖ク、前後ノ砲直列シテ敵ニ向ヒ、機ヲ察シテ砲ヲ打ス、貝鳴リ青旗左ニ搖ク時、銃ヲノ軍ノ左傍ニ排列セシム、賊引去ルヲ以テ、金鳴旗磨シテ、各兵原地ニ還ル、

操ニ安營ニ

銃口十五

歩三十

砲門二 將砲門

銃口十五

砲門二

操ニ接戰ニ

諸隊高敵ノ處ニ至リ、陣ヲ安シテ後、候騎ニ銃一隊ヲ添テ出シ、敵ヲ見セシム、既ニシテ敵ヲ見

ルヲ還リ報ス、本營之ヲ望テ乃貝ヲ立テ旗ヲ舉ケ、諸隊ヲ營ヨリ操出シ、備ヲ疊ミ序鼓シ、行軍ノ法ヲ以テ、松樹ノ後ニ至リ行ヲ止メ、乃諸隊ヲ任地ニ分遣ス、砲一隊ヲ本營ノ左角トシ、一隊ヲ本營ノ右角トシ、一隊ヲ本營ノ前拒トス、銃一隊ヲ本營ノ前、松樹ノ間ニ置キ、一隊ヲ本營ノ後ニ置ク、歩隊ヲ本營ノ右窪下ノ處ニ伏シ、本營ノ翼トス、分付既ニ定テ賊來鬪フ様ヲ為ス、貝鳴リ赤旗搖テ、砲ヲ連放シ奪前ノ勢ヲナス、又貝鳴リ青旗後ニ向テ搖キ、本營後ノ銃隊、左角砲隊ノ後左ヲ廻リ、敵ノ右翼ヲ撃ツ、既ニシテ敵敗走スルニ依テ、本營貝鳴リ白旗搖クヲ見テ、歩隊前進ノ賊ノ左翼ヲ打、此時急鼓ヲ撃ツ、鼓止ミ金鳴リ銃砲歩皆止ル、貝鳴リ白旗磨スレバ歩隊原地ニ還ル、青旗磨シテ銃隊還リ、赤旗磨シテ砲隊還ル、

前操既ニ畢リ後操又始ル、此時砲一隊ヲ松間ニ止メ、以テ後圖ヲナシ、其餘ノ諸隊備ヲ疊ミ、行軍ノ法ヲ以テ後操ノ地ニ至ル、其間、前ニ載スル所ノ賊、前及ビ左ヨリ來撃スルノ二様ヲ操ス、既ニ後操ノ地ニ至レバ則左ニ記スルガ如シ、

本營及ヒ歩隊ハ、物見ヶ岳前面ノ半腹ヨリ、嶺ヘカケテ備フ、砲隊銃隊ハ山下ニ備ヘ、本營ノ傍、砂砲ヲ備ヘ以テ危急ノ用トス、此レ賊剛強朝氣ノ銳ナル、未タ力ヲ以テ爭難キヲ以テ、諸隊皆賊ノ見ルヲ能ハザル處ニ安ス、楠公ノ宇都宮ヲ挫スルニ摸擬ス、而賊ノ來鬪フ、勝頼カ長篠ノ柵ニ向フガ如シ、於レ是本營貝鳴リ赤旗搖テ、砲隊ヲ繰出シ打放セシム、賊尙冒進スルヲ以テ、







ナレバ、激勵スレバ、大將ハ諸隊長ヲ誠命シ、隊長ハ諸伍長ヲ誠命シ、伍長ハ諸兵ヲ誠命ス、諸兵ハ伍長ノ誠命ヲ審聽シ、伍長ハ隊長ノ誠命ヲ審聽シ、隊長ハ大將ノ誠命ヲ審聽ス、是整治ハ激勵ノ効タルコト明ケシ、果シテ斯道ヲ行ハ、一旦賊ニ對スルノ急遽ニ處スベシ、且此事、愚豈徒ニ之ヲ謂ンヤ、亦之ヲ平素ノ事ニ驗ムベシ、武藝ヲ興シ、奢侈ヲ禁シ、偷安ヲ戒メ、苟免ヲ止ムル皆一理ナリ、且武藝ヲ興スニ就テ之ヲ陳センニ、其要トスル所賞ニモ在ラズ、賞數、スレバ人恩トセズ、又罰ニモ在ラズ、罰數、スレバ人威トセズ、唯士ト事ヲ共ニシ勞ヲ同スルヲ田單・巡・遠ガ如ク、精ヲ勵マシ思ヲ苦ムルヲ夫差・勾踐カ如クセハ、武藝ノ興隆スルヲ日ヲ刻シテ待ツベシ、請フ後ノ謂フ所ヲ驗ミテ、前ノ謂フ所ノ何如ヲ見ヨ、然ト雖モ、愚ガ謂フ所ハ急激ニ處スルノ道ノミ、豈更平素ニ設ルモノ無ランヤ、頭ヲ焦カシ額ヲ爛ラスノ事ハ、曲突薪ヲ徒スノ整暇ナルニ如カズ、遠謀アル者獨是ヲ知ルノミ、謹對、

操練當日之次第

(嘉永二年十月十日操習の豫定書)

一操練當日朝七ツ半時松本市明安寺境内相集り着到を調へ着到之調様役附并中軍に属する兵士尙諸備ハ各其隊長に相達し各隊長其手之人数を調へ中軍に相達せ人數相揃候上ニる斥候を先んし行軍之式ニる圓居ハ備ヲ離れ先に押し金鼓共ニ打ず羽賀臺に出張尤路筋最寄ニ住居之面々其處々ニ出浮居各其隊伍中に相加り候事

附り、病氣障り之面々右揃場所相屆候事

- 一行列之次第 第一大筒備二挺第二小筒備貳拾挺第三大筒備二挺第四短兵備三拾人槍把弓銃各其得武器所持第五大將之本營第六小筒備拾挺第七大筒備貳挺各次第を相定二行ニ押行候事
- 一羽賀臺の麓ニる金鳴り一應備を留免人馬の息を休め貝鳴り三旗を擧げ序の大鼓を打始一行ニ押行候事

- 一臺の上操練場に至り斥候還る敵間不レ遠由を報せ中軍鼓止金鳴り軍を留め使武者を以て諸備に下知し前ニ當る高陽之地を占め備を疊み貝鳴り三旗伏し諸備折敷候事
- 一此處にて斥候を出し第二の小筒備之内二伍を差添敵之様子を致ニ見分ニ歸り本營に注進せ此時斥候留る 本營貝を立て赤旗青旗白旗共ニ擧げ序の大鼓を打る諸備押行敵之様子相見へ候所に至り鼓止み金鳴り軍を留め本營使武者を差遣し諸備に受場を觸聞せ候事
- 一右使武者歸り候る本營貝鳴り三旗を擧げ序鼓し各其受場に押行候事
- 一但諸備之受場本營ニ西之松ニ備へ第一之大筒備を本營之左角に備へ第三之大筒備を本營の前ニ備へ第七之大筒備を本營之右角ニ備へ第二之小筒備を本營前之松間ニ置キ第六之小筒備を本營之後ニ置キ第四之短兵備を本營之右小低キ所に伏し候事
- 一諸備何れ其受場々々に相備候上本營ニる貝鳴り赤旗揺る破之大鼓を打ち三備之大筒進出る連放



して急之大鼓を打ち青旗左ニ向て振り松間ニ備居候小筒備大筒備通より少引退る左方ニ繰出し敵之右備を打つ白旗左ニ向けて振り短兵進て二組とあし一組ハ松之前砲の備へ一組ハ大筒備少引退右方ニ繰出し騎兵敵の備を駆亂し候時大筒備引取短兵一組其所ニ進み出松之前に備居候短兵一組右方ニ進み出て接戦を大鼓止み金鳴り候時諸備留る貝鳴り白旗磨して短兵引取青旗磨して小筒備引取赤旗磨して大筒備引取以前之備場の歸り候事

一右終りて使武者を第三之大筒備第六之小筒備に遣し松間の控居候様こと下知致置キ物見ケ岳迄斥候を先よして備を疊ミ押行第一大筒備貳挺第二小筒備貳拾挺五ノ目に第三短兵三十人十五人宛

二相貳挺第四大將之本營第五大筒備貳挺各次第を守り押行候事

一第三の大筒備二挺第六の小筒備西之松に残し置き物見ケ岳の本營と互ニ救應之便利ニ相備へ且其間之行軍を致シ警衛候事

一右行軍之時斥候歸りる敵左より寄來候由を報す仍る大鼓止み金鳴り行軍を留免貝鳴り赤旗左りよ向けて振り急之太鼓を打前後之大筒何も敵に向ひ打出し青旗左に向て振り小筒備左傍ニ五ノ目に相並ひ前列打放ち大將之下知よ依て自分之小筒滾打放ち鼓止み金鳴り軍を留免貝鳴り赤旗青旗共ニ磨し大筒小筒同しく已前之通に相備候事

一此時西之松に残置候大筒小筒共ニ打放し致シ救應候事

一右戦終り序鼓を打行軍之法ニる物見ケ岳の麓に至る斥候地形を見積り歸りる大將ニ報す鼓止み金鳴り軍を留免使武者を以て諸備へ備場を下知を本營ハ岳之頂ニ備短兵本營の前ニ備へ大筒小筒ハ岳の麓ニ備へ本營の傍ニ炮烙筒を備置候事

一右の通り備定り敵又寄來候ニ付炮烙玉を打放ち此處餘地無し之ニ付玉無しノ打放し操練終り候上別所ニ其式を相試候事本營貝鳴り

赤旗を振り破之大鼓を打大筒二備共ニ繰出し打放つ敵猶又近く押寄ニ依て急之大鼓を打青旗を振り小筒備を繰出し大筒の玉繼キを助く事既ハ急迫あるニ及んで砂砲を放ち其勢ニて短兵山より直ニ敵の横を突く此時諸備共ニ榮々聲ニる進候事

一此時西の松に残し置候大筒小筒共一同ニ打立て敵を驅立候大鼓止み金鳴り追討を止免列を整へ候事

一敵既ニ敗軍致し遠く逃行候へ共味方ニ備を堅免妄りニ追討せず本營貝鳴り三旗磨して序の大鼓を打大筒小筒短兵の諸備共歸る白旗伏して短兵止り青旗伏して小筒備止り赤旗伏して大筒備止る左候る本營山上より押下す三旗を振るを見て大筒小筒短兵之諸備各行軍之行を以前後之列ニ付最初之備場に押歸る貝鳴り赤旗青旗共ニ磨し西之松ニ残り居候大筒小筒備共ニ陣屋ニ歸り貝鳴り三旗伏し諸備折敷候事

一右備場ニて斥候を出し敵不殘致ニ敗走候様子詳ニ致シ見分ニ歸り候上関を三度作り貝を吹き嚴



を解き後技の終るを相待候事

一東の松ころ炮烙玉打方相試候事

一右終りる備場ころ貝鳴り三旗磨して諸備列を整へ序の押大鼓にて行軍之式を以て歸り羽賀臺を下り候る鼓止む是より最寄住居之る々大將に言上之上引取候儀勝手次第尤總勢之儀は列を不亂して明安寺迄歸り候上致三分散候事

(添書 嘉永二酉十一月操習之次第)

(十月の誤記か)

正月十一夜具

鄙文

伏乞

玉斧

吉田大次郎矩方

草稿

(紙表)

(家兄に與ふる書) (嘉永四年正月)

前次鯉魚、附以漢文誨音一通、其後、又投示詩文稿、皆命頑弟以指摘評論、膚淺鈍劣、非所敢當、蹶然退避耳、雖然、因是窃有欲復聞家長兄几下、併為請教之地者也、長兄仰則有父母、俯則有弟妹、出也官務紛冗、入也家幹錯綜、宜無靜坐念書作文之閑、而源々而出之、非篤好之至、安能如是哉、是以不遑問其辭之巧之否、常誇示人、嗚呼、篤好如此其至、則何為而不可成、矩方所望于長兄、非詩也、非文也、殆有下急且要焉者、夫當今之最急且要、而文人儒士蔑焉不省者、無如下教民稼穡、以致農勸民富之學、唯其急、故不獲遜讓以待他人、唯其要、故不可不拋棄他事、專心力于斯、況見今無省之者乎、苟以篤好之心、深講其術、博求其說、則后稷公劉雖邈乎、於所以勸農富民以固國本、未嘗無少補也、矩方嘗閱歐邏巴誌、往々學校、有教民子弟治產業、務中耕稼者、有山坑學校、教採鑛之術、有山林學校、講長育斫伐樹木之法、夷狄且用心如彼、奈何吾徒蔑焉不省、家兄以為如何、世之論者、莫不曰仁民愛物、莫不曰富國強兵、然農不勸、富強由何而得、民不富、仁愛將何在哉、勸農在教民、富民在稼穡、苟學道為國者、是獨可下東高閣置度外哉、幸長兄少加思焉、今昇平既久、二州之地、開墾畧盡、蓋稱無



復閑地矣、然種殖樹藝之方、或有未<sub>レ</sub>尽者、穀種藥材菓蔬之品、或有未<sub>レ</sub>備者、貯<sub>レ</sub>糧之制、救<sub>レ</sub>荒之備、乃至治<sub>レ</sub>水築<sub>レ</sub>堤、修<sub>レ</sub>道營<sub>レ</sub>田、凡可<sub>レ</sub>興<sub>レ</sub>民利者、勞及<sub>レ</sub>養<sub>レ</sub>蠶製<sub>レ</sub>紙、工作陶冶、凡可<sub>レ</sub>資<sub>レ</sub>民產者、其說其術、不<sub>レ</sub>一而足、或有未<sub>レ</sub>至、宜<sub>レ</sub>深講博求而極<sub>レ</sub>其至矣、頃與<sub>レ</sub>熊藩人<sub>レ</sub>交、觀<sub>レ</sub>其論<sub>レ</sub>農事、有<sub>レ</sub>大不<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>及焉、因作<sub>レ</sub>是說、望<sub>レ</sub>于長兄也、<sub>レ</sub> 矩方幼也生<sub>レ</sub>長畝之中、身親<sub>レ</sub>稼穡之事、與<sub>レ</sub>城市人<sub>レ</sub>言、未<sub>レ</sub>無<sub>レ</sub>寸長、但膚淺鈍劣、證<sub>レ</sub>之不<sub>レ</sub>深、求<sub>レ</sub>之不<sub>レ</sub>博、目局<sub>レ</sub>所<sub>レ</sub>視、意安<sub>レ</sub>所<sub>レ</sub>習、不<sub>レ</sub>能<sub>レ</sub>上<sub>レ</sub>下<sub>レ</sub>古今、參觀彼此、大有<sub>レ</sub>所<sub>レ</sub>發明、熊藩則不<sub>レ</sub>然、使<sub>レ</sub>通<sub>レ</sub>農事者<sub>レ</sub>經<sub>レ</sub>歷諸州、取<sub>レ</sub>捨所<sub>レ</sub>見、開<sub>レ</sub>局置<sub>レ</sub>吏、驗<sub>レ</sub>試所<sub>レ</sub>聞、此所以<sub>レ</sub>為<sub>レ</sub>不<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>及也、然均是人也、患<sub>レ</sub>不<sub>レ</sub>為<sub>レ</sub>耳、既<sub>レ</sub>為<sub>レ</sub>之、則何不<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>及、家兄豈亦有<sub>レ</sub>意乎、<sub>レ</sub> 夫求<sub>レ</sub>之博、必待<sub>レ</sub>取<sub>レ</sub>舍、講<sub>レ</sub>之深、必資<sub>レ</sub>驗<sub>レ</sub>試、家幸有<sub>レ</sub>田圃各若干、自<sub>レ</sub>今之後、九種殖樹藝之方、穀藥菓蔬之品、常有<sub>レ</sub>所<sub>レ</sub>取<sub>レ</sub>舍、而必資<sub>レ</sub>驗<sub>レ</sub>試于此、如何、<sub>レ</sub> 且聞<sub>レ</sub>之、民情樂<sub>レ</sub>常而厭<sub>レ</sub>異、是以<sub>レ</sub>凡事物非<sub>レ</sub>常所<sub>レ</sub>習見者、則必不<sub>レ</sub>樂<sub>レ</sub>為<sub>レ</sub>之、其頑固偏執、難<sub>レ</sub>強<sub>レ</sub>以<sub>レ</sub>辭與<sub>レ</sub>理、苟有<sub>レ</sub>一人為<sub>レ</sub>之、使<sub>レ</sub>彼見<sub>レ</sub>為<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>羨而不<sub>レ</sub>見<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>厭、漸<sub>レ</sub>誘<sub>レ</sub>披、不<sub>レ</sub>為<sub>レ</sub>局促急迫、初而隣里、而鄉党、推及<sub>レ</sub>闔國天下、是自然之機也、必先試<sub>レ</sub>諸我家若干田圃、亦可<sub>レ</sub>以<sub>レ</sub>為<sub>レ</sub>三州之師也、<sub>レ</sub> 為<sub>レ</sub>之有<sub>レ</sub>學、農桑種樹之書、至<sub>レ</sub>列藩及海外地誌風土記類、亦無<sub>レ</sub>非<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>以<sub>レ</sub>資<sub>レ</sub>考索也、購求借觀、窮<sub>レ</sub>力致<sub>レ</sub>思、無<sub>レ</sub>以<sub>レ</sub>搜索<sub>レ</sub>為<sub>レ</sub>勞、是祈、此矩方之區々所<sub>レ</sub>望<sub>レ</sub>于長兄也、<sub>レ</sub> 人必謂、治<sub>レ</sub>瑣屑之事、其志可<sub>レ</sub>鄙、且古今異<sub>レ</sub>轍、風土殊<sub>レ</sub>宜、講求十件、就<sub>レ</sub>中得<sub>レ</sub>行<sub>レ</sub>一件于二

州、今日亦難、其業可<sub>レ</sub>迂、夫指<sub>レ</sub>急且要者<sub>レ</sub>為<sub>レ</sub>鄙、姑不<sub>レ</sub>論也、若謂<sub>レ</sub>之迂、學者講<sub>レ</sub>求和漢古今之禮樂刑政、百中行<sub>レ</sub>一、猶病<sub>レ</sub>難、業之迂者、豈此而已哉、況拘<sub>レ</sub>于詩文、自以為<sub>レ</sub>不<sub>レ</sub>鄙不<sub>レ</sub>迂、矩方之固所<sub>レ</sub>非<sub>レ</sub>唉也、故曰、所<sub>レ</sub>望<sub>レ</sub>非<sub>レ</sub>詩也、非<sub>レ</sub>文也、殆有<sub>レ</sub>急且要焉者、幸以<sub>レ</sub>篤好之心、少加<sub>レ</sub>思焉、論之不<sub>レ</sub>當乎、因以賜<sub>レ</sub>教、幸甚幸甚、

頑弟矩方拜具

家伯教長兄

几下



未焚稿

貞

(采配問答)

采配持候物位總る人數何程迄才配ニ及間敷哉何人以上ハ采配ニテ無レ之ヲ難レ扱ト申事有レ之候  
 哉於ニ兵家ニ采幣御免ト申義ハ程之勳功有レ之候モノヨリ相渡候哉之事  
 一采幣ト分合聚散を委シテ進退行止を詳ニセる要器ニテ人數を預リ候衆ト所持不レ仕候ルハ其手  
 之兵士目を付る所無レ之人數扱不ニ相成ニ付北條流山鹿流等ニ侍大將足輕大將物頭物奉行ハ人  
 數何程マテハ采幣ニ及ス何人以上ハ采幣ニテ無レ之ヲ難レ扱ト申差別無レ之一統所持仕候様相  
 見候又六奉行ノ儀モ采幣持ビテ叶テ功少キハ名計リ之由相傳申候三嶋流ニモ侍大將足輕大  
 將ヲ大將ノ御免亦共所持之儀申ニ不レ及旗奉行ハ人數ハ不レ持トモ重キ職分故ニ所持仕組頭  
 是亦御免ありテ持ルキモノありト有レ之候采配御免之儀右組頭之御免ハ人數扱之役柄ニ所持  
 不レ仕ルハ不ニ相叶ニ付素々勳功ニハ不ニ相拘レ候得共古ヘ此等之役タル人ハ場數功者ニ勳功

有レ之事ハ不レ能レ申儀ニ可レ有レ之候六奉行功少キハ名計リト有レ之候ハ勳功ニ依ル御免之譯ト相  
 見候間如何様之勳功候テ御免ト申儀ト無レ之武邊場數を積ミ采幣所持之品位自然ト相備候上之  
 事ニテ一陣一度之僥倖を以テ拔群之功茂遂候連名望モ無レ之モノ、俄ニ差免候筋ニルハ決ル無  
 レ之候甲州家ニル小幡又兵衛十六歲河中島合戰之武功ニ依テ二十八歲ニル本ノ采幣免下サ  
 ル由甲陽軍鑑ニ相見候

御當家ニル采幣所持之物位古法ハ存不レ申候處右兵家之説ニ依ル相考候得モ只今ニテも總奉行  
 老中物頭等之儀ハ勿論所持仕組頭番頭ハ役義直様御免有レ之御旗奉行等ハ勳功ニ依ル御免有レ之  
 可レ然相見候組頭番頭采幣御免無ルモ不ニ相叶ニ訳ト敵ニ對シ備茂張り一手を別手ト致シ候節大  
 懸引ト本營ノ可レ有レ之候得共臨機之事ハ其手々々ニテ指揮を司リ候ニ人無レ之ルハ差當リ添筋  
 ニ相見候故組頭ト勿論番頭ニテも御免可レ被ニ仰付レ候御條目ニモ番頭之儀ハ組頭ニ相次テ之役  
 人たり組頭之欠目有レ之時者其役ニ替ル諸事可ニ相勤ニ段相見候得モ旁采幣御免可レ然事ニ候然處  
 此儀ニおゐテ區々之論モ可レ有レ之候得共總る人數之指揮ハ 君上より總奉行ノ御任せ被レ成大  
 都合ト皆總奉行之一心ニ有レ之其以下之諸役其意茂受繼ル取計仕候付ルト同列之モノたり共其  
 役ニ罷在其意を受繼ル下知をさせハ孰ル是ニ從モさらん哉モし是ニ從サレモ且モ總奉行ノ軍法  
 を傷リ且ハ 君上之御意ニ背ク訳ニ候縱令雖レ為ニ凡下之者ニ蒙ニ主命ニ下知をさせ一門之歴々



其外之貴族たり共謹る可相守其下知由御條目ニ相見候得と右様之論を起シ候ものぞ公儀を輕し免法を破る族にて候併生死存亡之境ニ臨み勝敗之機采幣之指揮ニ因る決候事ニ候得ハ萬一其器量も無レ之して其役儀ニ罷居候るそ其組之不心服と必然にて不和之基とも可相成哉難レ計ニ付右組頭番頭役座之儀実ニ重任之事候間此段得と御詮義可被仰付候事

中庸講義 (嘉永三年五月廿七日)

自道也者不レ可須臾離也、可離非道、至下莫見於隱、莫顯於微、故君子慎其獨也、  
 章意 此章、子思、孔子ヨリ傳ル所ノ意ヲ述テ、以テ道ノ一字發揮ス、而レ此條上文、性道教  
 テ云テ、重テ道ニ歸スルヲ承テ、道ニ入ル所以ノ方ヲ示ス、  
 字訓 道ハ猶往還ノ道ノ如シ、往還ノ道ハ、盲者覺者ト雖凡、亦由ルヲ得、而レ又力大膽壯  
 ノ人ト云凡、由ラサルヲ得ス、若シ由ラサレハ、或溝壑ニ轉シ、或ハ荆棘ニ迷ヒ、終ニ往  
 ント欲スルノ所ニ至ルヲ能ハズ、所謂道ナルモノ、何ソ是ニ異ナラン、日用ノ間、万事万  
 物之上ニ於テ、アラサル処ナシ、離レント欲ノ離ルヘカラス、離ルレハ決ノ濟スヲ得ズ、  
 是ヲ捨テ、ハ他ニ求ムヘキヲナシ、其物ハ則君臣、父子、兄弟、夫妻、夫婦、最モ大ナルモ  
 ノナリ、其事ハ則令共、慈孝、愛敬、和柔、慈聽、最モ大ナルモノナリ、他、動靜語默ノ小

ナルモノニ至ルマテ、在ラサル所ナシ、戒慎ハ敬ナリ、恐懼ハ畏ナリ、是未タ事ニ接セサル  
 ノ前、敬畏以テ内ヲ直シ、惰慢邪僻一毫ノ萌サマラシムルナリ、視聽言動ノ上ニ於テ、カテ  
 著ケテ把持スルニ非ズ、隱ハ暗処トテ、吾心ノ内ニ、カク行ン、カク言ント思念シテ、其  
 幾、既ニ動テ、未タ言行ノ表ニ著見ナラサルヲ云、微ハ細事トテ、事ヲ処シ言ヲ發スル際失  
 スルヲアリテ、其細微ナルヤ人ノ知ルニ及ハズ、吾カ心ノミ自ラ其失ヲ覺ルモノヲ云、獨  
 ハ人知ラサル所ニシテ己レ獨知ルノ地、即チ隱微ノ事是ナリ、

解義 上文、所謂道ナル者ハ、日用事物ノ上ニ在テ當サニ然スベキノ理ニノ、只瞬息ノ間モ  
 離レント欲メ得ヘカラサルモノ、一瞬息ノ間モ、是ヲ離ルレハ、人ニ接メ人乖キ、事ヲ  
 処メ事悖ル、果ノ須臾ノ頃モ離ルベカラサルナリ、若シ離ルルモ亦人ニ接シ事ヲ處スベク  
 ハ、是レ離ルベキナリ、誠ニ如レ是クンバ、是レ道ニ非ズ、唯其然リ、是ヲ以テ、作聖ノ功  
 テ勤ムルノ君子ハ、睹サル聞サルニ當テ、少シモ戒慎恐懼ノ心ヲ放サズ、心ノ徳ヲ常ニ全  
 メ、事ニ臨テ或ハ乖悖ヲ生ゼサラシム、蓋シ事物ノ來ル、時ナク方ナク、測ルベカラザルヲ  
 以テ、預メ備テ是ヲ待ツノミ、且夫幽暗中ノ念ヨリ著見ナルハナク、微細ノ事ヨリ顯明ナル  
 ハナシ、豈慎マザルベケンヤ、其理如何ト云フニ、其幾ヤ隱、其跡ヤ微、人ノ知ラサル所ト  
 雖凡、己レ既ニ是ヲ明知ス、凡事固ヨリ過愆ニ出テ、其幾見レ其跡顯ニメ、人はヲ知ルト雖



(以下は初稿ならむ)

凡、己レ却テ知ラサルモノアリ、此ヲ以テ彼ニ比セハ、隱微豈ニ著見明顯ノ至ナラザランヤ、是レ君子既ニ常々敬畏シ、又是ニ於テ其獨ヲ慎シム所以ナリ、餘論 此章ノ論、學者ニ於テ最モ切ナリトス、而ノ思ヲ致サル時ハ、蠟ヲ嚙ムノ味無カ如シ、大凡書ヲ讀ミ道ヲ学フモノ、孰カ道ハ須臾モ離ルヘカラズト云サラン、孰カ戒慎恐懼慎獨ト云サラン、然レ凡唯是ヲ口ニ誦スルノミ、曾テ道果何如、高ルヘカラザル所以又何如、戒慎恐懼慎獨何如ヲ思ハス、書ヲ看ルコト如レ此、聖人ノ言ト雖凡何味カ之有ン、初メヨリ心ニ思ハズ、故ニ躬ニ行ハズ、思ハズ行ハズ、言ヲ易フスル所以ナリ、苟モ之ヲ思ヒ之ヲ行ハ、何ゾ其言ヲ易フスルコト得ンヤ、言ヲ易スル者ノ弊、或ハ記誦辞章ニ流レ、或ハ浮華文柔ニ溺レ、實行実徳ナクシテ、妄ニ自ラ尊大シ、長上ヲ輕蔑シ、等輩ニ傲慢ス、是ニ由テ武人ノ侮リヲ致シ、俗吏ノ侮ヲ招キ、天下不学ノ徒ヲ擧テ、其心ニ不平ナルニ至ル、固ヨリ武人俗吏不学ナレバ、其学フ所以ノ失スルヲ不知シテ、答ヲ書ト道トニ帰ス、可ニ勝嘆一カナ、有志ノ士、寧ロ思ヲ是等ノ章ニ致サ、ルヘケンヤ、方今治教休明、学政以張ル、操觚策ノ士、皆斯道ヲ以テ己カ任トス、然レ凡俗習ノ弊其來ルコト久シ、遽ニ變シ難シ、必ヤ英雄豪傑ノ士、學者ノ唱ヲナシ、學者講習討論、必躬行心得ニ本ケ、文字章句ノ拘ヲナサズ、策ヲ発シ士ヲ試ムル、理勝ヲ論実ニメ、世教ニ補ヒアルヲ取り、造語ノ工ヲ必トセス、士ヲ選舉ス

ル、恬退沈重、剛毅木訥ヲ進メテ、舌辯辞巧、動止恰便ナルヲトラズ、亦習弊ヲ變スルノ一端トイフベシ、人ヲ治メ人ヲ教ヘ、及ビ上ニ事ヘ道ヲ学フモノ、念々此ニ在ラハ、言ヲ易スルノ患ナクシテ、聖賢ノ道世ニ明ニ、道ヲ離レサルト、戒慎恐懼慎獨、人々行之、何唯之ヲ口ニ言ノミナラン、不レ然學亦芻蕘ナルカナ、

右嘉永三年庚戌五月廿七日文學上聽被召出候節ゆせり候講義ニる候身不肖之段奉恐入候  
吉田大次郎誌

(銃士の扱方)  
砲道或問ニ云、五人ヲ一伍トシ、伍五ヲ一隊トシ、銃丸不足シハ、銃ヲ以テ拒キ難シ、故テ伍五ヲ組テ、前伍トシ、後伍トシ、相繼テ打出ス、如レ此ナル時、五連發ノ暇ヲ得テ、玉員極ラズ

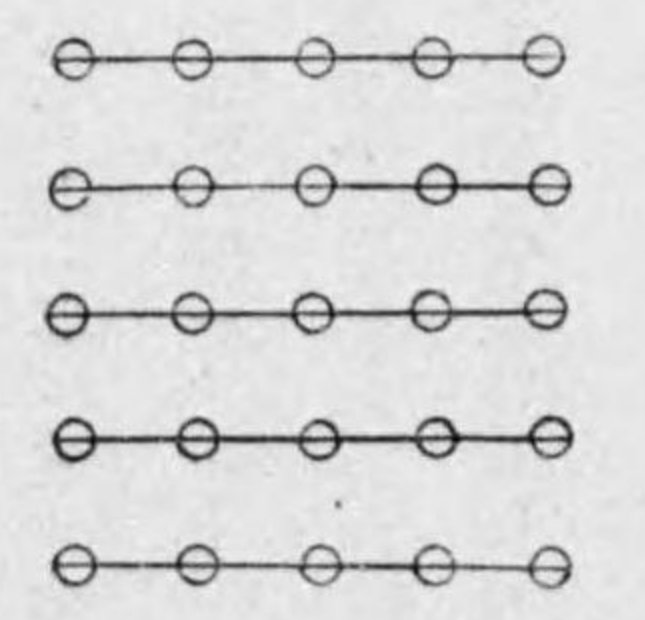
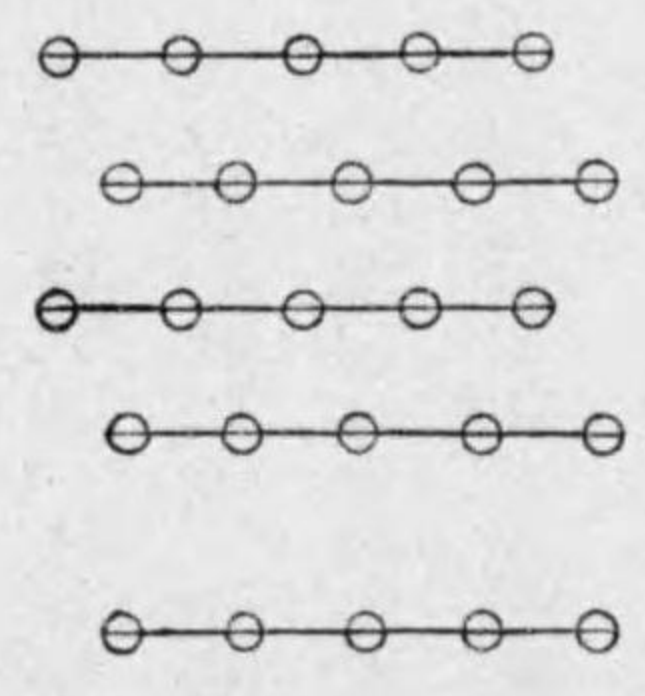
凡ソ銃士ヲ扱フニ、伍長眞先ヲ懸レハ、敵ノ的ト成リテ、銃丸必雨ノ如ク聚ル、是無益ノ大死ナラズヤ、又之ヲ厭フテ後ヨリ指揮スレバ、銃士ノ心、丸ヲ放ツニ專一ナレハ、伍長ノ指揮ニ違フ、伍長ノ指揮ニ專一ナレハ、丸ヲ放ツコト得ズ、其心得何如、答云、伍長ハ銃士ノ後ニ在ルベシ、伍長 凡ソ銃隊ノ伍法、五人伍ヲ以テ常トス、之ニ一人ノ長有リテ、備ヲ立ル時ハ、五人一字形ニ列シ、其眞後ニ伍長立ツ、伍長ハ只管五人ノ銃士ヲ坐作進退セシムルコト掌ルノミ、故ニ人別ヘ口ヅカラ授ク凡亦甚煩キニ非ス、況ヤ鞭策ト扇子トハ、平士ノ常ニ手ニスル者ナルヲヤ、平士采ヲ持スルノ義ナシ、故ニ云爾、且坐作進退ハ常度有リ、銃士タルモノ畧知ルベシ、故ニ銃士預メ指



揮テ俟チ居ルヲ以テ、令ニ從フヲ難カラズ、夫レ五人ヲ前ニ立テ、一人後ヨリ之ヲ指揮スルヲ、  
 警、猶僕夫ノ六轡以テ四馬ヲ馭スルカ如シ、之ヲ驟シ之ヲ馳シ、我馳驅ヲ範スルヲ、僕夫ノ心ニ  
 在リ、何ヲ難之レ有ン、而ゾ、伍長ハ指揮ヲ隊長ニ受クルニ、伍長ハ自身銃ヲ打ズ、只五人ノ指揮  
 ナノミ事トス、是ヲ以テ前後ヘ心ヲ配リ、左右ヘ目ヲ使フヲ總テ自在ナリ、故ニ隊長ノ指揮ニ於  
 ケルモ、更ニ見誤ルヲ有間鋪キ也、如レ此ナレハ、エリ打畧免レン、指揮畧通セン、故云、伍長  
 ハ銃士ノ後ニ在ルベシト、虛妄ノ鄙見具シテ以テ老練ノ士ニ質シ、伏テ雌黃ヲ乞フト云、

吉田大次郎頓首

シテ打ツ時ハ、  
 宜敵ヲ拒ツテハ、  
 ン、伍五ノ進退  
 分合ハ、隊長ノ  
 指揮ニヨルナレ  
 氏、本文ノ如ク、  
 銃士モ預メ心得  
 テ令ヲ俟チ居ル  
 進退自由ヨリ其  
 ノ意ノ如ク隊長  
 備シ、然レ隊長  
 リハ、前後ニ在リ  
 指テ、銃士自ラ  
 指テ、銃士自ラ  
 本、文、問、ニ、云、  
 猶、豫、ス、ル、人、馬、ノ、動、搖、ス、ル、音、ニ、テ、  
 響、キ、ス、人、馬、ノ、動、搖、ス、ル、音、ニ、テ、  
 首、ニ、違、フ、ト、有、ル、ベ、シ、最、練、兵、ヲ、撰、ム、伍、長、又、次、レ、之、此、法、極、テ、是、ナ、ラ、ン、然、レ、隊、長、ノ、坐、作、ニ、於、テ、ハ、又、窮、ス、ル、處、有、リ、前、断、心、得、如、何、(他、筆)



○ 伍長  
 ○ 伍尾

習練場ノ法

(英船醫泊の報告書)

閏四月八日晴

午刻白帆船見出し注進有レ之御達ニ付早速御番所ニ出張與力同心一同乗船沖手八里程乗出し直ニ  
 異船に乗移候處インキリス軍船之由ニ蘭語不レ通無レ程乗組人數之内ニ通事ト唱ヘ梅阿多ト申セ  
 の参り日本話ニ浦賀御役人様皆々御苦勞ト申述一禮之上始末申出候出役之人々も大ニ仰天渡來  
 之次第等追々相尋候處ニケ年已前英國出船唐國琉球日本之地ニ為ニ見舞ニ遠海乗渡候付るニ浦賀鎮  
 臺目通いし度猶上陸土地一見致度段申出右阿多儀ハ西洋之服飾ニる候ヘ共唐國乍浦出生之  
 由父久敷日本に通商して幼少之砌ニ日本話西洋話を教ヘ相心得居候段申出ル外ニ廣東人壹人乗組  
 居候由阿多申聞候付早速呼出し通辯いし候處陳合威ト申セのニる廣東滯船中人數賄方等加勢致  
 吳候様被ニ相頼ニ乗組罷在候内同所ニ四月廿六日出船直ニ御當地ニ致ニ着船ニ西洋話不ニ心得ニ右阿  
 多ノ諸事差圖を請候段申出候船ニ極小形ニる長サ二拾間幅五間位大筒左右ニる拾貳挺參ん筒壹人  
 前壹挺宛人數百拾人乗翌九日滯船水菜等賞請候付御渡方相成十日午上刻無ニ異義ニ出船國法犯し候  
 義ハ聊無レ之御奉行ハ御番所迄御出馬尤繫り場所ハ平根ト申處御臺場前ニ碇り付申候目通り上陸  
 才御聞濟不ニ相成ニ候事



腰刀ノ事

腰刀ハ身ヲ護リ敵ヲ殺スノ要器ニシテ、忠誠英武ノ人、精神ノ寓スル処ナリ、学者斯ニ注意セズンバアルベカラズ、太平ノ久シキ、士人ノ心懸日ニ以テ輕薄、肝要精神ノ寓スル所ヲ以テ、直ニ視テ玩物トナシ、土器、画軸、金銀銅鐵ノ諸雜器ニ伍シ、新旧ノ辨眞贋ノ撰、好惡利鈍ノ觀察ニ至テモ、一種ノ徒事ト相成リ、剩サヘ、鐔、縁頭、及ヒ三所物ト稱スルモノ、如キニ至ルマデ、種々ノ職工(職カ)華飾ヲ設ケ、數金ヲ費スニ至ル、無益ノ甚敷モノニ、他力量人ニ過タルニモ非ス、其術ニ練レテ利害ニ辨タル所アルニモ非スノ長刀ヲ佩ブルノ類、亦可レ怪ノ甚敷モノ也、所謂玩物トスルモノ、豈誣言トセンヤ、曾テ老輩ノ説ニ聞クコトアリ、曰、刀ハ敵ヲ薙殺ス鐵棒ト心得ヘシ、又曰、陣刀餘リキレヲモ頼ヘカラス、第一折レ曲ラザル刀ヲ用ユベシ、又曰、百貫ノ刀一腰持ツ、國ノ要ニ非ズ、一貫一腰ノ刀ヲ百腰持ツノ祐(コソ)、宝タルニハ如カズ、是等ノ諸説ヲ湊合シテ、其要ヲ攬ラバ、玩物トスルノ弊免ルヘキニ庶幾カラシカ、若シ玩物トセズンバ精神ヲ寓スルノ説、亦聞クコトヲ得ヘシ、且夫、小祿ノ士、其入ルヲ計ル時ハ僅々ナルノミ、武備ノ事、第一人馬、其外甲冑弓銃刀槍馬具陣具ノ諸項ニ至ル迄、石高ニ應シテ備ヘスンハアルヘカラス、日用ノ事、宮室衣服飲食諸物ニ至ルマテ、口數ニ當リテ用イサルヲ能ハス、然レハ、可レ成丈ハ冗費ヲ省クコト、武備ヲ整ヘ日用ヲ給スルノ根本ナリ、痛ク華飾ヲ削リ、實用ニ帰スベシ、且夫、玩物ノ

志ヲ奪フコト、古人既ニ之ヲ云フ、今腰刀ニ華飾ヲ尽スノ人、却テ異変ニ臨マハ、此器ヲ提ケ、天晴可レ立御用トノ誠忠英武ハ、決シテ乏シキ者也、此豈玩物タルコトヲ免カレンヤ、今腰刀ヲ造ント欲ス、先其大意ヲ述スト云、

(異國船に對する警戒の藩令書)

異國船渡來之節御手當之義兼る嚴重被ニ仰聞ニ義候處當節對馬國壹岐國肥前國平戸沖等追々令ニ通船ニ猶又此度隱岐國令ニ渡來ニ於ニ彼地ニいハ、敷所行も有レ之御國北浦海岸最寄之方角ニも候ヘシ御家來中末々ニ至迄別る無ニ油斷ニ相心懸候様被ニ仰付ニ候此段内意被ニ仰付ニ候事  
右之通組支配中ニ被ニ相觸ニ候事

酉二月

天保十三寅年從ニ 公儀ニ被ニ仰出ニ候寫

異國船渡來之節無ニ二念ニ打拂可レ申旨文政八年被ニ仰出ニ候然處當時萬更御改正ニる享保寬政之御政事ニ被レ復何更ニよらす 御仁政を被レ施度との難レ有 思召ニ候右ニ付るハ外國之者ニるも逢ニ難風ニ漂流等ニる食物薪水を乞候までニ渡來候を其事情ニ相分ニ一圖ニ打拂候るニ萬國ニ被レ對



候 御處置とも不<sub>レ</sub>被<sub>二</sub> 思召<sub>二</sub>候依<sub>レ</sub>之文化三年異国船渡來之節取計方之義<sub>二</sub>付被<sub>二</sub> 仰出<sub>二</sub>候趣<sub>二</sub>相復し候様被<sub>二</sub>仰出<sub>二</sub>候旨異国船と見請候ハ、得<sub>レ</sub>様子相糺食料薪水等乏しく歸帆難<sub>レ</sub>成趣<sub>二</sub>候ハ、望之品相應<sub>二</sub>與へ歸帆可<sub>レ</sub>致旨申諭尤上陸ハ為<sub>レ</sub>致間敷候併此通被<sub>二</sub> 仰出<sub>二</sub>候<sub>二</sub>付<sub>レ</sub>ハ海岸防禦之手當ゆるかせ<sub>二</sub>致シ置宜<sub>レ</sub>と心得違又ハ猥<sub>二</sub>異国人<sub>二</sub>親<sub>レ</sub>候儀等ハ致すましく筋<sub>二</sub>候警衛向之儀ハ彌嚴重<sub>二</sub>致し人数并武器之手當等之儀ハ是迄<sub>レ</sub>も一段手厚ク聊<sub>二</sub>も心弛<sub>レ</sub>無<sub>レ</sub>之様相心得可<sub>レ</sub>申候若異国船<sub>レ</sub>海岸之様子<sub>レ</sub>をうかかひ其場所人心之動靜を試候<sub>レ</sub>為<sub>レ</sub>杯<sub>二</sub>鉄炮<sub>二</sub>を打<sub>レ</sub>け候類可<sub>レ</sub>有<sub>レ</sub>之哉も難<sub>レ</sub>計候へ共夫等之事に動搖不<sub>レ</sub>致渡來之事實能々相分り御憐恤之 御主意貫き候様取計可<sub>レ</sub>申候さ<sub>レ</sub>共彼方<sub>レ</sub>乱妨之始未有<sub>レ</sub>之候歟望之品相與へ候<sub>レ</sub>も歸帆不<sub>レ</sub>致及<sub>二</sub>異儀<sub>二</sub>候ハ、速<sub>二</sub>打拂臨機之取計<sub>二</sub>ハ勿論之事<sub>二</sub>候備向手當之儀ハ猶追<sub>レ</sub>相達候次第も可<sub>レ</sub>有<sub>レ</sub>之哉<sub>二</sub>候文化三年相觸候趣書留<sub>二</sub>可<sub>レ</sub>有<sub>レ</sub>之候得共<sub>二</sub>心得<sub>二</sub>別紙<sub>一</sub>

七月

文化三寅年

先達<sub>レ</sub>おろしや船長崎<sub>レ</sub>渡來致し通商等之儀(下文圖)

(文化三年文書の斷片)

(守水彌右衛門に與ふる書)

此度御手當御内用懸<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>為<sub>レ</sub>蒙<sub>二</sub>仰付<sub>二</sub>候處御不平之趣有<sub>レ</sub>之御退藏被<sub>レ</sub>成度之由甚以不<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>然儀と存候<sub>二</sub>付意見之所左之通相陳申候此段御採納被<sub>レ</sub>成候ハ、國家之幸甚と存候尤不當之論<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>有<sub>レ</sub>之候得<sub>レ</sub>其段書面を以<sub>レ</sub>御諭被<sub>レ</sub>成候様奉<sub>レ</sub>存候事

一身茂保<sub>レ</sub>る<sub>レ</sub>亦哲人之所<sub>二</sub>為<sub>二</sub>候得者<sub>二</sub>亦省<sub>レ</sub>とむして不<sub>二</sub>相叶<sub>二</sub>事<sub>二</sub>奉<sub>レ</sub>存候然處今之時<sub>二</sub>當<sub>二</sub>て御退藏被<sub>レ</sub>成候ハ身を保<sub>レ</sub>る<sub>二</sub>似<sub>二</sub>て大<sub>二</sub>身を害<sub>レ</sub>し惡<sub>レ</sub>を受<sub>レ</sub>る<sub>二</sub>基<sub>二</sub>可<sub>レ</sub>有<sub>レ</sub>之候何とあれ<sub>レ</sub>木原氏其外諸官員御出勤を勸<sub>レ</sub>免<sub>レ</sub>さる<sub>レ</sub>ハあし又平日之御懇意間兒玉氏等迄御出勤を勸<sub>レ</sub>免<sub>レ</sub>さる<sub>レ</sub>ハあし然<sub>レ</sub>も一向御承引無<sub>レ</sub>之候得者人皆倦<sub>レ</sub>且怒<sub>レ</sub>終<sub>レ</sub>他日之害<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>相成<sub>二</sub>儀<sub>二</sub>と眼前<sub>二</sub>と存候事

付<sub>レ</sub>衆人之内或<sub>レ</sub>勸<sub>レ</sub>免<sub>レ</sub>或<sub>レ</sub>止候得<sub>レ</sub>其得失俄<sub>二</sub>斷<sub>二</sub>し難<sub>レ</sub>候得共只今<sub>二</sub>て<sub>二</sub>異口同談勸<sub>レ</sub>免<sub>レ</sub>さる<sub>レ</sub>と無<sub>レ</sub>之候然れ<sub>レ</sub>是自ら衆議公論<sub>二</sub>と相見申候間<sub>二</sub>三人占<sub>二</sub>へ<sub>二</sub>二人之言<sub>二</sub>從<sub>レ</sub>ふ之義御勘合被<sub>レ</sub>成度と存候事

一木原氏<sub>二</sub>と貴意不<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>為<sub>レ</sub>合段<sub>二</sub>と其幾<sub>二</sub>之伏<sub>二</sub>する味者<sub>二</sub>之知<sub>レ</sub>ず凡智<sub>二</sub>之測<sub>二</sub>らざる所<sub>二</sub>候得者<sub>二</sub>未<sub>二</sub>其事<sub>二</sub>顯<sub>レ</sub>る<sub>レ</sub>、ものを見<sub>レ</sub>ず只今<sub>二</sub>之貴慮<sub>二</sub>或<sub>レ</sub>推察<sub>二</sub>ニ過<sub>レ</sub>る鬼<sub>二</sub>を一車<sub>二</sub>ニ載<sub>レ</sub>る<sub>二</sub>之類<sub>二</sub>ニて<sub>二</sub>無<sub>レ</sub>之哉<sub>二</sub>と愚案仕候何卒御出勤被<sub>レ</sub>成候<sub>レ</sub>胸中之蘊<sub>二</sub>を吐<sub>レ</sub>出<sub>レ</sub>し其採用<sub>レ</sub>哉否<sub>二</sub>を以<sub>レ</sub>其顯<sub>レ</sub>る<sub>レ</sub>、處御驗被<sub>レ</sub>成可<sub>レ</sub>然存候事一道飯<sub>二</sub>二氏惣括<sub>二</sub>之事強<sub>レ</sub>る憂<sub>二</sub>る<sub>二</sub>事無<sub>レ</sub>之<sub>二</sub>と存候故<sub>二</sub>と彼惣括<sub>二</sub>と雖<sub>レ</sub>も相互<sub>二</sub>ニ是非得失<sub>二</sub>之論辯<sub>二</sub>仕苦敷事<sub>二</sub>と無<sub>レ</sub>之<sub>二</sub>二氏既<sub>二</sub>ニ西洋術<sub>二</sub>を以<sub>レ</sub>る自ら信<sub>レ</sub>居候得<sub>レ</sub>必<sub>レ</sub>尊意<sub>二</sub>ニ從<sub>レ</sub>む<sub>二</sub>是<sub>二</sub>ニ於<sub>レ</sub>る兩端<sub>二</sub>を以<sub>レ</sub>る相試



之候ハ、優劣相定リ可申候若シ二氏自ら執ル所を捨て尊意ニ從ハ、名ヲ總括ト云共其實無レ之ニ至リ久シル其善惡を辨知セる人可有レ之と存候事

一天下之事何ニ依テ十分之得意ト甚難ト事ニテ千歳一遇ト可申候然処今時ニテハ何程不幸ニテも二三分之御志ト遂申テ往時亦介氏ヲ為ニ屈抑セラレシニ較テ候得テ天地懸隔ニテ同年之論ニテ無レ之様ニ存候御勘合可被レ成候事

一御手當一件成就致間敷トの御推察ト成程其理も可有レ之候然處此儀ニ付ルテ諸輩十分之精力盡シ候ル事相濟ル候上ニ明哲之人有ル未全之所を氣付候ハ、格別ニ候得共術ニ拙キ者ト其自ら為ス所を以ル既ニ善を尽スト思可申ニ付成就セズ逆終ニ匙を投モル之時ト決有レ之間敷候然レモ只今御出勤被レ成十一を千百之中ニ御補む被レ成候ルも亦御忠節ト可申ト存候且国用を糜シ人力淺費シ其事之成ざるを傍觀シルテ其跡ニテ己ガ衆ニ殊絶モル所を現さんトの儀ハ不忠ニ相當リ君恩ニ對シ候御處置共難ニ相見平日之御忠懇之意ニモ相背候様被レ考候間此段得テ御思處可被レ成候事

付此間森休太郎一件ニ付ルテ本藩之恥辱ヤモ可相成一段殊ノ外御心被レ為レ用候御忠志深く感心仕候然處御手當之儀ト恥辱ト更アリ安危存亡之機ニ相關リ候事成ルニ惣然ヤして曾テ御心ニ不レ被レ為レ懸段ト前後不合之様相考落着不レ得仕候事

一惣シル嫌隙之起リ候ト或モ疑念ヲ生シ候様之事も有レ之もの候得テ一先至誠之赤心淺以テ御忠節御勵ミ被レ成可レ然候左候ル彼尙物我之隔を立て候ハ、天運ニテ人力ニモ難ニ相叶レ候間何分共ニ至誠神を感テ況ヤ有苗を哉之儀御勘合可被レ成候事

八月

吉田大次郎拜具

右ニ守永彌右衛門御手當懸リを斷候節與ヘ候書面ニテ候事

讀ニ武教全書 (嘉永二年)

歴ニ覽古今之書、涉ニ獵和漢之跡、可レ謂レ博矣、精則未也、推ニ究奧妙、分ニ析毫釐、可レ謂レ精矣、博則未也、博而不レ精則冗、精而不レ博則陋、無レ識而徒學、所ニ以爲レ冗也、有レ識而不レ學、所ニ以爲レ陋也、故學識二者有レ所ニ偏廢、精與レ博必有レ所ニ不足、果然則冗耳、陋耳、自レ古諸家之傳、必有ニ其統、使レ學者得テ求ニ其緒ニ而依ニ其統、以免レ夫冗、竊觀ニ先師管仲雄備集、亦不レ過ニ此意ニ耳、而及ニ其著武教全書、用意之周備悉備、大過ニ於前人、故自序レ之曰、撫ニ其要、詳ニ其事、唯其要是撫、故事可ニ得而詳、請具論レ之、如ニ雄備集、小大精粗、無レ所ニ不レ備、國政軍務、隨讀隨解、一部之所ニ記載、無レ待ニ考於他書、適得レ免レ為レ冗、更爲ニ陋所ニ陷、雖ニ是爲ニ學者之罪、抑亦常情之所ニ不能レ免也、至ニ于全書、則舉ニ其綱ニ而遺ニ其目、言ニ其一ニ而包ニ其二、曰、知



人而已，曰，明賞罰而已，至于如曰，何如是謂知，何如是謂明，何以知之，何以明之，引而不發，志而不詳，學者熟讀玩味，猶茫乎無知其畔岸，於是乎歷覽古今之書，涉獵和漢之跡，然後得下以啓其蒙，通其塞，及其蒙啓塞通，則既不陋，而又不冗，吾故曰，用意之周備悉備，大過於前人。

又

先師之著述，蓋用意之周備悉備者也，而學者乃粗率忽略以視之，何以能通其意哉，孟子有云，勿忘，勿助長，是足以悟讀法，全書之文，簡奧幽深，求之失於急迫，則其說至于鑿空妄言以欺人，思之失於疎淺，則其說至于滅裂鑿塗以自誣，欺人者其弊也賊，助長之所致也，自誣者其弊也愚，忘之所致也，不助不忘，是為善學，曰，學何如而可不助不忘，曰，泝源者必由其流，升堂者必由其階，由其道則雖遠可至，由其統則雖繁可理，故學者之務，莫急于知流階道統果何在，而審所以由焉，吾嘗竊通考先師之旨，學者之弊，而知講習之自有次序，遂大別其業為三等，初講全書以知其要，發其端，推擴之久，思辨之勉，疑惑塞胸，中則博學厚積，泛濫浮著，推擴之至，思辨之熟，其疑日以解，其惑日以辨，終復湊合衆緒，分別異同，貫于一，復于初，是為學之極功，非得流階道統而由之，安

能至于是哉，故苟講習之有次序，則由是而學，由是而進，由是而得，不期然而然，無復藉勉強作為，渾々然其天，怡々然其順，譬如和風甘雨生長化育萬物而不可遺，苟使學者優游厭飫于此間，日長月化，無不自知其所以，吾由是信講習之自有次序，夫創一家之學，可傳天下後世者，其人知見學力，豈尋常哉，則垂統設教，皆有深理而在焉，而世之師生末學，不深察長思其意之所在，指目家學授受以為陋，何其粗率忽略之甚也，亦何以知其用意之周備悉備哉。

五層陣論 (嘉永二年)

兵家五層陣法，一曰，輕卒弓銃，二曰，輕卒長槍，三曰，兵士，四曰，旗幟，五曰，騎馬，蓋淵源甲越之時云，嗟戰之理盡焉矣，是所下以齊勢力而一之也，凡人各有其所長，有所短，取捨短長，類聚部分，以用之，自古而然，何則不取捨短長，猶鎗刀為銛，不類聚部分，猶倒持鐵錐，故尚父之論練士，有冒及，陷陣，勇銳，勇敢，寇兵，死鬪，死憤，必死，勵鈍，倖用，待命之目，而吳起亦有軍命堅陣之說，甲越之所用，兵家之所傳，未嘗無此也，古之輕卒，多募田野無賴，山林獵夫，而其出處率同，則氣性膽力亦無大相過，而所執之弓銃長槍，其制皆同，隊伍制度亦同，而驅之奮鬪，於是長短齊，而勢力一矣，至于士，則



或譜第而世襲、或拔擢于卒隸、或起用于編民、材武出衆者而用之、稟祿有<sub>二</sub>多少、蓄卒有<sub>二</sub>衆寡、有<sub>二</sub>丁壯、有<sub>二</sub>老弱、雖<sub>二</sub>刀槍其所<sub>二</sub>專用、又有<sub>二</sub>兼用弓銃<sub>一</sub>者、其人萬殊、不可<sub>二</sub>得而齊<sub>一</sub>、古人知<sub>二</sub>其不可<sub>二</sub>齊也、以<sub>レ</sub>不<sub>レ</sub>齊而齊<sub>レ</sub>之、乃所以深齊<sub>レ</sub>之也、令<sub>二</sub>其長以衛<sub>レ</sub>短、短以佐<sub>レ</sub>長、短兵長用、長兵短用、若<sub>二</sub>号<sub>二</sub>一番槍、一番槍、槍脇、槍下<sub>一</sub>者、皆所以致<sub>二</sub>其齊<sub>一</sub>也、要<sub>レ</sub>之輕卒以<sub>二</sub>器械<sub>一</sub>齊<sub>レ</sub>之、兵士以<sub>二</sub>運用<sub>一</sub>齊<sub>レ</sub>之也、近時砲技漸精、加以<sub>二</sub>西洋之新術<sub>一</sub>、其彈之及<sub>レ</sub>遠穿<sub>レ</sub>堅、非<sub>レ</sub>復古弓銃云者之比<sub>一</sub>也、是以砲銃與<sub>二</sub>刀槍<sub>一</sub>、長短大異、不可<sub>二</sub>相伍以相保<sub>一</sub>、乃不可<sub>レ</sub>齊者極矣、不可<sub>レ</sub>齊者極、而以至<sub>二</sub>于可<sub>レ</sub>齊<sub>一</sub>、是有<sub>レ</sub>待<sub>二</sub>于後人<sub>一</sub>也、其法不<sub>レ</sub>拘<sub>二</sub>士有<sub>二</sub>幾名<sub>一</sub>、必四分爲<sub>二</sub>砲銃步騎<sub>一</sub>、各取<sub>二</sub>其所<sub>一</sub>長、而編<sub>レ</sub>之若<sub>二</sub>輕卒<sub>一</sub>、其編法仍<sub>レ</sub>古、而或奇或伏、其用則存<sub>二</sub>于人<sub>一</sub>矣、夫制度器械、有<sub>レ</sub>古有<sub>レ</sub>今、有<sub>レ</sub>我有<sub>レ</sub>彼、故吾所<sub>レ</sub>取<sub>二</sub>于甲越<sub>一</sub>者、非<sub>レ</sub>形、用也、非<sub>レ</sub>用、法也、非<sub>レ</sub>法、理也、凡形能通<sub>二</sub>于理<sub>一</sub>者、由<sub>レ</sub>理生<sub>レ</sub>法、由<sub>レ</sub>法生<sub>レ</sub>用、由<sub>レ</sub>用生<sub>レ</sub>形、何必刻<sub>レ</sub>舟守<sub>レ</sub>株之爲<sub>レ</sub>哉、眞能知<sub>レ</sub>是、長短可<sub>レ</sub>齊、勢力可<sub>レ</sub>一、器械制度雖<sub>レ</sub>異、其理則今猶<sub>レ</sub>古也、學<sub>レ</sub>兵者、求<sub>二</sub>其理何如<sub>一</sub>而已、

余之持<sub>二</sub>此論<sub>一</sub>久矣、未<sub>レ</sub>有<sub>レ</sub>所<sub>二</sub>質正<sub>一</sub>焉、辛亥之夏、來<sub>二</sub>東武<sub>一</sub>、入<sub>二</sub>素水山鹿先生之門<sub>一</sub>而學、稍稍得<sub>レ</sub>與<sub>二</sub>聞其說<sub>一</sub>、自喜<sub>二</sub>向所<sub>一</sub>持不<sub>二</sub>大誤<sub>一</sub>矣、頃日先生出示<sub>レ</sub>著練兵說畧一卷、命<sub>二</sub>序余<sub>一</sub>、沈潛反復益自喜矣、但淺劣晚生、妄題<sub>二</sub>蕪辭<sub>一</sub>、恐無<sub>レ</sub>中<sub>二</sub>所<sub>一</sub>命之意、及<sub>二</sub>懇辭不<sub>レ</sub>得<sub>レ</sub>命、錄<sub>二</sub>初所<sub>一</sub>自喜

(嘉永四年云云の十五字原本にはない、今吉田氏の松陰先生遺著によりて補ふ)

(この書は草稿、成文は未焚稿にある)

為<sub>レ</sub>序、若夫著作所<sub>レ</sub>由、長原・宮部<sub>二</sub>序在焉<sub>一</sub>、吾亦何言哉、嘉永四年辛亥十一月江戸客中追記、

與<sub>二</sub>葉山鎧軒<sub>一</sub>書

兵法

月日、吉田矩方再拜白、僕襲<sub>二</sub>箕裘之業<sub>一</sub>、幼學<sub>二</sub>言兵亦唯材識暗劣<sub>一</sub>、區<sub>二</sub>々乎蹤跡<sub>一</sub>、拘<sub>二</sub>々乎見聞<sub>一</sub>、不能<sub>二</sub>一蹴而造<sub>二</sub>古人之域<sub>一</sub>、而犬馬之齒、已弱冠矣、其學其才進不<sub>レ</sub>足<sub>二</sub>陳<sub>一</sub>善算<sub>二</sub>画<sub>一</sub>奇策、裨<sub>二</sub>補廟謨之萬<sub>一</sub>、退不能<sub>レ</sub>講<sub>二</sub>明斯道<sub>一</sub>、修<sub>二</sub>治家學<sub>一</sub>、得<sub>二</sub>乎己<sub>一</sub>、以傳<sub>二</sub>乎人<sub>一</sub>、而其所<sub>二</sub>日講究<sub>一</sub>、古人之陳跡耳、其所<sub>二</sub>與交游<sub>一</sub>、鄉黨之庸材耳、歲月荏苒、年齒荏加、唯恐志磨氣銷碌々瓦石、遂自汨沒、僕<sub>久</sub>、憂<sub>レ</sub>之久矣、居常讀<sub>二</sub>古人之書<sub>一</sub>每見其得<sub>二</sub>良師友<sub>一</sub>、與<sub>レ</sub>之問難論議、輒擊節抵掌曰唯如是而後可<sub>レ</sub>激<sub>二</sub>發志氣<sub>一</sub>、以長<sub>二</sub>進學識<sub>一</sub>、翻而自顧嘆未<sub>レ</sub>得<sub>二</sub>其人<sub>一</sub>也、頃聞有鎧軒先生者其爲<sub>二</sub>人有<sub>二</sub>經術文章<sub>一</sub>、而精<sub>二</sub>思兵法<sub>一</sub>、言兵、矩方雖<sub>レ</sub>未<sub>レ</sub>及<sub>レ</sub>知<sub>二</sub>其詳悉<sub>一</sub>、而欽慕切<sub>二</sub>于懷<sub>一</sub>、謂得<sub>二</sub>一相見<sub>一</sub>斯人而聞其宏辯偉論庶<sub>二</sub>幾激發志氣長進學識得少洗<sub>二</sub>濯庸陋之習<sub>一</sub>、且夫文武之易<sub>レ</sub>偏、自古而然、賈陸之無<sub>レ</sub>武、絳灌之不<sub>レ</sub>文、比比皆是、僕不知<sub>レ</sub>所<sub>二</sub>適歸<sub>一</sub>、今先生通<sub>二</sub>經術<sub>一</sub>而言<sub>二</sub>兵<sub>一</sub>是僕欽慕之所<sub>二</sub>以切<sub>一</sub>也、近世黠虜覬覦、奸情難測、廟堂深慮、邊備數勅<sub>戒</sub>、於是天下之策士論者、目擊時事、曉々各言<sub>レ</sub>所見、今先生抱<sub>二</sub>有爲之才<sub>一</sub>、而貴國正當<sub>二</sub>賊衝<sub>一</sub>、則於<sub>二</sub>虜之情狀<sub>一</sub>、固已詳而審<sub>レ</sub>之、如<sub>二</sub>鑑照而筭計<sub>一</sub>、於<sub>二</sub>折衝禦侮之大計<sub>一</sub>、固已講而究<sub>レ</sub>之、蘊<sub>二</sub>于中<sub>一</sub>而慨<sub>二</sub>于胸<sub>一</sub>久矣、天下之論、將<sub>レ</sub>有<sub>レ</sub>折<sub>二</sub>衷於先生<sub>一</sub>、積年之疑、欲<sub>レ</sub>啓蒙



於先生、是僕欽慕之所<sub>二</sub>以切<sub>一</sub>也、僕素有<sub>下</sub>游<sub>三</sub>歷四方<sub>一</sub>見天下之士之志、聞<sub>三</sub>先生之學<sub>一</sub>、欽慕不能<sub>二</sub>自止<sub>一</sub>、唯為<sub>三</sub>人臣食人祿故區々之身有所<sub>二</sub>羈絆<sub>一</sub>、他時得弊有司若邦君憐微臣之志而許允<sub>一</sub>、之將<sub>三</sub>先拜趨受<sub>二</sub>業于門下<sub>一</sub>、茲奉<sub>レ</sub>書為<sub>三</sub>之先容<sub>一</sub>、先生不<sub>レ</sub>以<sub>三</sub>僕之暗劣<sub>一</sub>、循々見<sub>レ</sub>教、幸甚、時維向<sub>レ</sub>暑、伏惟自重、某再拜、僕祖先嘗從<sub>三</sub>山鹿藤介子<sub>二</sub>而學焉、授<sub>三</sub>素行先師所<sub>レ</sub>著武教全書、其他雜述數編<sub>一</sub>而歸、爾來世々繼<sub>レ</sub>緒、至于僕<sub>二</sub>已數世矣、傳遠業荒子孫雲仍烏識其祖世遠人亡、何往取<sub>レ</sub>正、僕之憂可知矣既而聞<sub>三</sub>先生說<sub>レ</sub>兵、原<sub>三</sub>本山鹿氏<sub>一</sub>、乃平生之疑難、欲<sub>レ</sub>有所<sub>二</sub>質焉<sub>一</sub>之管窺欲有所正焉、僕之喜可知矣、惟先生炳亮是祈、

伏乞

吉田矩方再拜

玉斧

(松陰遺書)平田先生改竄

(平田活溪)

(草稿、成文は元の卷にあり)

(添削は山田治心氣)

(與人書)

月日、某再拜白、先生六月<sub>十日</sub>仲五<sub>日</sub>之手書、以<sub>三</sub>客月念<sub>二</sub>一<sub>日</sub>達、盥嗽拜誦、辭氣懇款、且貽以<sub>三</sub>某氏之策<sub>一</sub>一通、乃審<sub>レ</sub>不<sub>レ</sub>見<sub>レ</sub>棄之意、不堪<sub>二</sub>感佩之至<sub>一</sub>也、而所<sub>レ</sub>既<sub>二</sub>策<sub>一</sub>、反覆數回、初奇<sub>レ</sub>之、謂<sub>三</sub>文巧而論當矣<sub>一</sub>、既而又謂、是未<sub>レ</sub>免<sub>二</sub>俗習之見<sub>一</sub>耳、請試舉<sub>三</sub>一二<sub>二</sub>質<sub>一</sub>之先生、夫恟々然畏<sub>三</sub>西夷<sub>一</sub>如<sub>三</sub>猛<sub>二</sub>虎<sub>一</sub>者、

乎喜<sub>二</sub>奇異<sub>一</sub>如<sub>三</sub>美玉<sub>一</sub>蓋都人之俗習也、今春有<sub>下</sub>人自<sub>三</sub>江都<sub>一</sub>歸、某因問以<sub>三</sub>都下之事<sub>一</sub>、其人有<sub>レ</sub>云、曰、都下談<sub>レ</sub>兵者、自<sub>レ</sub>非<sub>レ</sub>術涉<sub>三</sub>西洋<sub>一</sub>、不<sub>レ</sub>在<sub>二</sub>屈指之數<sub>一</sub>、又曰、侯伯有<sub>レ</sub>摸<sub>二</sub>西洋之節制<sub>一</sub>而操<sub>レ</sub>銃隊<sub>一</sub>者、又曰、有<sub>下</sub>翻譯西洋鉛韜之書銃砲步騎之說<sub>一</sub>者、其書有<sub>二</sub>數十種、夫以<sub>三</sub>蘭學<sub>一</sub>名家、以<sub>二</sub>翻譯<sub>一</sub>為<sub>レ</sub>務者、概多<sub>レ</sub>鑿家者流也、醫而講<sub>レ</sub>兵書、非<sub>レ</sub>其專攻、曾中、無<sub>レ</sub>所<sub>二</sub>素持<sub>一</sub>焉、且非<sub>レ</sub>欲<sub>二</sub>明<sub>一</sub>其道<sub>一</sub>窮<sub>二</sub>其術<sub>一</sub>以裨<sub>二</sub>補國家<sub>一</sub>、徒取代<sub>二</sub>其耕<sub>一</sub>耳、蘭學家譯<sub>二</sub>一部新本<sub>一</sub>、以應<sub>二</sub>人需<sub>一</sub>、則其所<sub>レ</sub>獲<sub>レ</sub>為<sub>レ</sub>不少云固不<sub>レ</sub>知<sub>レ</sub>有<sub>下</sub>我、人情與<sub>レ</sub>夷不<sub>レ</sub>一、我、兵制與<sub>レ</sub>夷不<sub>レ</sub>同、夷之某器不<sub>レ</sub>若<sub>二</sub>我某器<sub>一</sub>、夷之某術勝<sub>二</sub>於我某術<sub>一</sub>、此事行<sub>二</sub>於彼<sub>一</sub>、而不<sub>レ</sub>行<sub>二</sub>於我<sub>一</sub>、此法便<sub>二</sub>於海<sub>一</sub>、而不<sub>レ</sub>便<sub>二</sub>於陸<sub>一</sub>也、亦豈求<sub>二</sub>窮其所<sub>一</sub>不<sub>レ</sub>知、而歸<sub>三</sub>之<sub>一</sub>必<sub>二</sub>可<sub>一</sub>用<sub>二</sub>哉、然而妄意譯<sub>三</sub>其書<sub>一</sub>、一向街<sub>二</sub>其術<sub>一</sub>、陋劣無識好<sub>レ</sub>奇喜<sub>レ</sub>異之徒<sub>一</sub>從<sub>レ</sub>之、終至<sub>二</sub>侯伯聞<sub>一</sub>其家法、而專<sub>レ</sub>做<sub>レ</sub>彼、實可<sub>二</sub>長<sub>一</sub>大息<sub>一</sub>矣、所謂號<sub>三</sub>大家名家<sub>一</sub>極多矣、蓋大家名家之說異口同談、誇<sub>三</sub>說夷之人物制度<sub>一</sub>、以街<sub>二</sub>其術<sub>一</sub>、則信者益篤、疑者終信、確乎不<sub>レ</sub>惑者無<sub>二</sub>一人<sub>一</sub>焉、於是乎其風習成矣、今策中、都賈、田舍兒、西土之虎、長崎之犬、狼虎蜂蟻之數喻、如<sub>レ</sub>謂<sub>下</sub>方無<sub>二</sub>奈何<sub>一</sub>之中、唯有<sub>二</sub>一死<sub>一</sub>耳、何畏<sub>レ</sub>夷如<sub>レ</sub>彼、誰<sub>レ</sub>我如<sub>レ</sub>此也、是亦陷<sub>二</sub>于彼誇說之論<sub>一</sub>耳、余聞<sub>二</sub>西洋諸國<sub>一</sub>、尤稱<sub>二</sub>泥亞<sub>一</sub>之盛強、而其本國之兵、皆不及于百万、比<sub>二</sub>吾邦所<sub>レ</sub>備、固為<sub>二</sub>少矣<sub>一</sub>、吾邦雖<sub>二</sub>昇平之久<sub>一</sub>、武藝操鍊亦不<sub>レ</sub>甚生、由<sub>レ</sub>是觀<sub>レ</sub>之、彼豈遽得<sub>レ</sub>見<sub>レ</sub>我如<sub>三</sub>田舍兒<sub>一</sub>、万万無此理策中又有<sub>二</sub>弓馬刀槍則倍精之水戰火術則效而修<sub>レ</sub>之之語、某窃不<sub>レ</sub>取焉、謂水戰火術、必不<sub>レ</sub>做<sub>レ</sub>彼、而至馬術或有可取焉者、夫西夷水戰之術、無<sub>二</sub>他長<sub>一</sub>、也、獨其船制堅牢、而高大如<sub>二</sub>城廓<sub>一</sub>而已矣、是可<sub>レ</sub>做乎、夷之<sub>レ</sub>製<sub>二</sub>是船<sub>一</sub>、亦自有<sub>レ</sub>由、



蓋夷以貿易為生，以侵掠為事，潮汐之所通，無遠而不至，唯其貿易為生，故其國富饒，貨不<sub>二</sub>少<sub>一</sub>，可<sub>三</sub>以償<sub>二</sub>製船之費<sub>一</sub>，唯其侵掠為事，故其船有所用，而非徒設之器，我則異此，國之儲雖無<sub>レ</sub>乏，其入自有<sub>二</sub>常數<sub>一</sub>，夷之寇雖可<sub>レ</sub>備，其來固無<sub>二</sub>定期<sub>一</sub>，豈得<sub>レ</sub>糜<sub>二</sub>國用<sub>一</sub>而徒造之，且大船非<sub>二</sub>我技之所習<sub>一</sub>，又非<sub>二</sub>我性之所適<sub>一</sub>，胡元寇<sub>二</sub>鎮西<sub>一</sub>，豐公征<sub>二</sub>朝鮮<sub>一</sub>，我每<sub>レ</sub>以<sub>二</sub>小者<sub>一</sub>，制<sub>二</sub>大者<sub>一</sub>，亦可<sub>三</sub>以見<sub>二</sub>我之長<sub>一</sub>矣，而欲<sub>レ</sub>捨<sub>レ</sub>此而倣<sub>レ</sub>彼，豈不悖事情乎某以為<sub>レ</sub>非矣，而夷銃砲之制，與<sub>二</sub>本邦<sub>一</sub>不同，本邦之砲，要<sub>レ</sub>不<sub>レ</sub>動如山，故其製重濫，牀有<sub>二</sub>三層之設<sub>一</sub>，是以彈丸必遠達而善中，雖<sub>二</sub>三四十丁之遠<sub>一</sub>，可<sub>三</sub>以殺<sub>レ</sub>敵，雖<sub>二</sub>咫尺之近<sub>一</sub>，亦可<sub>三</sub>以殺<sub>レ</sub>敵，故術士有<sub>二</sub>與<sub>レ</sub>砲同死之言<sub>一</sub>，西洋砲反之，要其疾如<sub>レ</sub>風，故其製輕便，有<sub>二</sub>車臺之設<sub>一</sub>，是以丸不<sub>二</sub>遠達而善中<sub>一</sub>，故有<sub>二</sub>與<sub>レ</sub>小銃<sub>一</sub>合編之法，以下五十七字可削以<sub>レ</sub>某觀之砲本重物雖其製輕亦重故架以車臺也今雖倣其輕便與車臺如我藩形勢嶮阻狹阨凹凸碎礮何得其便乎何如不動如山之為全乎<sub>レ</sub>且<sub>レ</sub>欲<sub>レ</sub>其活動<sub>一</sub>，則更有<sub>二</sub>行軍砲<sub>一</sub>之說，又有<sub>二</sub>鳥銃<sub>一</sub>，何舍<sub>レ</sub>此而就<sub>レ</sub>彼乎，且<sub>レ</sub>至<sub>二</sub>操<sub>レ</sub>銃者<sub>一</sub>，亦<sub>レ</sub>欲<sub>レ</sub>倣<sub>レ</sub>之，則欲<sub>レ</sub>倣<sub>レ</sub>夷之為<sub>レ</sub>者尤惑矣，觀<sub>二</sub>夷之隊伍<sub>一</sub>，三人為<sub>レ</sub>伍，數伍為<sub>レ</sub>隊以一伍直列為<sub>二</sub>一行<sub>一</sub>，並<sub>二</sub>列數行<sub>一</sub>為<sub>レ</sub>隊，一隊凡<sub>二</sub>三層<sub>一</sub>，前後左右，務相緊隨，以<sub>二</sub>小隊形<sub>一</sub>，使<sub>二</sub>敵砲不能命中<sub>一</sub>，銃頭施<sub>レ</sub>劍，以兼<sub>二</sub>長短之用<sub>一</sub>，銃丸之徑不<sub>二</sub>甚小<sub>一</sub>，而銃極輕便，約<sub>レ</sub>之以<sub>二</sub>步法<sub>一</sub>，使<sub>二</sub>全隊數十人<sub>一</sub>，一舉手一投足，皆一以肅<sub>レ</sub>氛齊<sub>レ</sub>力，是其大畧也，奇則奇也，然何足<sub>レ</sub>倣乎，欲<sub>レ</sub>倣<sub>レ</sub>夷之為<sub>レ</sub>，其尤不可者數，夫相緊隨，則兩刀大不<sub>レ</sub>便，然兩刀固不可解，故隊形之小不<sub>レ</sub>若<sub>レ</sub>夷，減<sub>二</sub>人數<sub>一</sub>，則銃之多不<sub>レ</sub>若<sub>レ</sub>夷，又折<sub>二</sub>士節<sub>一</sub>

△其不可一也，夷之步法手法，則夷性之所適，而夷樂而實學焉，我士氣勇悍，強捷，手步之法，其勢自有<sub>二</sub>與<sub>レ</sub>彼不同<sub>一</sub>，則固不<sub>レ</sub>樂而實學焉，操<sub>レ</sub>之雖<sub>二</sub>數年<sub>一</sub>，安能如<sub>レ</sub>夷乎，△

○加<sub>レ</sub>之減<sub>レ</sub>伍兵<sub>一</sub>，小<sub>二</sub>隊形<sub>一</sub>，則雖<sub>レ</sub>似<sub>レ</sub>便<sub>レ</sub>，敵丸<sub>レ</sub>避<sub>レ</sub>我隊之所<sub>レ</sub>在<sub>レ</sub>而<sub>レ</sub>至<sub>レ</sub>其左<sub>レ</sub>右<sub>レ</sub>乎，且<sub>レ</sub>本邦各家之法，大抵<sub>レ</sub>也<sub>レ</sub>，三人為<sub>レ</sub>伍，今則分<sub>二</sub>配定額<sub>一</sub>之兵<sub>一</sub>，不<sub>レ</sub>多<sub>レ</sub>，夫伍兵<sub>レ</sub>減<sub>レ</sub>而<sub>レ</sub>隊數<sub>レ</sub>多<sub>レ</sub>，與<sub>レ</sub>伍兵<sub>レ</sub>不<sub>レ</sub>減<sub>レ</sub>而<sub>レ</sub>隊數<sub>レ</sub>少<sub>レ</sub>，其占<sub>レ</sub>幾町<sub>レ</sub>幾里<sub>レ</sub>之地<sub>一</sub>，則<sub>レ</sub>亦<sub>レ</sub>未<sub>レ</sub>見<sub>レ</sub>其<sub>レ</sub>益<sub>レ</sub>於<sub>レ</sub>戰<sub>一</sub>也，有<sub>レ</sub>益<sub>レ</sub>不可<sub>レ</sub>而<sub>レ</sub>無<sub>レ</sub>益<sub>レ</sub>，論<sub>レ</sub>而<sub>レ</sub>判<sub>レ</sub>然<sub>レ</sub>矣，△

而解<sub>二</sub>兩刀<sub>一</sub>，以悉倣<sub>二</sub>夷之為<sub>一</sub>，亦惡若<sub>レ</sub>彼之數十年用<sub>二</sub>之實地<sub>一</sub>之精且熟乎，△其不可二也，則本重而末輕，權衡失<sub>レ</sub>宜，用固劍<sub>レ</sub>者<sub>レ</sub>兵家之所<sub>レ</sub>捧腹<sub>レ</sub>胡盧<sub>一</sub>也何也，其鋒甚鈍，不鈍則用<sub>二</sub>槩杖<sub>一</sub>之際必傷<sub>レ</sub>手故不得<sub>レ</sub>不鈍<sub>一</sub>，是有<sub>二</sub>利<sub>一</sub>於<sub>レ</sub>殺<sub>レ</sub>敵乎，且我則有<sub>レ</sub>刀有<sub>レ</sub>槍，其利銳<sub>二</sub>萬國無比<sub>一</sub>，豈可<sub>レ</sub>以<sub>二</sub>外夷至鈍之物<sub>一</sub>，代<sub>二</sub>神國至利之及<sub>一</sub>，其不可<sub>二</sub>也<sub>一</sub>，夫丸徑不<sub>二</sub>小而輕便<sub>一</sub>，則丸不<sub>二</sub>遠達<sub>一</sub>也亡<sub>レ</sub>論已，我銃則更遠達，豈有<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>舍<sub>レ</sub>己之長<sub>レ</sub>從<sub>レ</sub>人之短<sub>レ</sub>之理乎，其不可<sub>二</sub>也<sub>一</sub>，古之論<sub>レ</sub>兵者，曰，取<sub>レ</sub>用於<sub>レ</sub>國，蓋以<sub>二</sub>其習慣<sub>一</sub>也，以其<sub>二</sub>衆多<sub>一</sub>也，今<sub>レ</sub>欲<sub>レ</sub>倣<sub>レ</sub>夷將新操<sub>レ</sub>之，則<sub>レ</sub>習慣<sub>レ</sub>為<sub>レ</sub>不<sub>レ</sub>如<sub>レ</sub>夷<sub>一</sub>，將取<sub>レ</sub>之阿蘭商夷則<sub>レ</sub>衆多<sub>一</sub>為<sub>レ</sub>不<sub>レ</sub>如<sub>レ</sub>夷<sub>一</sub>，其不可<sub>二</sub>也<sub>一</sub>，有四不可故某竊以為<sub>レ</sub>非矣至于馬術，夷之術或可<sub>レ</sub>以補<sub>二</sub>我之闕<sub>一</sub>，蓋聞西夷馬隊，以<sub>レ</sub>擾<sub>二</sub>銃隊<sub>一</sub>者常也，故其調習飼養鑿治之術，必有<sub>レ</sub>足用焉，且夷陵<sub>二</sub>万里波濤<sub>一</sub>而來，不<sub>レ</sub>能<sub>二</sub>多從<sub>レ</sub>騎<sub>一</sub>，故我<sub>レ</sub>用<sub>レ</sub>騎而有<sub>レ</sub>利也，夫用<sub>レ</sub>兵者，以<sub>レ</sub>異<sub>レ</sub>敵人之為<sub>レ</sub>為<sub>レ</sub>貴矣，自<sub>レ</sub>銃砲船馬之術，異<sub>レ</sub>夷之為<sub>レ</sub>，利乃可<sub>レ</sub>收矣，而<sub>レ</sub>欲<sub>レ</sub>舉而從<sub>レ</sub>夷之為<sub>レ</sub>，非也，近本藩或亦倣<sub>レ</sub>彼之小銃隊<sub>一</sub>而操<sub>レ</sub>之，且<sub>レ</sub>囂然<sub>レ</sub>以<sub>レ</sub>倣<sub>レ</sub>夷之為<sub>レ</sub>，自誇張<sub>レ</sub>，某聞異<sub>レ</sub>某所<sub>レ</sub>聞，蓋本邦築城之法銃砲之制，皆原<sub>レ</sub>于<sub>二</sub>西洋<sub>一</sub>，而論<sub>二</sub>其道<sub>一</sub>傳<sub>二</sub>其術<sub>一</sub>者，不敢<sub>レ</sub>誇<sub>レ</sub>張其所<sub>レ</sub>出焉，有<sub>二</sub>古人之深意<sub>一</sub>也，夫<sub>レ</sub>知<sub>二</sub>其跡<sub>一</sub>，則慕<sub>二</sub>其人<sub>一</sub>，知<sub>二</sub>其人<sub>一</sub>，則慕<sub>二</sub>其世與<sub>一</sub>國，人之情也，未嘗儒者之艷<sub>二</sub>于漢<sub>一</sub>，鑿者之艷<sub>二</sub>于蘭<sub>一</sub>，其理一也，夫艷<sub>二</sub>于外國<sub>一</sub>者，禍寓<sub>二</sub>於不測<sub>一</sub>，某故謂有<sub>二</sub>古人之深意<sub>一</sub>也，且古之人，神<sub>レ</sub>會<sub>二</sub>其道<sub>一</sub>，活<sub>レ</sub>用<sub>二</sub>其術<sub>一</sub>，獲<sub>レ</sub>魚而忘<sub>レ</sub>筌<sub>一</sub>，至<sub>レ</sub>如<sub>レ</sub>與<sub>レ</sub>彼<sub>一</sub>，不<sub>レ</sub>相涉<sub>レ</sub>也，今之人則異<sub>レ</sub>是，固<sub>レ</sub>于<sub>レ</sub>彼<sub>一</sub>也頑然，誇<sub>レ</sub>于<sub>レ</sub>夷<sub>一</sub>也囂然，形容坐作，皆倣<sub>レ</sub>彼以<sub>レ</sub>高<sub>レ</sub>于世<sub>一</sub>，豈古人之心邪，某又過



慮謂、夷學之日明、陷外國之画中、也益深矣、西夷以兵書鬻我、豈特要利而止哉、必謂使日本倣之、然後可有「大」為、某目擊方今之事、不任忿々之至、因策中之言、反覆推論之、以質先生、先生教以「當否」是祈、論多「強枉」、文無「條理」、炳亮幸甚、近日之文別錄呈之淺狹可笑塗糊難通亦少下雌黃幸甚時惟新寒、先生自愛、某再拜白、

韓峯叔窮之又窮、年甚二年、而清節益固、不敢求於人、晝茅夜素、衣食是謀、猶不免飢渴、是懼、不暇復問旧交、然亦談時々及先生之事、似亦非捐管鮑之道者、先生幸察、某再拜白、

伏乞

吉田大次郎

玉斧

丁未詩稿

人日訪山中友人 杉氏詩會課題

新年餘寒久掩門、不知何處着春魂、此日好晴踏幽約、角巾竹杖步出郭、一弄黃偏輕縹風楊、放音始滑出谷鶯、一佳景迎客又送客、直到山中居士宅、一自忻既有先吾人、戶留杖屨咲談聞、一入座團欒皆同志、詩話文談多風致、一鼎清茶交情融、

(表紙に丁未之歲詩稿、藤村方記してある)

初覺春魂着此中、

春晴、分鶯到垂楊、不借聲之句為韻、得到字、  
春晴出郭欲烏帽、聊療看書兩眼眊、吟客多情深慨嘆、落花委地無人到、

春雨、分唐僧貫休濛々花雨時之句為韻、得「花」字、

雨寒無意去尋花、一鼎尉閑煎苦茶、此裡誰知有幽樂、剡藤時鬪黑電蛇、  
雨聲晝靜讀書家、磁鴨香煙直又斜、推窗忽駭春過去、打落紅桃滿樹花、

漁村、次齋貞甫韻、

正是清明三月天、垂楊夾岸掛輕煙、漁村野意何尤是、魚網斜連夕照邊、

漁樵閑話圖 齋貞甫詩會課題

水悠悠山疊々、二翁相逢相對立、取柯者樵携竿漁、青山綠水問還答、麋鹿鳧鷖皆同盟、青紫貂蟬話何及、勿謂漁樵趣不同、塵外別有幽情愜、

春日遊步 淺野某詩會課題

雙屨兼孤策、林隈又澗阿、山容經雨綠、天氣放晴和、白李墻頭雪、黃鸝柳上梭、恨儂乏文字、詩料等閑過、

夏日雜興 自家詩會課題



節過<sub>二</sub>黃梅<sub>一</sub>霽尙難、新秧移去綠漫々、窓頭枯坐閑無事、茶氣香煙聊自歡、

夏夜即事、分<sub>三</sub>夜短人家<sub>一</sub>早就<sub>レ</sub>牀之句<sub>一</sub>為<sub>レ</sub>韻、得<sub>三</sub>夜字<sub>一</sub>

雨過<sub>二</sub>庭前<sub>一</sub>涼<sub>三</sub>好夜<sub>一</sub>、短宵忍<sub>レ</sub>睡坐<sub>三</sub>山樹<sub>一</sub>、得<sub>レ</sub>知<sub>二</sub>枳子<sub>一</sub>發<sub>レ</sub>花多、嫩吹度<sub>レ</sub>籬傳<sub>三</sub>暗麝<sub>一</sub>、

中庸講義 (嘉永三年五月十二日私作)

子曰、道之不<sub>レ</sub>行也、我知<sub>レ</sub>之矣、知者過<sub>レ</sub>之、愚者不<sub>レ</sub>及也、道之不<sub>レ</sub>明也、我知<sub>レ</sub>之矣、賢者過<sub>レ</sub>之、不肖者不<sub>レ</sub>及也、人莫<sub>レ</sub>不<sub>二</sub>飲食<sub>一</sub>也、鮮<sub>二</sub>能知<sub>レ</sub>味也、

章意 此章、上<sub>二</sub>中庸<sub>一</sub>ヲ能スル人少キヲ承テ、詳ニ其由ヲ云、蓋其行レズ明ナラザル者ハ、或過不及アルヲ以テスルノミ、苟モ能<sub>レ</sub>之ヲ味フ時ハ亦飲食ノ味ノ至テ知り易キガ如キヲ云テ、人ヲ點醒ス、

字訓 道ハ天理ノ當然トテ、事々物々ノ上ニ、此物ハカクスベキモノ、此事ハカクスベキ事ト、一々條理アル事ニテ、此ヲ天理ト云ハ、此條理ハ聖人ノ作ル所ニモ非ズ、人君ノ定ムル所ニモ非ズ、國、華夷ヲ云ズ、人、智愚ヲ分タズ、一齊ニ然ルノ條理、乃天ヨリ出ルモノニ、然レモ此ヲ天理トイヘバ、高大無邊ニテ、凡人ノ手足届カザル<sub>レ</sub>ニ覺ユヘケレモ、全ク左ニ非ス、即日用常行ノ事ニテ、内ニハ父子兄弟、外ニハ朋友、長上ヨリ下僮僕幼少ニ至ル

迄、之ニ事ヘ之ニ接シ之ヲ待スル所以、言語應對及ヒ行住坐臥ノ間ニ過ス、然<sub>レ</sub>ノ所謂中庸亦唯是ノミ、不<sub>レ</sub>行ハ塞ナリ、不<sub>レ</sub>明ハ晦ナリ、道ニ通塞晦明アリ、凡道ヲ知ル<sub>レ</sub>真ナレバ、必行フ<sub>レ</sub>至ル、道ヲ行フ<sub>レ</sub>至レバ必ス知ル<sub>レ</sub>真ニ、人々知ル<sub>レ</sub>真ナレバ、道、天下ニ流行ス、行フ<sub>レ</sub>至レハ、道、天下ニ著明ニ、知ハ生得聰達ニシテ、一ヲ聞、十ヲ知ル如ク、高遠精微ノ理ヲ合點シ易キ人ナリ、愚ハ昏昧ニシテ、形器ニ拘ル人ナリ、賢ハ生得敏捷ニシテ、能シ難キ所、測ラレザル所ヲ行フ人ナリ、不肖ハ柔情ニシテ、能スヘキ所、行フベキ所ヲナサ、ル人ナリ、要<sub>レ</sub>之、知<sub>レ</sub>賢ト真ニ中ヲ得ルモノニ非ス、

解義 中庸ノ道、能スル者鮮シ、其能セサルハ、過不及アルヲ以ナリ、苟モ過不及ナクンハ、人々能スベシ、故ニ孔子曰、今道ノ天下ニ流行セザルヤ、我<sub>レ</sub>其説ヲ得<sub>レ</sub>リ、何トナレバ、唯知者コソ道ヲ知テ行フヘキニ、却テ理趣ノ高遠精微ニ耽リ、日用ノ切実ヲ輕蔑ス、中ニ過グト云ヘシ、愚者ハ則是ナシ、宜シク道ヲ行フベシ、而其質昏昧ナレハ、去テ事々物々ノ上ニ就テ、格物究理スル<sub>レ</sub>能ハズ、其行フ所、大率淺陋固滯ニ止ル、中ニ及バザルナリ、今道ノ天下ニ著明ナラザルヤ、我<sub>レ</sub>其説ヲ得<sub>レ</sub>タリ、何トナレバ、賢者コソ道ヲ行テ是ヲ明ニスヘキニ、却テ其行フ所奇僻ニシテ又行フヘキハ捨テ、問ハス、中ニ過クト云ヘシ、不肖者ハ則是ナシ、宜シク道ヲ明ニスベシ、而<sub>レ</sub>其質柔情ナレバ、奮然興起ノ志ニ乏シ



ク、去テ事々物々ノ上ニ就テ、克己力行スルヲ能ハス、其行フ所、大率因循姑息ニ流ル、中ニ及ハザルナリ、則知愚賢不肖ノスル所、中ノ道ニ於テ如何ソヤ、夫天下ノ人、知ニ失セザレバ、必愚ニ失ス、賢ニ失セザレバ、必不肖ニ失ス、我ニ於テ其行レザル明ナラサルノ説ヲ得タリ、然リト雖モ未ダ之ヲ思ハザル也、夫何ノ遠カ之レアラン、且是ヲ近ニ視ヨ、天下ノ人、誰カ飲食セザルモノヤアラン、然レモ烹調塩梅ノ正味ヲ真ニ知ルノ人ハ少シ、是ニ由テ之ヲ觀ルニ、人唯粗心ニテ飲食ス、故ニ知ラズ、苟モ之ヲ味ハ、是ヨク烹ユ、是能調ス、是塩ノ過グルナリ、是醬ノ過クルナリト、一々知覺ス、衆人皆同シ、道ノ中ナルモノ、何ゾ此ニ異ナラン、若シ知者ヲシテ切実ヲ貴ヒ、愚者ヲシテ省察ヲ重ンシ、賢者平易ヲ宗トシ、不肖者柔情ヲ警メバ、所謂中庸ノ道、人々能クスベシ、

餘論 方今文教ノ隆ナル、兩國ノ士、夫孰カ觚ヲ操リ策ヲ挾ミ、斯時ニ酬ユルコトヲ願欲セサルモノアラシヤ、實ニ盛ナリト云ヘシ、但、濟々學士動モスレバ知愚賢不肖ノ失ヲ免ル、一能ハズ、此レ實ニ一大憾ニ非スヤ、今聰達ノ人アリ、好テ精微高遠ノ論ヲ誇張ス、其實行ニ至テハ、茫乎トノ手ヲ著クル所ナシ、昏昧ノ人アリ、徒ニ文字訓詁ノ末ニ從事ス、其精義ニ於テハ、怪乎トノ意ヲ留ルコトナシ、敏達ノ人ノ奇僻ナルアリ、柔情ノ人ノ因循ナルアリ、孔子ノ嘆スル所、今時モ亦然リ、是ニ於テ、初學ノ輩深ク冀望スル所アリ、古ノ賢人君子ヲ

得テ是ニ從ハ、彼四等ノ人、或ハ學テ中ニ至ルヘシ、蓋シ古ノ教ユル所以ヲ考フルニ、精微高遠ノ論ハ、從テ之ヲ抑裁シテ実行ニ本ケ、文字訓詁ノ學ハ、從テ之ヲ挫折ノ精義ヲ喻シ、志ノ善ナル、行ノ美ナルハ、從テ之ヲ誘掖激勵シ、凡教ヲ施ス、一ニ躬行心得ニ歸セシム、故ニ彼四等ノ人、皆學テ中ニ至ルヲ得ン、今ノ教ルモノハ不然、之カ為ニ句詠ヲ授ルノミ、之カ為ニ講解ヲ資クルノミ、學者ノ心何如ヲ問ハス、書ヲ讀ムコト精ニ、書ヲ講スルヲ明ナル者ハ、目シテオトシ能トス、然ルヲ能ハサルモノハ、心諄良忠実ナリト云モ、亦目シテ魯鈍為ルコトナシトス、其非心未ダ嘗テ格サス、其善心未ダ嘗テ勸メズ、大ニ古ノ人ヲ教ユル法ニ異ナリ、而ノ安ノ以テ常トス、學フ者モ亦此ヲ以テ師ヲ見テ異トセズ、於レ是乎實學ノ傳、地ニ墮ルニ殆シ、飲食ノ味ヲ知ルモノ益々少シ、嘆ズベキカナ、

與清水赤城一書 (弘化四年二月初日)

月日、(朔)吉田矩方清水赤城先生之座下、古曰、閭巷之人、欲三砥行立名者、非附青雲之士、惡能施後世哉、又曰、獨學而無友、則孤陋而寡聞、由是觀之、有志之士、必得有識之人、附之友之、然後有以成也、(業)而名達僕生于鈴賴之家、其責則重矣、長于長萩城之東鄙、其居則陋矣、其所共交遊、非有卓絕之才、其所講習、不過陋讀父書也、(業)責塞何能有以成焉、(業)常平居以為憂



矣、昨歲聞瀋生山田公章者以澹齋長沼先生之書為唱也、乃就而學焉、公章乃授以兵要錄二十卷、握奇八陣集解一卷、（昨年）以今春某月日卒業矣、（僕）因曰余之所從而受此書者為江都之赤城清水先生、（僕）於是始知先生之名也、（僕）公語僕曰、先生之學、宏達疏通、其變化妙用、溢乎談論之間矣、方今海內言兵者、無有下如先生者、且夫江都天下之大都會也、有志之士欲激發志氣深厚學識者、不可不下一遊焉見都府邸第之魏大而踵先生之門、而聞正大的實之議論也、（僕）某於是乎竊歛先生、及讀下先生所訂正神器譜序、見其立論切中時弊、讀下所校正紀効新書、見其依據之廣博、益信公章之不我欺矣、乃謂此、殊桂林一枝、崑山片玉耳、固未足以窺先生之万一也、不可不親炙而以盡聞其胸中之蘊也、（蓋）夫兵要錄之所論、自兵談將略練兵以至出師陣營戰格、細大無不兼焉、握奇八陣集解之所解、發明千古之晦冒、其論奇正單合、無不至矣、可謂悉矣、然竊謂未得于心也、二十二卷、猶為不足也、既得于心也、四箇之說、（附釋奇八陣）固為有餘也、今者某則以二十二卷為未足者也、此所以欲一見先生而聞其議論也、（而猶尙）待者、以僕始未及弱冠、（未）窮宏、（荷）加以數年之功、而後欲學、（已）博、（然）後或可以仰時雨之化也、（之故也）如此則所謂附青雲之士者可庶幾而免乎通讀之弊也、（欽）略陳仰慕之心於左右、為他日相見之資、先生以為可教幸甚、矩方敬再拜白、

總論

一近時兵學砲術、靡然倣西洋夷之所為、而有志之士、知愧立夷下風、叢口攻之、而未見一有補也、余常謂、攻之者過矣、未述其由也、夷狄之淫浸、寧無由哉、蓋吾邦偃武以來、靜謐韶歲、蒐獮之典、廢而不講、以迄于今、經年之久、宇宙一變、而譚兵者、或執疇昔之論、而不涉今日之事情、或不究兵戰節目之詳、而濫曰變化之妙、存于一心、是安可舉而措之實地哉、是以天下貿々焉、知有砲銃步騎、莫知其用、於是少有才者、乘其虛隙、顧學西夷之說、以術于世、無識者、見其細大兼舉、條理一貫、驗之實地、而有實效也、奔走從之、而攻之者、欲徒以舌辯辭巧、拉之、如是、則叢口而攻、果何補乎、可謂過矣、夫西夷之說、所以不可行于我者、以下人情兵機、器械制度、有吾有彼不可三膺合也、以下不可倣人之為、而制人之為也、夫我國則有吾祖宗之制度、潤色沿革、以使合事情、而可施于實地耳、今此法固未稱善、唯見者聞者、從短長是非之、以進于實用、欲令無識者知不必借西夷、此操習之意也、一人各有所長、又各有所短、取捨短長、類聚部分、以用之、自古之政也、夫不取捨短長、猶鉛刀為鋸、不類聚部分、猶倒持三鍔、故尙父之論練士、有冒刃、陷陣、勇銳

（松陰の兄杉民治の筆蹟にて、別冊利卷の空處之總論也）書き添へてある。



勇敢、寇兵、死鬪、死憤、必死、勦鈍、倖用、待命之目、而吳起亦有軍命、堅陣之說、甲越之所用、先師之所傳、未嘗無此法、若所謂五層坐陣、要皆是物、而制度器械、有古有今、有我有彼、故吾所取于甲越者、非用、形也、非形、法也、非法、理也、凡物有用斯有形、有形斯有法、有法斯有理、所謂理者、涉古今彼我而不變也、故能通于理者、由理生法、由法生形、由形生用、何必刻舟守株之為哉、雖然趨空理而捨實用者、學者之通患也、操之不可廢、其在斯乎、其在斯乎、

一甲越五層之陣法、一曰、輕卒弓銃、二曰、輕卒長槍、三曰、兵士、四曰、旗旌、五曰、騎馬、嗟、戰之理盡焉矣、是所以齊三勢力而一之也、古之輕卒、多募田野無賴山林獵夫而用之、其出處率同、則其膽力亦無大異焉、而所執之弓銃若槍、其制皆同、伍法隊法亦同、而令之各自奮鬪、是以勢力齊一矣、至于士、則或譜第而世襲、或擢于雜卒間而用之、其稟祿有少、其蓄卒有衆寡、有二丁壯、有老弱、雖刀槍其所專用、又有兼用弓銃者、其人萬殊、不可得而齊、古人知其不可齊也、以不齊而齊之、乃所以深齊之也、令其相保、長以衛短、短以俟長、短兵長用、長兵短用、若號一槍、二槍、槍下者、皆是也、要之輕卒以器械齊之、兵士以運用齊之也、至近時、則砲銃之術益精、而其彈之及遠穿堅、非復古之弓銃云者之比也、是以砲銃之與刀槍、長短大異、不可相伍以相保、乃不

可齊者極矣、不可齊者極、而以至于可齊、其法不拘士有幾名、必四分爲砲銃步騎、各取其所長、而編之若輕卒、其法因古、而其用則奇伏耳、夫如是、然後以器械與運用齊之者、可復見于今日也、其規畫雖異、其理未嘗不合于古也、一所謂理者、乃齊一勢力之理也、法者隊伍編法也、形者因地施法、以成斯形也、用者動斯形而用之也、其詳左記、

(萩市松陰神社藏 校合濟安)



(附載)

○ (弘化三年十月十四日)

或問目錄軍旅之部

主戰内試之事

此、主戰ノ法ヲ内試スルヲ云、其法ハ敵ノ格ニ依ルベシ、兼々心掛ノ將士ハ、我ニ敵スル国ノ戦格ヲ知り、夫々ノ手當ヲ爲スヲ要ス、其大要、敵ノ抱筒備打ヲ主トスルハ、我玉目ノ大砲ヲ坐定シテ拒クヲ習シ、敵モルチールクール等ヲ主トスル時ハ、我百目玉内外ノ備打ニテ神速ニ分合前進スルヲ習スノ類、是内試ノ注注意、其法ノ如キ姑ク略ス、

付リ、視觀察ノ事

視ハ形ノ上ヲ見ルニ、觀ハ形ノ本ヲ見ニ、察ハ一段込ミ入テ其源ヲ見ルニ、凡内試ヲナスニ、此心得ヲ以テ可否ヲ知ナリ、今本藩ノヲ以テ之ヲ言フニ、大砲小銃備ラザルニ非ス、習練場有テ小銃ヲ習シ、砲家有テ不意大砲ヲ習ス、門人弟子固ヨリ上手モ有ルベシ、形ノ上ヲ以テ之ヲ見ルニ、内試成リト云ベシ、是視ナリ、然レ情其本ヲ見ルニ、大砲小銃備ルト雖夫々ノ場所ニ配當シ置ル、ニ非ス、習練場習フ処、戰ニ臨テ其儘用ヒラル、ニ非ス、砲ノ上手有リト雖レ、必シモ大砲掛リト成ルニ非ス、大砲掛リ云レ、必シモ砲ノ上手ニモ非ズト見ル、是觀ナリ、右ニ云フ処

殘ラス備ルト云レ敵ノ戦格ヲ知リテ、ソレニ由テ内試スルニ非ルカト見ル、是察ナリ、然レハ、内試スルニ付テ、三字忽ニスベカラズ、

吉田大次郎再拜

百ヶ条目錄

大筒用捨ノ一

大筒固ヨリ費用多シ、且敵人ヲ傷害スルヲ、之ヨリ慘シキハナシ、然レハ、一概ニ用ヲ知テ捨テ不レ知シテハ不可ニ、對戰ノ際、敵中ニ返忠ノ者有カ、或出火・喧嘩・放レ馬等有、敵中自ラ擾乱スル処、恐懼ノ時、怠惰ノ時、疲勞ノ時ノ類、我樹林蒙密ノ間ヲ經通ル時杯、摠シテ短兵ヲ用テ急ニ迫リ、夜撃朝カケヲ仕カケテ、不レ勞シテ敵ヲ追崩スヘキ処、皆用捨ノ心得アルベシ、備組等ヲナス者、知ラズンバ有ベカラズ、

攻城惣目錄

左右ヨリスル玉ハ、百目ハ三百目ノ強ミ、五百目ハ一貫目ノ強ミト云フ、左右ヨリスルトハ、兩方ヨリスルヲ云、城ヲ攻ムルニ、一方ヨリ計リ攻テハ、或ハ敵暫時其方ヲ避テ攻サル方ノ郭ニ移リ居リ、勞シ功少キヲ有ニ、兩方ヨリ一同ニ打立ル時ハ敵必城ヲ落去スベ



シ、此則玉ノカ一倍強キノ理ナリ、山城杯別シテ其心エ有ルヘシ、

※以下三行原本は抹殺してある

※棒火矢砲録ノ別有ハ如何

棒火矢ハ火ヲ照ノ敵ノ上ヲ見ルコトヲ主トス、砲録ハ陣營城樓ヲ焼クコトヲ主トス、然レモ、時ニ臨テ一概ニ泥ミ難シ、

吉田矩方再拜

一所知ノ計策ノコト

所知、敵陣ノ中ノ所知ノ人ヲ言ナリ、計策ヲナスニ、其人柄ヲ能ク知リタルニ由テ計策ヲ納ルレハ、尤ヨキ泛然トシテ不知ラヌ人ニ納ル、ニ勝レリ、故ニ或ハ敵人敵ノ親類縁者ナトノ我ニ在ル者カ、又ハ敵人ノ我ニ降附スル者ヲ、計策ヲ納レシメ、此方へ降ルノ利ヲ申送ルナリ、  
信評、所知ノ計策ハ、計策ヲ敵ニ納ルノミナラス、所知ノ者ニツキテ内應サセ、火ヲ合セ、或城門ヲ開カシメ、敵將ヲ或ハ其者ニ利ヲアタエテ、敵將ヲ刺シメルコトアルヘシ、

吉田矩方拜

弘化丙午冬十月十四日

(神戸市田村市郎氏藏 校合濟)

敵中已ニ此人有  
計ハ我因テ以テ  
計ヲ施スコトヲ  
ヘシ、我若シ得  
レハ、ハ敵モ亦  
此計ヲ爲スヘ  
シ、嗚呼將タル  
者撫愛親和ノ赤  
心ヲ人ノ腹中ニ  
置カスハ有ル  
ヘカラス、醜爾  
ノ微運桶氏ノ孤  
城ヲ以テ猶能ク  
北条氏ノ威ヲ挫  
クコトヲ得タリ、  
不レ如シ人ノ  
言可レ信矣、

(本文は松陰自筆なれども此表題は小田村の筆である)

寶螺ノ考 (嘉永五年十月頃)

武備要略ニ、中国以ニ金鼓、彼則以ニ唘囉、彼方ニハ、後世ニナリテ角ヲ用ル制ハ絶タルニヤ、皇  
国ニ唘囉ノミヲ用ルサマニイヘルハ折畧、

愚攷、此説ハ、角ト唘囉ト同物ト見テ、唘囉ハヤカタ宝螺貝ト見タルニヤ、前文通證ノ波良寶螺也、所謂螺角是也ヲ  
駁スル文ニヨレハ、角ト螺トハ原ヨリ分レテアリ、何如、愚思フニ、角ト唘囉ハ自ラ別物ニテ、我國ノ宝螺貝又更ニ別物ナル  
コト論ナシ、角ノ事、明ノ陳璠ガ師律提綱(カ)ニアレコレミヘタリ、然レハ、其頃迄ハ角ノ制絶サル  
ニ似タリ、後世ト云ハ何時ヲサスニヤ、尙他書ヲ攷タケレモ、座右書ナキヲ奈何セン、唘囉  
ハ、練兵日記及提綱等ニ多分見ヘタリ、武備志・紀効新書ニモ多分アレド、是亦座右現書ナケ  
レハ云難シ、サテ其唘囉ノ形ハ知ラサレモ、是モ攷タシ、兵録角ハ引用諸説ノ如ク竹木皮銅ナト  
ニテ作りタル筒ノ如キモノナリ、因テ思フ奥羽邊ニテ小兒ノ戯ニ櫻ノ皮ヲハキ夫ヲ卷テ竹筒ノ如ク製シテ吹ク習アリ其音甚寶螺貝ニ似タリ、古ノ角ノ遺制ニモヤト思ヒタルコトアリ、惜カナ其名ヲ忘レタリ、

扱海螺ヲ以テ軍陣ニ用ユルコトハ、我國ニカキリタルコト覺ユ、是モ應斷其起原ノ説、法螺家ニハ、  
六孫王経基ヨリ源家歴代ノ武將ニ傳フト云ヘト、是ハ証トスルニ足ラズ、武用弁畧ニ、建武武  
ノ乱世ヨリ始レリト云ハ、何ノ証アリテ云ケン、又山康素水翁ノ話ニ、立花宗茂ハ山伏ヲ情



(以下小田村筆)

テ法螺ヲ吹カセラレシヲ、彼家ニ傳タリ、其頃マテハ、諸国多クハ其振合ニテ、別ニ貝役ヲハ設ケサルモ多カリシト見ユ、サレハ、貝ハ修驗山伏ナトノ用來レルヲ、軍器ニ取用タルハ、戦国ノ諸將ノ意匠ニ出タルナラント云ヘリ、是モ臆度マテナレト、証トスルニ足ラズ、武要弁畧ニ引ヲミレハ原ハ天竺ヨリ、願クハ、事ノ序ニ確説ヲ得タキナラズヤ、起ルカ尙佛書ヲ攻ヘタシ、

沈撰八家序有ニ孫可之、而世未知ニ其文、簡明目録十張云、可之集十卷、唐孫樵撰、文九三十五篇、汪師韓作ニ孫文記疑、其中二十五篇出ニ偽託、其文格受ニ之無擇、々々受ニ之皇甫湜、々々受ニ之韓退之、然韓鎔ニ鑄群言、自然高古、湜有レ意求レ奇、樵則刻レ意求レ奇矣、

壬子十月 哲記

(小田村の文は本文に關係なきも、本文に併記しあるを以て年代の考證の爲めに附記した)

(東京市榊取三郎氏藏 校合濟園)

上書

三卷合本



### 解題并凡例

一、上書三卷とは、(一)明倫館御再興ニ付氣附書、(二)水陸戰畧、(三)文武稽古萬世不朽之御仕法立氣附書の三つである、  
一、明倫館は長門藩の學校で、享保四年開創以來、藩士の文武教育をこゝで持續して居たが、藩主毛利敬親の時、弘化三年に學事興隆を命じ、設備の擴張、内容の充實を圖り、萩の中央に新築館舎の敷地を卜定すると同時に、教育上に就いて、文武諸師の意見を徴しつつ工事を進めた、當時、松陰の呈書したのが、この(一)である、かくて、學館は嘉永二年正月に落成して、直に開業となつた、この(一)の上書は、實に開業の年の前年であつた、この時、松陰十九歳、これが松陰の上書の始である、

一、(二)は、嘉永二年三月、公命により異賊防禦の方法を述べたものである、この時は、兵學諸師が各呈書したが、松陰はその後間もなく、御手當方御内用掛といふ公務に服し、その歳七月には、命を受けて、近傍北西海岸を巡視した、

一、(三)も亦公命によれる上書で、士道士風を論じ、風俗の善良を根柢とするが萬世不朽の策であると言ひ、一に是れ明倫館の教育に待つものである事を説いた、堂々たる大論策で、教育の大義を根本的に述べたものである、

一、萩市松陰神社には、右の三書の控書が合冊にして保存されてある、大さは半紙二つ折形、總表紙は厚紙、濃き澁で刷毛目を見せ、標題は、松陰自筆で上書と書し、下に三卷合本とある、三書各普通半紙の表紙があり、その標題



皆松陰自筆で、本文は無野紙に、(一)は半面に七行、(三)は八行、すべて自筆である、本全集編纂にはこれを原本とした、

- 一、この三書のこれまでの刊行物としては、吉田庫三編「松陰先生遺著」に所載のもののみである、  
一、(三)の上書は、原本には標題がない、文武稽古萬世不朽云々の語は、その文の始にあるから、「松陰先生遺著」にも、これを用ゐて標題としたのであらう、今その體裁に據つた、

(委員 安藤紀一)

明倫館御再興ニ付  
氣附書

嘉永元年戊申十月四日印符ニして御再興懸り  
唐船方三宅忠左衛門<sup>門</sup>持參致候もの

吉田大次郎



嘉永元年九月廿七日於  
 御城<sup>二</sup>明倫官御再興方左之通授相成候事  
 今度明倫御再興被<sup>二</sup>仰付<sup>一</sup>候<sup>二</sup>付<sup>一</sup>諸  
 藝古成立之儀銘々氣附筋申出候様  
 被<sup>二</sup>仰付<sup>一</sup>候條來月三日迄ニ相  
 印符<sup>二</sup>ノ可<sup>レ</sup>被<sup>二</sup>差出<sup>一</sup>候事

(筆他附書返見紙表)

(本文)

今度明倫館御再建被<sup>二</sup>仰付<sup>一</sup>候<sup>二</sup>付<sup>一</sup>諸稽古成立之儀私共銘々氣付筋申出候様被<sup>二</sup>仰付<sup>一</sup>候處御再建之儀廟堂ニ深  
 遠精密之御評詔可<sup>レ</sup>有<sup>レ</sup>之候へ私共式申上候も何一ツ御取用可<sup>レ</sup>被<sup>レ</sup>成儀も有<sup>二</sup>御座<sup>一</sup>間敷候へ共古人菟藁ニ  
 詢る之儀今之盛舉ニ御座候<sup>二</sup>付<sup>一</sup>若默々仕居候るは盛舉ニ負き却る如何敷奉<sup>レ</sup>存候且萬一御参考之端ニも相成候  
 ハ、犬馬之愚忠と奉<sup>レ</sup>考無<sup>レ</sup>腹藏<sup>二</sup>左<sup>一</sup>ニ箇條書仕差出申候事

一文武御興隆之干要第一と全く賞罰之<sup>二</sup>柄<sup>一</sup>ニ可<sup>レ</sup>有<sup>レ</sup>之と奉<sup>レ</sup>存候然處賞罰共ニ定格之事ニハ於<sup>二</sup>于下<sup>一</sup>常之事と相考  
 勸懲仕候事も薄く候<sup>二</sup>付<sup>一</sup>豫る得と勤不勤之御穿鑿被<sup>二</sup>仰付<sup>一</sup>置<sup>二</sup>候<sup>一</sup>る実事ニ相叶む候様不時ニ賞罰被<sup>二</sup>仰付<sup>一</sup>候ハ、恩ニ  
 感激仕威ニ恐怖仕候事一段手厚く候る惣体迄相勵一惡を刑し衆惡退キ一善を賞して衆善進む之儀と奉<sup>レ</sup>存候事  
 一惣る賞罰共ニ実事ニ中り不<sup>レ</sup>申候るも出精之者も解体仕無精之者ニハ僥倖仕候様相成賞罰却る害と成り可<sup>レ</sup>申候賞罰  
 ぞ拜領物御答等被<sup>二</sup>仰付<sup>一</sup>候計ニハ無<sup>二</sup>御座<sup>一</sup>候る一語一黙ニ有<sup>レ</sup>之ものニ御座候何分共ニ実事ニ中り候儀干要ニ奉  
<sup>レ</sup>存候実事ニ中り候手段と兼る之御穿鑿と依怙最眞無<sup>レ</sup>之と可<sup>レ</sup>有<sup>レ</sup>と奉<sup>レ</sup>考候事

一小祿の者ニも素より蒙養之御洪恩を蒙り居候事ニ御座候へは文武稽古出精仕萬分の一を報し可<sup>レ</sup>奉<sup>レ</sup>答勿論之事ニ  
 御座候増し大祿之者ニハ家政を經營シ衣食ニ奔走仕候事も無<sup>二</sup>御座<sup>一</sup>候ハ猶更專一ニ相勵可<sup>レ</sup>申事ニ御座候處  
 却る非分之持方ニ拘り或遊戯風流等ニ泥ミ文武稽古怠惰仕御奉公之筋を忽ニ存候者も間々有<sup>レ</sup>之様相聞候是則沃土  
 之民は義をらざるの趣は是等之類と組並之諸役不<sup>レ</sup>被<sup>二</sup>仰付<sup>一</sup>歟或家督御預被<sup>二</sup>仰付<sup>一</sup>候歟何ぞ一廉嚴重ニ被<sup>二</sup>仰付<sup>一</sup>候  
 るも可<sup>レ</sup>然奉<sup>レ</sup>存候又至る小祿之者ニ困窮仕居妻子を育候事も難<sup>レ</sup>成中ニても能々取繕ひ心懸宜敷稽古出精仕候者  
 も御座候處是等之類と一廉之御稱美被<sup>二</sup>仰付<sup>一</sup>可<sup>レ</sup>然奉<sup>レ</sup>存候惣る一旦と破格之賞罰被<sup>二</sup>仰付<sup>一</sup>恩威相立候様無<sup>レ</sup>之ると  
 旧習之風儀相改り兼可<sup>レ</sup>申奉<sup>レ</sup>存候只今ニテハ苛刻之様ニ御座候へ共二三十年之後ニ至り候へは自然と風儀相改り武  
 士トノ其本職ニ怠り申候者有<sup>レ</sup>之間敷刑措不<sup>レ</sup>用と申様可<sup>レ</sup>相成<sup>二</sup>歟と奉<sup>レ</sup>存候刑を無刑二期をると申候表是等之事ニ  
 て可<sup>レ</sup>有<sup>二</sup>御座<sup>一</sup>と奉<sup>レ</sup>存候事

一御賞美之儀一統ニ被<sup>二</sup>仰付<sup>一</sup>候るハ御費多くして却る其詮少く可<sup>レ</sup>有<sup>二</sup>御座<sup>一</sup>候拔群之者御選ニテ一兩人宛御賞美被<sup>二</sup>仰